

---

**ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】**

葵 大和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】

### 【Nコード】

N0303Y

### 【作者名】

葵 大和

### 【あらすじ】

戦の果てに滅亡した王国があった。搾取される日々の中、まだ王国再興という理念を胸に秘める者がいた。最後の王族、没落王国の王子だった。追憶を抱き続ける王子の叫びは世界に再び響くのか。陰謀渦巻く世界の中で、最後の王子が亡国を再興させるために躍動する。

剣あり、魔法ありのファンタジー貴種流離譚。ただし、主人公は戦闘スペックが準最強級です。最初から強めの設定ですので苦手な方はご注意ください。

## 用語辞典（前書き）

固有名詞、設定資料等を五十音順に用語集という形で置いていきます。本編を読み進めるにあたり、情報を補足する形で御利用頂ければ幸いです。

本編自体は用語集を読み飛ばして頂いても話の流れが解るよう極力努めますので、面倒な方はそのまま本編へどうぞ。  
随時補足致します。

【ア行】

《アルトナ族》

魔の素質に優れた種族。人型種。尖った耳が特徴的で、大抵の者が美しい容姿を持つ。尋常でない魔の適性を持つことから、古来より人間に恐れられ、弾圧の対象となってきた。魔力燃料に優れる個体の例に漏れず、平均寿命が長い。自然と伝統を重んじる傾向が強く、自然と共生しながら生きて来た為か五感全般が鋭い者が多い。人間との大々的な戦であるグラン聖戦を経て、一層人間種との溝を深めている。数は人間種よりも圧倒的に少ない。

《ヴァンガード協定連合》

加盟国の相互交流円滑化を根底の理念とし、無条件国境踏破法案、相互関税廃止を始めとした国の相違を取り払う協定を大々的に制定している協定連合群。最高権力者は連合議長ハルメント・ワール・クアンタム。数百年前より議長の名前が変わっていないが、それが襲名に寄るものなのか、長命によるもののかは判明していない。連合議長が公の場に現れる事は殆どなく、公的な運営は加盟各国元首と、各国元首の意見を平等かつ客観的に判断し、異論を唱える権利を与えられている連合議員によって為される。連合本拠地は大陸中央のラシス・システリア王国に制定されている。

《ヴェール皇国》

通称、麗国れいこくヴェール。大陸西北に位置する皇国。南東にはマズール王国、南西にいくつかの小国とエスクード王国が位置している。領土は平均水準の広さ。この半世紀程の間、戦を経験していない比

較的平和な国である。麗国という通称はヴェール皇国の街並みに起因する。自然との共存を理念とした街作りの結果、瑞々しい青と緑に覆われ、さらに、ヴェール皇国の特産品である白香のミール鉱石によって統一された家々が調和し、美しい外観を誇る為である。現皇はエンピオネ・ヴェールという若い女皇帝。

民の気質は前述した自然に対する美意識の高さ。魔術の資質は中の上程。戦をあまり経験していないため、軍力に関しては多少の危うさが見られるが、総合的に見て資質は高い。

#### 《エクシリア大陸》

多くの国が存在する大陸。世界の中心。その面積は広大で、秘境魔境と呼ばれる未踏の区域も存在している。様々な民族、種族、生物が生命を息吹かせる大地。

#### 《エスカリエ》

マズール領の街。行商人の街とも呼ばれる。ガルツヴェルグ公爵特区として存在し、君主としての権利の大半がマズール王ではなく公爵に帰属している例外的な街。エスカリエの行商人達は街に定住する事がないが、中心拠点としてよく活用している。自身が名の在る行商だったことから公爵が行商人の為に活用しやすいよう街を再編、伝手<sup>つて</sup>を駆使し、様々な商業系組織を取り入れた。その為、行商人たちは自分たちに確かな利潤を齎してくれる公爵の方を支持し、居ても居なくてもあまり支障が無いマズール王は半ば無視されている。

#### 《エスクード王国》

独立と中立を貫いた大陸西方の一国。領土は小国水準に分類される。他国との外交貿易は行いが、明確な同盟を締結させたことは無い。自然資源に恵まれ、主にその貿易によって利潤を得ていた。隣国マズール王国との国境線上にて発掘されたレザール鉱山の権利争

奪戦争の果てに滅亡する。国家の中枢である王室関係者は記録上全員死亡されたと言われている。その為、現王は存在しない。

民の気質は温和。しかし、激昂すると暴力の権化と化す。大陸中に所在する様々な民の中で、最も身体能力に優れていると言われている。魔術の才能が皆無であり、自然出産で生まれたエスクード人に魔力が宿ることは無い。

#### 《王剣》

王冠と同義。戦乱色の強い時代に王の象徴、そして力の象徴として飾る国が多かった為、現在でもその風習が引き継がれ、同様に象徴としての役割を持っている。大抵が国宝として扱われるが、エスクード王剣のように剣本来の役割を兼ね備えている場合もある。

#### 【力行】

#### 《神威》（カムイ）

ユーリの両腕に刻印された術式。青白い雷光を腕に纏う。語源は雷 神鳴り。そこから神の威を表すという事でイシユメルが名付けられた。人型種個人で発動させるのはほぼ不可能と言われる程の魔力要求。纏う雷光にはいくつかの能力が付加されている。一つは単純な雷による攻撃力上昇。もう一つは魔術に対する抵抗力。正確には攻撃力である。神威は触れた魔術の術式を斬り裂き、術式に込められた魔力を貫くという。

#### 《キール》

マズール領の街。マズール王国の王都。中心にマズール王城が聳え、中央通りには露店が多く建ち並び、朝から晩まで常時活気に満ち溢れている街である。商業大国の性質上、旅人や行商が多く、露

店以外にも宿泊施設や娯楽施設にも富む。また、マズール王国の軍事力であるマズール騎士団の本拠地でもある。

### 《刻印式》

刻印式魔術とも呼ばれる。術式形態の一つ。魔術式を魔力の資本である身体に直接刻み、その刻印に魔力を送り込む事で魔術を発動させる。普通の魔術師は滅多に活用しない。その最たる理由が、普通の魔術行使が困難になるためである。魔力の資本である身体に直接魔術式を刻むと、別の魔術を発動させるときにその刻印が邪魔をすると言われている。

物に刻印式を施す魔術装具とは異なり、魔力の資本である身体に魔術式を刻みこむため、込められる魔力に制限は無いが、身体を持ち得る魔力量を越えた術式は当然発動させる事は出来ない。また、刻印術式を使用すればするほどその術式は身体に癒着し、抜えなくなる。たとえ刻印された箇所を皮を剥ごうが、肉を斬ろうが、刻印は消えないという。その部位が身体を離れば効力は発揮しないが、言わずもがな最終手段である。その為、一部には呪いの術式などと呼ばれている。

主に魔術式を自らで組めない者が使用する術式形態だが、魔術式を組めない者は魔力自体を持たない事が多いため、現在では忘却されし魔術群ロスベルに分類されている。

### 【サ行】

#### 《生命燃料》

生物の生命力を燃料に例えた言葉。多ければ寿命が長く、少なければ寿命が短いという単純な認識。魔力燃料と関係があると言われている。

### 《セント・シュタットの悪夢》

大陸北方の戦で起こった悲劇を指す。宗教活動が活発な大陸北方に存在する聖シュタッド王国が起こした悪夢。信仰心によって死を価値あるモノと見なすセント・シュタッド王国の魔術兵士達が、国王の命令に従い、同時に超過駆動を起こした。それも、綿密な計画の元に発動された超過駆動術式だった。竜族ですら発動に手間取りそうな超大な魔力燃料を要する魔術式を、千名弱の生命燃料を使って発動させた。その結果、国が一つ滅びた。

セント・シュタッド王国と交戦していた聖剣国家オウミの領地の八割強が吹き飛び、更地になった。発動点がオウミ領の手前だった為、国全体が消え去る事は無かったが、発動点の場所が場所ならば、オウミが一夜にしてこの世から完全に抹消されただろうと言われている。

### 【夕行】

#### 《超過駆動》

魔力燃料が枯渇した状態で魔術を行使する事。また、行使した状態。魔力燃料枯渇状態で魔術を行使すると、魔術は対価として魔力燃料ではなく生命燃料を要求すると言われている。つまり、命を燃やし、魔術を発動させることを超過駆動という。超過駆動を起こすと、たとえどんな術式であろうとも一度で全ての生命が吸い尽くされ、術者は死に至る。その性質からか、生命燃料を使った超過駆動術式は凄まじい効力を齎す事が多い。また、普段の魔力燃料では全てを継ぎ込んでも発動できない術式の発動が可能になる。燃料としての純度のせいなのか、量のせいなのか、正確な事は解っていない。それゆえ、超過駆動を任意に発動させて兵器として扱う禁忌の所



業が過去の戦には存在した。セント・シュタツドの悪夢（サ行にて後述）として語り継がれている。

## 【ナ行】

### 《燃料枯渇》

主に、魔力燃料が枯渇した状態を指す。一部には生命燃料が枯渇した状態も指す。自らの持つ魔力を限界まで使用して空っぽになると、魔術は勿論のこと、肉体と精神の莫大な疲労から立っている事すらままならなくなる。さらに、その状態から無理に魔術を発動しようとする、その際魔力燃料ではなく生命燃料が魔術の対価として搾り取られる現象　　超過駆動（タ行）が起こる。生命燃料が枯渇した者は間もなく死に至る。

## 【ハ行】

### 《白竜》

シオン族と呼ばれる竜族の内の一部族。史実に則った別の竜族の証言では、原点にして頂点と言いつた。下界にてその姿を確認した者はいないと言われている。

### 《物理障壁》

基本的な防御用魔術の一つ。物理的な運動、力に対する抵抗力を持った障壁。程度にもよるが術式自体は簡素。より抵抗力の強い障壁の為にはより緻密な術式構成が求められる。

類似術式に魔術障壁（マ行）がある。

## 【マ行】

### 《魔術》

生物の持つ魔力燃料を基に、事象を現世させる術。魔術発動に必要な過程は全部で三つ。

一、使用したい魔術の式を思考の中で組み込み、編み込み、描写する。

二、魔術式に従い、事象を現世させる為に必要な魔力を組み込む。  
三、魔術式に従い、現世させる事象を思念<sup>イメージ</sup>する。

そして、全てが完了した所で、術者が意識的に事象を現世させる。単純な魔術発動についての三つの要素だが、他にも特異な過程を踏む魔術行使方法も存在する。あくまで一般的な方法、あるいは原則的な手段の一つがこの三つの過程だと認識されている。魔術に造詣の深い民族は、各々、民族ごとに独自の過程で魔術を発動させる事もあるが、大抵の魔術師はこの過程で魔術を発動させる。

魔力燃料と魔術式の説明は後述。

### 《魔術式》

ルーン文字という魔術文字と、魔法陣という幾何模様を組み合わせた式の事。必要な事象を魔術として現世させる為に必要な式。ルーン文字と幾何学模様の持つ効力の組み合わせで様々な事象をもたらす。

### 《魔術障壁》

基本的な防御用魔術の一つ。魔力に対する抵抗力を持った障壁。物理障壁（八行）と比べて術式は複雑。より効力を持った魔術障壁

を作るには、対抗魔術の術式構成に対し有力な構成を選ばなければならぬ。対抗魔術に込められた魔力に反応する類の普遍型魔術障壁も存在するが、効力範囲が広い為術式は複雑になりやすい。それゆえ要求魔力が高い事が多い。とはいえ、物理以上に威力、殺傷力を持つことが多い魔術攻撃に対抗し得る防御術式であるため、大抵の戦闘型魔術師は最低でも一つは魔術障壁の術式を知っているというのが現状である。

また、魔術障壁と物理障壁を重ねる事を二重障壁と呼ぶ。物理と魔術両方に対応できるため、使用する魔術師も多い。

### 《魔術装具》

モノに魔術式を刻印した道具の事。術式起動の為に使用者が直接魔力を流し込む種類と、装具作成者が予め魔力を込めておき、持続的に効力を発揮する種類がある。しかし、前者は魔力の資本である身体とは別個の『モノ』である為、多くの魔力を含有させる事が出来ない。物には身体とは違い、込められる魔力の限界が存在している。ゆえに、強力な魔術式を刻んだ所で発動点まで魔力を供給する事が出来ないという問題があった。余談だが、その点において、魔力を込める対象が魔力の源である身体に存在する場合、己の持つ魔力を限界まで込める事が出来る。(刻印式魔術)

また、後者の持続的な魔力封入は別の才覚が多分に影響する為、その類の魔術装具を作れる者は少ない。

### 《魔女》

魔力燃料を多く生まれ持った人間の女性形を指す。魔力燃料が多いために老いを知らず、長い間を生き続けている者達の総称でもある。現代において、魔女と言う総称はどちらかと言えば悪い意味を抱かせることが多い。人間でありながら、常人から掛け離れた長命を誇る彼女たちは、古来より同じ人間種に恐れられ、排他されてきたという。それゆえ、彼女たちは人里を離れて孤独に生きている事

が多い。魔女である事を知られば、現代でも排他的対象となる可能性がある為である。

#### 《魔力燃料》

略称として魔力。魔術を現世させる為の対価というのが相應しい事象を起こす為の燃料という認識が強いからだ。その他にも様々な効果があると学者間では言われているが、全ての解明は未だに為されていない。推挙すべきは、生物の生命燃料に深く関わっているという事である。魔力燃料を多く持つ生命体は、得てして寿命が長い。かといって、魔力を殆ど生まれ持たない者が短命という訳ではない。ゆえに、あくまで魔力燃料と生命燃料は別個のモノと判断されている。

傾向として、魔力燃料を多く持つ個体は生命燃料を並み以上に持っている、というのが一般見識である。

#### 《マズール王国》

商業大国。大陸西方と大陸中央の間に位置する。領土は大国水準に分類される。商業大国と呼ばれるだけあって、貿易が盛ん。露天商人、行商人が多い。数年前まではどの組織にも属さない独立王国だったが、エスクード王国との鉱山資源を賭けたレザール戦争中にヴァンガード協定連合へ加入。結果、第三次レザール戦争に勝利し、レザール鉱山を独占する事に成功した。一部ではレザール戦争前のマズール王国は経済危機に晒されていたという噂もあるが、真実は明らかになっていない。レザール鉱山奪取後はその豊富な鉱山資源を貿易品として活用し、多大な経済利潤を得ている。現王はスート・フリオ・マズール二世。

民の気質は強欲。その気質からか、交渉事に長けている者が多い。交渉事における抜け目ない強かさもある種の特徴の一つである。魔術の才能は中の下。よく言えば並。魔術分野での大きな成功は見られていない。

## 【ラ行】

### 《ラ・シーク》

完全なる馬との交信者。馬の声を理解する者。古代遊牧民の中に時々この力を得る者が生まれるという。厳密に原理は不明だが、一説には馬の仕草や目の表情等から思考を読みとっているのではないかと言われている。しかし、その説はラ・シークが自分から馬に干渉できる、即ち言葉を馬に理解させる事が出来るのは何故かという説明が出来ない為、信憑性は薄い。彼ら曰く、人と会話するのと同様の感覚らしい。

### 《竜族》

遙か古代より空に生きる生態系最高種。滅多に下界に姿を表さないが、史実では何度か下界に干渉してきた竜族がいるらしい。史実の中の証言を基に、体色によって部族が分かると言われている。竜族は皆瞳孔が縦に細長く割れた黄金色の眼をしており、竜族の膨大な魔力の大半がその眼に宿ると言われている。また、血は黒い。

### 《レザール戦争》

エスクード王国とマズール王国のレザール鉱山資源を賭けた戦。第一次、第二次と軍力は拮抗していたが、第三次レザール戦争に差し掛かるにあたり、マズール王国がヴァンガード協定連合へ加入。連合の多大な軍力を投入し、マズール王国が勝利した。

### 《忘却されし魔術》

ロスト・スペル。過去に術式開発、もしくはその使用が為された

ものの、現在では廃れてしまった魔術群を指す。膨大な魔力が必要な術式や、術式発動に長い年月を必要とするものなど、特殊な術式が多い。刻印式（力行）もその一つである。

## 1話 「亡霊」

少女は夢を見ていた。  
とても哀しい夢だった。

「お前は生きる、ユーリ。お前は別の道を行け」

男が言葉を紡いでいる。

逞しい体躯に銀の髪、真紅の眼。超俗的な容姿。  
飾り気の多い服が言葉を紡ぐたびに揺れている。

「嫌だ！！俺も一緒に行く！！父さん！！」

もう一人。

その男の傍らに少年がいた。彼も銀の髪に真紅の眼を宿していた。  
銀の長髪は背元で紐で結われている。男と違ってその体躯は小さく、  
細く、頼りなかった。

「ダメよ、ユーリ。貴方は生きなければならないの。とても辛いだ  
ろうけど、貴方は生きるの。それだけが私達の願い。だから… 我  
儘を言わないで」

鳶色の髪と同じ色の眼をした美しい女が、少年の傍らにしゃがみ  
込んで彼の銀髪に細い指を絡めた。

その様子を見ていた男が、再び言葉を紡いだ。

「好きに生きる。国に縛られる事もない。王国はここで一度潰える。お前は王子ではなくなる。だから、お前は何をするにも自由だ」

彼は続けて何かを言おうとしたように見えた。しかし、彼は自分の唇を少しだけ噛んで言葉を切った。

その様子を隣で見ていた女が柔らかな微笑を浮かべて言った。

「シャル、貴方って本当に不器用ね。でも、貴方の言う通りだわ。

ユーリ、貴方は貴方の望む生き方をしなさい」

「なら……俺は自分の意志で父さんと母さんについていく」

「忘れるな、お前はまだ王子だ。お前が自由に生きて良いのは王国が潰えた後だ」

「だけどー!!」

少年は食い下がった。少年の眼には雫が浮かんでいた。

「もう言うことは無い。これで最後だ、ユーリ」

「私の愛しい息子、どうか健やかに」

男と女は踵を返した。何も見えない真っ暗な扉の向こうへ、歩を進め始める。

少年は二人を追う。小さな体を必死に動かして。

軽い足音が二人に近づく。その音に気付いた男が、少年の方を振り返らずに儼かな声色で最後の言葉を紡いだ。

「息子を頼んだ 《ゼクシオン》」

【解った】



短い返答は少年の口から発せられたものだった。しかし、その声色は幼さを含む少年の声とは一線を画していて、どこか有無を言わさぬ迫力に満ちているものだった。

いつの間にか、少年の右眼が真紅ではなく黄金色に輝いていた。

「やめろ！！ 俺の口で勝手に言葉を紡ぐな！！」

少年は喚く。その間に、二人は扉の内側と外側の境界線へ足を踏み込んでいた。

少年は再び二人を追おうとする。

だが、彼の足は一步たりとも動かなかった。

「ゼクシオン！！ 身体を返せ！！ 早くしないと父さんと母さんが

【すまない、ユーリ】

少年の口から紡がれる別の声には、哀しみが含まれているように思えた。

「嗚呼

そして、少年の前から二人は消える。真っ暗な扉の向こうへ、音もなく消えて行く。

少年が伸ばした手は二人に届かない。

「っ！！」

少年は吼えた。

真っ白い部屋の中で、たった一人。

亡霊は喋らない、触らない、関わらない、何も紡がない。

「  
！  
リイ！  
リリイ！」

自分を呼ぶ声に、少女は夢から覚醒した。  
目を擦りながら、ぼやける視界の正面に青年の顔を見つける。

「あれ？ 私… 寝てた？」

「ああ、寝てた。爆睡だ。椅子に座ったまま直立不動で寝てるのを見つけた時は さすがの俺も奇跡を信じたよ…」

青年は苦笑しながら言葉を紡いでいた。

きめ細かな白い肌、日光を受けて煌めく長い銀髪は、彼の背元で無造作に黒い紐によって纏められている。目に掛かる前髪の隙間からは、深い真紅に彩られた瞳が覗いていた。一目見れば、誰もが超俗的な印象を得ずには居られない特異な容姿。

夢の中の少年に瓜二つの顔。

「ユーリも時々そうなる癖に」

少女 リリアー又は少し不貞腐れながら言い返す。

「それで、用件は何？」

「鍋が暴れてる」

意識が覚醒してくるにつれて、耳に入るグツグツという音。我に返ったようにリリアーヌが椅子を後ろに弾き飛ばしながら立ち上がる。

「自分で火を止めようとは思わなかったわけ？」

「善処はした。けど止まってくれなかった。むしろ火が強くなっ  
た……」

「ホント… 壊滅的なまでに家事が出来ないよね… ユーリって」

少しだけ毒づきながら、リリアーヌは台所へと急いだ。

幾許か置いて。

青年 ユーリはリビングの椅子に座り、椅子を後方に大きく逸らしながら膝もとに一冊の本を広げて読んでいた。

「題名『エスカード王国が滅びた要因とは』。直接的な題名だなあ」  
「また政治の本？」

リリアーヌが台所で鍋の容体を確認しながらユーリの言葉に反応する。

「端的に言えばな。この本の著者曰く『その最たる要因は、エスカード王の敷いた善政が隣国マズールを始めとする連合加盟国に悪政と見なされた事にある』らしい。エスカード擁護派とは珍しいな。旧エスカード王国の政を『善』<sup>まじつ</sup>と言い切るのは今の時代では難しい事だ。リリィはどう思っ？」

ユーリは目元に掛かる前髪を少し指でどかしながら、台所で家事に勤しむリリアー又に視線を送った。

「ちょっと待って。今そつちに行くから。ん、もう少し煮込もうかな」

リリアー又は鍋の内容物が無事である事を確認すると、再び鍋に火を掛ける。火がついた事を確認すると、首元から掛けていたエプロンを解いて青年の居るリビングのテーブルへと歩を進めた。

青年以上に長く伸びた金糸の髪は、一片の汚れもなく、澄んだ輝きを放っていた。女性にしては背は高い方で、整った目鼻立ち、すらり伸びる細長い四肢、透き通るような白い肌、そしてなによりも、貴石のような瑠璃色の瞳が強い輝きを放っていた。

通りすがりの男性が見れば、一たびに魅了されかねないような容姿と、子供のような無邪気さを伴う動きでユーリの隣に椅子を持ってきて、彼の手の中の本を覗きこむように座り込んだ。顎元にまで伸びる長い金髪を、指で耳元に掛けながら、本に描かれた文字に目を通していく。

「リリイにはまだ早かったか？」

「馬鹿にしてる？」

眉を顰めながら文字を読み進めているリリアー又を見てユーリが笑みを浮かべながら言った。

彼女は目元に力を入れて、ありったけの鋭い視線を上目遣いで彼に送る。

「はは、そう怒るなよ。それで、聡明なリリアー又様はどう思うかな？」

「そんなの　誰も判断出来ないと思う。だって、人にはそれぞれ

れ違う価値観があるから」

彼女の口から出たのは、答えを保留しているような、同時に、酷く世界を達観しているような言葉だった。

「正に。それでも、人は単一の秩序を欲している。少なくとも、でなければ戦争なんて起きないさ」

ユーリは幾許かの寂寥感を瞳に灯し、力無い微笑をたたえた。

対するリリアー又はユーリを心配そうな目つきで見つめるが、彼の瞳はリリアーではなく、自らの内側に向いているようだった。自分の内側に答えを模索しているような。

彼の手も足も表情も止まり、ただ瞳だけが瑞々しげに時折閃いている。

彼女は、不意に彼がそのまま何処かへ行ってしまうような気がして、咄嗟に彼の名を呼んだ。

「ユーリ」

ユーリはその言葉に反応して、一度瞬きをすると、自分の名を呼んだ少女の顔に視線を向けた。

丁度その頃、台所で炊きつけていた鍋が再びぐつぐつと大きな音を立て始めて、彼女は少し焦燥を含んだ声を上げて、台所へ駆けていく。

「焦げる！ 焦げたらユーリのせいにしてよう」

「さり気無く横暴だな…」

その様子を苦笑を湛えて後ろから眺めていた青年は、彼女が煮えたぎる鍋と格闘している間に膝もとの本を畳み、部屋の隅に置かれ

た大きめの本棚に戻した。そのままの足で、彼女の元まで歩み、細い指を彼女の金系の髪に絡めて、一度彼女の頭を撫でた。

「少し外を歩いて来るよ、リリイ」

「うん、気をつけてね」

この平和な村で気をつける事なんかはないよ、と青年は返して、レンガ作りの家を出て行った。

二人が住んでいるのは田舎村の古びたレンガの家だった。

ユーリは家の玄関から出ると、村から少し離れた場所にある丘を目指した。辺りからは日中の仕事を終えた村人たちの声が度々聞こえ、ささやかな活気に満ちていた。すれ違う村人たちに笑顔で挨拶をしつつ、ユーリはただ歩き続ける。

考え事があると、旧エスクード領がよく見えるこの丘に来るようになった。別段、特別な場所であるという訳でもなく、ただ単に静かで、景色がよく見えるから。考え事するには適しているのかもしれない。

（考え事…ね。いつも同じ考え事ばかりじゃないか）

先の事なんて実際に出会ってみなければ解らないのに、と付け加え、自分に言い聞かせるように胸中で言葉を紡いだ。

丘の麓に到着して、そのまま頂上まで昇り切り、その場に腰を下ろす。

沈み始めた日の光が、同じような赤みを漂わせるユーリの瞳をそれ以上に紅く彩った。

同じ輪廻を廻る思考が終着点に至る訳でもなく、しかし、その螺旋の思考を忘れられる程の別の思考が生まれる訳でもなく。

ただ一つの事だけをユーリは考え続けていた。一向に答えが出ない自問。変わり映えのない思考。

そんな無為とも言える時間を過ごしている内に、日が半分以上地平線に隠れ、地に注ぐ光もまばらになってくる。

(今日もまた決断出来ず)

ため息をついて、ようやくユーリは丘から立ち上がった。リリアーヌの待つ家へ帰ろうと決心したからだった。

こんな一日を一体幾度重ね続けてきたのだろうか。纏まらない考えと、定まらない決意に振り回されながら、この身をその場で漂わせる。

【思索の日々がいつまでも続く訳ではないと解っているのに

】

ふと脳裏に過る文字の羅列。嗚呼、その通りだよ、と自分ではない誰かに語りかけるかのように、ユーリは帰り際に呟いた。

丘から村の中に戻ってきた頃には辺りは暗く、村の中に点々と立ち並ぶ街灯の光だけが村の中を静かに照らしていた。思いのほか遅くなってしまう物だ、と思ったよりも時間を長く費やしてしまう自分を叱咤し、足早にリリアーヌの待つレンガ作りの家へと歩んでいく。

遂に家が見えた頃には、周辺から唾液をそそる様な良い香りが出て、都合よく空腹を主張する胃袋を宥めつつ、家の玄関を開けて声を上げた。

「ただいま、リリイ」

「あ、おかえり、ユーリ。あんまり遅いから私が全部食べちゃおうかと…」

「悪かったって」

リリイ又は少し頬を蒸気させてユーリの非を主張する。大人しく彼女に謝罪の言葉を送り、そのままリビングの椅子に腰かけた。

夕飯時。

彼女の作る料理の数々は、商品として出しても遜色ないと思われる程に美味で、いつもながら、彼女のこういった手腕の良さに驚嘆と尊敬の念を抱きつつも、止まらない手でその料理の数々を口元に持っていく。

対するリリイ又は一向に止まる気配がない彼のナイフとフォークに若干の畏怖を抱きつつも、満足げに言葉を紡いだ。

「ホントよく食べるよね…ユーリって。作りがいはあるけど」

「ん？」

「食材費の事も少しは考えて欲しいな？」

「まだ蓄えはあるじゃないか」

「食べながら喋らないの」

「はい…」

喋りかけたのはリリイの方じゃないか、と心の中で言うが、ユーリは彼女の言葉に大人しく従って一度適当に返事をしてからとりあえず口の中の物を飲みこんだ。



「ユーリって品行さえ整えれば高貴な人に見えなくもないのに……」  
「品行方正なリリアー又様に言われると弁解のしようも御座いませ  
ん」

冗談めいた口調でリリアー又の小言を適当にいなしつつ、ユーリは再び口に料理を運び始める。

しかし、鶏肉のソテーを口元にフォークで持ってきた所でリリアー又の些細な拳動の変化に気付いた。

リリアー又の耳が、ピクリと一度だけ脈打った。常人よりも少しだけ長くて、先が尖がっている細い耳が。

口元まで持ってきた鶏肉を一度料理皿に戻し、真剣な顔で彼女に問う。

「どうした？」

「音… 聞き慣れない音がする 馬の足音… かな？」

ユーリも耳を敬<sup>そむ</sup>てるが、馬の足音は元より特に変わった音は聞けない。しかし、ユーリはリリアー又の言葉を全面的に肯定していた。彼女が言うのだから、それは馬の足音なのだろうと。

そして一度思考を巡らせる。田舎村に馬の足音が響く事などまずない。村に厩<sup>やまじ</sup>はないし、野生の馬が訪れる事もかなり稀だ。最も高い可能性は、外部から誰かが馬に乗って村を訪問してきたという可能性。

ユーリはナイフとフォークを静かにテーブルに置き、椅子から立ち上がる。

「リリイはここに居る。俺が外の様子を見てくる」

リリアー又は未だに眼を瞑って意識を聴覚に集中させている。彼

女が聞いた音を、より明確に聞き取るために。

しかし、次の瞬間　ユーリでさえも聞きとれる程の『怒号』が村の中で響いた。ユーリの顔から穏やかさが消え失せる。確実な異変。確信

ユーリが家から飛び出そうとした所で、リリアーヌが咄嗟に声を上げた。

「待って！　私も連れて行って　」

初めは断ろうと思った。しかし、彼女の怯えるような瞳を見て考えを改める。あるいは、彼女は自分の近くに居た方が安全かもしれない。仮に自分の予想が現実になっているとすればだが。逆に、連れて行く事で彼女を危険に巻き込むかもしれない。どちらを選ぶべきか。

自分の判断力が鈍っているという事実をユーリは心の何処かで確信していた。その鈍りが命取りになる事を本能的に察知していながら、それでも、迷いがあった。そして、その迷いを断ち切る術を知っていながら、断ち切る事に一種の恐怖を感じていた。思い出したくない過去が、頭の中で叫びを上げていく。

（我ながら…女々しいな）

自分に向ける嘲笑。

自分で判断出来ないならば、今は彼女の言葉を優先させよう。

「解った　手を離すなよ」

ユーリはリリアーヌの手を取り、玄関を開け、彼女の歩幅に合わせてつつも出来るだけ急いで怒号の出所へ走って行く。

家々を抜け、街灯の光に照らされながら走る。

走っている最中、不意にユーリの脳裏にまた文字の羅列が浮かんだ。

【決断の刻が来た】

怒号の発信地に近づけ近づく程に、怒号は確かな言葉の繋がりとなってその意味を報せていく。村人の声、聞き慣れた声だった。

「近いな」

そして 音の出所に着いた時、ユーリは愕然とした。

「てめえ！ よくも！」

豪勢な髭を蓄えた村大工の一人が、地面に片膝をつきながら怒りの色が籠った声を上げている。何度か大工仕事で世話になった事もあるその村大工には、当然ユーリも見覚えがあった。しかしもう一方。その村大工の男が怒声を投げかけている相手。

見慣れぬ鎧姿の『騎士』である。

一、二、三、……多すぎる。胸中で毒付くユーリ。これでは『騎士団』だ。騎士達の鎧甲冑の左胸には、でかかど《マズール王国》の紋章 鷲の翼と上半身に、獅子の下半身を持つ《グリフォン》の横面肖像 が彫られている。

ユーリの思考はその紋章を見て即座に、彼らが何者であるかを弾き出した。

何故『マズール騎士団』がこんな田舎の村に

そう考えている最中 ユーリの体は咄嗟に動いていた。

怒声を放っていた村大工が、不意に剣を抜き去った騎士の斬撃をまともに受けたからだだった。左肩から胸部を通り、右のわき腹を抜ける袈裟掛けの斬撃。

不味い、致命傷だ、と眼の前の光景を見て村大工の傷の深さを判断する。

力無く横向きに倒れる村大工の傍らに走り出で、傷の容体を確かめる。傷は深いが、胸部の裂傷は内臓にまで届いていない。即死は免れた。だが、放っておけば失血死する可能性がある。

「！」

「喋るな！」

興奮状態が続いている村大工を諫める。動けば余計に血が流れ出てしまう。喋るな、動くな、そう言い続ける。しかし、失血の為意識が朦朧としてきたのか、村大工の声は徐々に小さくなり、同時に呂律ろれつが回らなくなって来る。早く治療を 村大工の様子を見て焦燥を感じるが、その時不意に村大工が震える手である方向を指さした。彼の指さす先に

血に伏す老婆。

ユーリがその姿を見つけた時、ユーリの前に村大工を斬り捨てた騎士が歩み寄ってきて口を開いた。

「我らは《マズール王国》よりこの村の『管理』を任された。ここからでは少し遠いが、十数キルメル先に新たな鉱山が発掘され、その労働資源としてこの村の住人を使う予定だ。村に在住しているのはマズール領において納税すらしていない村民達だ。マズール王国に仕える事が出来るだけ有り難く思え。年老いた者は労働資源とし

て使い物にならないゆえ、切り捨てることにした。これは『報い』だ。《エスクード王国》等という幻想に囚われつづけ、新国家への忠誠を忘れた者達よ。せめて幾許かでも『マズール』を想うがいい』

ユーリはその言葉を聞いて状況を掴む。掴まざるを得ない。その行動の結果を、目の前に提示されているのだから。だが、納得は出来ない。

村大工の胸部から流れる血の匂いが鼻腔を穿ち、意識が混濁する。

【忘れるな、思い出せ】

また、頭の中に文字が浮かんだ。

騒ぎに駆け付けた村人たちは、啞然として立ち尽くしていた。

対する騎士は、駆けつけた村人たちをぐるりと見回していく。そして、その視線はある一点で止まった。

騎士は『リリアーナ』を見ていた。

容易く人目を引く美貌を持つ彼女。目立たない訳がない。だが、それ以外の要素で、彼女が人目を引く理由が在った。ユーリは混濁した意識の中で、自分の行動が裏目に出た事を知る。

【決断しろ】

村大工の巨躯を軽々と持ち上げ、出来るだけ揺らさないように、それでも、出来るだけ早くと焦燥しながら、村人たちが集まっている場所へ寝かせる。

そして、凝視に晒されるリリアーナの元へ戻ろうと一歩踏み込んだ時だった。

血の匂いで思考が緩んでいる隙　　ユーリが今更ながらに不味いと勘付くより早く、騎士は驚愕の声を並べていた。

「アルトナ族　　何故こんな所に《アルトナ族》がいる！」

叫ぶと同時。騎士が物騒な目つきで腰の鞘から剣を再び抜き去った。ずかずかと周りの村人たちを剣を振って追い払い、リリアーナの眼前にまで歩んでいく。

リリアーナを見る眼にはいつの間にか『敵意と殺意』が籠っていた。

リリアーナは一步も動かない。若しくは、動けない。それでも、心の中で達観したように言葉を紡いでいた。

きつと彼は私を殺すのだろう。

それ程までの殺意の視線。彼女は言う事を聞かない手足に対して諦観を抱く事しか出来なかった。

「貴様達は何を考えているのだ！　アルトナ族は人間の敵だぞ！　一体何人がアルトナ族の化物共に殺されたと思っている！　何故殺さない！　《グラン聖戦》の記憶を忘れ去ったか！」

騎士は歩を緩めることなくリリアーナに近づき、彼女の目の前で立ち止まると周りの村人たちにそう告げた。村人たちは反応できない。彼らにとって、《グラン聖戦》という言葉は違う意味を持っていたから。

「エスクード人め……やはりアルトナ族と繋がっていたか。マズール領において仇敵であるアルトナ族を匿うことは重罪である。貴様等の処遇は後々考えるにしても、今この場でアルトナ族が生き永らえることは許されない」

騎士は剣を振り上げていた。

月光を反射する剣を、茫然と見つめるリリアーヌ。一瞬だけ、焦燥を顔に浮かばせて走り寄ってくるユーリに視線を移すが、直ぐにそれを切った。

【迷うな、決断しろ。追憶と思索の日々は終わった】

その光景を十数歩離れた位置から見ていたユーリの頭の中に、諭すような声色が響く。言葉の羅列ではなく、それは確かに音を持っていた。

ユーリにとっては近くて遠い十数歩だった。

迷うな、決断しろ。

その言葉が何度も脳裏で反芻される。自分以外の時間が全て止まったかのような感覚を経て

ユーリは声に従い『決断』を下していた。

数瞬をおいて、騎士が剣を振り下ろす。

だが 剣がリリアーヌを切り裂くより早く、ユーリがリリアーヌの前に走り出でて彼女を庇った。倒れこむようにリリアーヌを抱きかかえ、一振りの斬撃から彼女を守る。

空を斬る剣。

自分の剣が空を斬った事に気付いた騎士は、リリアーヌを庇ったユーリに対して怒りの籠った声を上げた。

「何故アルトナ族を庇う!? 『戦乱の記憶』を忘れたか! その化物を生かしておけばまた人間が殺される! どれ程の同胞が死んだと思っっている! 今すぐ殺せ! その化物を! 殺さぬならばそこをどけ!」

「断る」

ユーリは真つ向から騎士に短い言葉を紡いだ。その顔に焦燥は見えず、迷いも見えず。それ以前に表情が無かった。見る者に何も感じさせない顔。据わった眼だけが騎士を貫いている。騎士はユーリの短い言葉を受け、

「ならば貴様ごと　　！」

ユーリもろとも斬り捨てようと、剣を上段に構えた。リリアー又は騎士の剣ではなく、表情のないユーリの顔を見ていた。その顔を見て、唇を少し噛む。

（結局私はまた　　）

騎士が剣を振り下ろさんと柄を握る両手に力を込め

【思い出せ、戦を。振え、力を。斬れ、敵を。示せ、決断の答えを】

ユーリの軀は騎士の剣に反応した。それは条件反射の様に刹那的で、意志と意思を含まない自動的な反応だった。

ユーリの軀に刻まれた『戦乱の記憶』が呼び覚まされる。

不意に、ユーリの真紅の両眼の片方　　右眼が黄金色に輝きを変え、同時に、ユーリの左掌から光が洩れた。

そして、彼の右手が左掌から『何かを引き抜いた』。剣。

儀礼用と思えるまでの美しい装飾が施された　　剣。  
刹那の動作は流麗で、速く



「何ッ!？」

驚愕の声。それが騎士の最期の言葉だった。

ユーリは左掌から引き抜いた剣を横一線に振った。凄まじい剣速で振り抜かれたユーリの剣は、上段から振り下ろされた騎士の剣と接触し、弾き飛ばす。

即座に上段刺突の構え。

ユーリの顔の横で刃が閃いた。

その状態から、一寸も待たずして繰り出された猛烈な速度の刺突。剣を弾き飛ばされ、状態を崩した騎士に為す術はなく

騎士の心臓を貫く剣は流れ出る赤に染まり、尚も閃く。

ユーリの手には馴染み深い感触が伝わって来ていた。

死の感触。

生気が枯渇していく 否、生気を吸い取って行くかのような。

ユーリは一瞬だけ、些細な感慨に更ける。しかし、その感慨を諫めるように頭の中に再び声が響いた。

【迷うな。 決断した後の迷い程、不要なものはない】

煩い。

誰に言うでもなく、心の中で呟く言葉。

剣を騎士の体から引き抜いて一度振り、その刀身から血を払う。

倒れた騎士を一瞥し、不気味な金と紅の三白眼を後列の騎士たちに向ける。突然の出来事に、他の騎士達は一瞬怯んだが、直ぐに状況を理解したようで

隊列を組んでユーリと相対した。

「リリイ、下がっている」

自分の背後に佇むリリアーナを手で促す。彼女は一言だけ呟いて、促されるまま後退する。

「気を付けて」

何に、とは言わない。

「貴様、自分が何をしたか解っているのか!？」

若干震えている声で、ユーリに問う後列の騎士が一人。それは怒りによる震えなのか、怯えによる震えなのか。ユーリはその言葉に對して何かを言おうと口を少し開いたが、直ぐにそれを閉じた。

理由は明確で、言葉を発している騎士のさらに後ろから剣を振りかざして走ってくる人影が三つ見えたからだ。ユーリは即座に剣を構え直し、迎撃態勢に移る。

まず一人、突っ込んできた騎士が上段から剣を振り下ろすより速く、瞬間的な加速で真正面から懐に潜り込み、剣を片手で構え

胸部を居合気味に横から斬り払った。

刀身を切り返し、左前方から迫ってきた二人目を逆に薙ぎ払う。

三人目は右真横から迫ってくる。自身の背面から挟り込むように振われた剣の軌道をその騎士の手首を目視して見切り、剣が背に直撃する前にその軌道線上に自分の剣を縦に構え、止める。

甲高い金属音が鳴った。

自分の斬撃が止められた事を知り、第二撃の予備動作に入る騎士。しかしユーリはその動作を許さない。

もたれ掛かるようにゆらりと体を騎士に預ける。騎士はユーリに身体を密着させられ、剣を振うだけの間合いを確保できない。ユーリの銀髪が顎の辺りを掠った。

同時。ユーリは右足に膨大な力を込め、下から打ち上げる

ように騎士の腹部に右の肘打ちを繰り出す。

騎士の身体が宙に浮いた。

手甲、脛甲、胸甲、金属製の鎧で体重が随分と重くなっているにも関わらず、騎士の足が地面から離れる。その衝撃は凄まじく、密着という助走の無い状態から繰り出された肘打ちとは思えない威力を内包していた。肋骨が砕け、肺に突き刺さった事を騎士は感覚的に察するが、対するユーリの躍動は止まらない。

宙に浮いている騎士の顎元に向けて、体を捻り、左手で掌底を繰り出す。べきり、と嫌な音が騎士の顎で鳴った。顔の輪郭を变形させた騎士が吹き飛ばす。

「ば、化物め」

その様子を眼前で見せつけられ、最初に言葉を紡いでいた騎士が咳く。

すると、今度はユーリの視界の端で奇妙な光が明滅した。

後列で待機していた別の騎士の仕業だった。騎士と言えども剣は持ち合わせていないその男が両手で包み込むように抱えていたものは人の頭大の『炎の塊』だった。ちかちかと明滅し、燃え盛る炎の塊。

「魔術師か」

「貴様等エスクード人は確かに化物染みた身体駆動を持っているが魔の適正は無い。つまり　ハハハ！　終わりだ、散れ！」

魔術師に視線を移し変える。

その間に、眼の前で言葉を紡いだ騎士が剣を抜き去り斬り掛かってくる。

ユーリは再び視線を戻すと、その騎士の斬撃を軽業師のような軽快な後天で避け、着地と同時に前方に加速、斬り抜ける。背中を纏

められた銀髪の一房が宙を舞った。

そこで、遂に後列の魔術師が動く。魔術師が両手に包んでいた炎の塊が一気に巨大化し、前方に打ちだされる。

ユーリに向かって飛翔する炎弾は、その射程内の大気をちりちりと燃やしながら、遂にユーリの視界の大半を遮る。

だが、ユーリに慌てる様子はなかった。

剣を片手で握り、もう片方の手を顔の横に持って行き、全ての指を伸ばし、揃える。

手刀による突きの形。

瞬間、ユーリの金色の右眼が輝きを増した。

「右腕刻印術式 《神威》」

余りに短い言葉。しかし、その言葉の持つ莫大な効力は直ぐにユーリの右手に現れた。

『青白い電光』。ユーリの右手から最初に小さく、バチ、と何か弾ける音が鳴った。そして、小さく弾けた電光は、数瞬間の間に、大きく、絶え間なく弾け散る雷光と成ってユーリの右手を覆った。

一閃。

閃光のような突きが、飛翔してくる炎弾を貫く。まるで炎を物ともしないように、容易く、軽々と、ユーリの電光を纏う突きは炎弾を刺し貫いた。炎弾はユーリの右手に貫かれると、急に火力を失い、空中分解するように掻き消えて行く。

炎弾を飛ばした魔術師が驚愕の表情を浮かべた。

「魔術だど…？ 馬鹿なッ！ 何故エスクード人が魔術を扱える！？」  
「何なんだ貴様は！！」

ユーリは炎弾を貫いたと同時に即座に走り出し、無防備に喚き散らす後列の魔術師に飛びかかる。残っている他の騎士が剣を構え、魔術師を守る様に進路を変えるが、凄まじい身体速力を誇るユーリに追いつく事が出来ない。そして、ユーリの剣が魔術師の首を切り飛ばした。

一対多数の戦闘は、当初虐殺に近い物になるであろうと思われたが、あるうことか圧倒的な力量差を見せつけたのは一人の方だった。

驚愕の表情のまま宙を舞った魔術師の首が無残にも鈍い音を立てて地面に墮ちる。

それ以降、ユーリに向かってくる者はいなかった。

生き残った数人の騎士が、その光景を見て畏怖によって硬直した手足を必死に動かして撤退を始める。その時、離れていく騎士に聞こえるように大声でユーリは叫んでいた。

「刻め！ そして王に伝えろ！ 我が名は」

旧エスフード王国第一王位継承権所持者<sup>ユーリ・ロード・エスフード</sup>

マズール王国に滅ぼされたエスフード王国の末裔である、と。

亡国の亡霊は叫ぶ。

その存在を世界に報せるように。

必死に、力強く

## 2話 「残月」

騒動から一夜明け。

騎士に切り伏せられた村大工は死んだ。十分な医術が整っていないこの辺境の田舎村ではやりように限りがあった。

そして 村大工と老婆の弔いが行われた。

簡易的な墓の前に集まる村人達。そこにユーリとリリアー又の姿もあった。言葉数は少なく、無言に近い中、ただ鎮魂歌レクイエムを謡う幼い子供たちの声はその場に残響した。

鎮魂歌が止み、一人ずつぽつぽつと村人が去って行く中、初老の村長むらおさ夫婦だけが残り、同様にその場で立ち竦んでいたユーリとリリアー又に声を掛けた。

「これ以上村人たちを混乱させる訳には参りませんので……他の者は帰らせました。礼を失するとは思いますがお許してください。」

単刀直入にお聞き致します。これから……どうなさるのですか？

《王子殿下》

ユーリの正体を村人たちは「知っていた」。故に、敬意を含む言葉で問いかける。

それに対してユーリは、哀しみと自分に対する嘲笑が混ざった複雑な表情を湛えて答えた。

「リリイと共に村を出る。迷惑を掛けた。俺が優柔不断なばかりに、民を死なせてしまった。俺は間抜けな王族だな……」

言葉を紡ぐユーリを見て、村長は涙を流した。

「どうか、そのような事を仰らないで下さい。御自分を御責めにならないで下さい。殿下の葛藤は民を想うがゆえのものです。殿下は優し過ぎたのです。王国再興という大義を胸に秘めながら、再興するには少なからず民が犠牲になる事をいつも御気になさっていらっしやうた。殿下がレザール戦争を生き抜き、この辺境の村に辿り着いた時から私どもは殿下の御意向に添う事だけを考えておりました。私どもは幸福です。先代陛下が崩御されたという報せを聞いて絶望していた私どもに、殿下は新たな希望の道を示して下さいだったのでそれだけで」

「ありがとう。少し、心が軽くなったよ。でも…これからだ。決断したからには必ず王国を再興して見せる。民が帰る場所を示して見せる。負担を掛ける事になるが……」

「何処までも殿下の御意志に御供させて頂きます。民以上に、どうか御身を御気遣い下さい。先代陛下の御尽力で、多くの民が生き永らえる事が出来ました。民は死んでも替えが利きます。しかし、殿下は御身御一人。替えは利きません。あえて無礼を承知で奏上させて頂きます。殿下は民を犠牲にしても、生きて下さい」「心に留めておく。民の声には耳を傾けなければな」

力ない微笑を浮かべて、ユーリは言った。

「ならば、この村を忘れ、御出立為さってください。きっと貴方様はこの村の事を考え、再び苦悩なさるでしょう。それは私どもの望む所では御座いません。お忘れになって下さい。多くを救うための少ない犠牲です。どうか 我らが王子殿下に竜神の御加護がありますように」

最後にそう付け加えて、村人たちは笑顔を浮かべた。ユーリに心配をさせまいと、気丈に振る舞う姿だった。

そして、竜神の加護を祈る。竜神、つまるところ『竜族』は Eskud 王国の紋章である。

普段ならば、自分たちが Eskud 人である事を知らせる情報を口にするのは憚られる物であった。此処は Mzool 領なのだ。しかし、眼の前で佇んでいるのは誰もが敬愛した最後の Eskud 王の息子。先代 Eskud 王シャル・デル・ニエ・エスクードの時代をよく知る初老の村長は、その最後の王の息子を責める事も、助ける事も出来なかった。しかし、彼らは選択し、同時にユーリにも選択を迫る。最後の希望であるユーリに葛藤を抱かせまいと、苦悩させまいと、自らを切り捨てる選択を。後はただ、Eskud 建国に助力したと言われている竜族に加護を乞う事しか出来なかった。

ユーリは考える。

昨日の騎士たちが本拠地　つまり Mzool 王国に戻れば、今回の騒動の詳細は伝わる。Mzool に反逆した旧 Eskud 人の村。其処に存在した仇国の王子。同じく、忌み嫌われた種族の娘。

もう後戻りは出来ないな、と心の中で呟く。

ユーリは村長の言葉を受け、不意に懐から紙切れを一枚取り出して渡した。

「ただ、一つ。民を気に掛けるのが俺の役目でもあるんだ。こちらの言い分を少しは聞いてくれるとありがたいよ。救える民は救いたい。だから一つ俺の願いを聞いてくれ。この地図に記してある場所に先代 Eskud 王の遺産が多少ながら埋められているから、それを資金源にして『逃げてくれ』。数日すれば昨今の Mzool 騎士団が総力を挙げてこの村を潰しに来る。だから　逃げ延びてくれ」

悲痛な言葉を紡ぎながら。



「尚も、私どもを御気になさってくださいるのですか…。解りました、王子殿下がそう仰るのであれば、そう致しましょう。しかし、殿下御自身はどこへ行くおつもりなのか？ 此処は辺境地、それも今やマズールの支配下です。近場に栄えた街もなければ…貴方様にとって周りは敵だらけでしょう」

「それを承知でマズールの王都<sup>キール</sup>へ向う」

「キールへ…ですか？」

村長が目を見張った。わざわざ敵国の本土に向かうとはどういう見なのか。しかし、鋭い決意を宿すユーリの目を見た上で、詳細を訪ねることは躊躇われた。それを止める事は尚更である。

「キールでやらねばならぬ事がある。　　今まで世話になった。

戦の傷は癒えたよ。王国再興の時に必ずまた会おう」

ユーリは踵を返し、リリアーナはユーリの服を掴んだままそれに釣られる様に一度村人に頭を下げて背を向けた。

「ユーリ、村人の皆…大丈夫かな…」

「……」

ユーリの『旅に出る』という言葉を受けて、家の中の物を出来るだけ早く整理し、同時に旅に必要な物だけを選別している最中、リリアーナがユーリに訊ねた。

ユーリはリリアーナの問いに対する答えを持っていた。今から村人総出で村を発つ準備をしたところで　　遅い。

騎士は馬という迅速な移動手段を持ち、また、軍人である以上追

跡の技術もあるだろう。村人の方は、ユーリの了見の所、おそらく村を発つのに三日は要する。何処に向かうかも定まらず、ゆえに廃墟に迷い込まぬ様に、長い間を生き抜ける様に、荷物は多く、幼子や老人が多い事も相まって移動速度は大したものにならない。確実に追いつかれる。

「大丈夫だ。心配するな、リリィ」

心を偽りながら、薄っぺらな言葉しか返せない自分が恨めしかった。

だが同時に、彼らを救う一つの方法も知っていた。

唯一の希望　それはマズール騎士団が追跡隊を放つより先に彼らの本拠地、つまりマズール王国<sup>キール</sup>王都へ向かい、何らかの手を打つこと。そこにしかない。

ユーリは頭の中で廻る思考をそこで一旦切り、旅用のバックパツクに残りの旅品を力づくで押し込んだ。

先に支度を終えていたリリィ又の方を振り向き、彼女にこれ以上の不安は抱かせまいとある限りの理性を総動員して柔和な微笑を浮かべ、短い言葉を紡いだ。

「行こう、リリィ」

リリィ又は賢かった。だから、その微笑が含む意味に咄嗟に勘付いてしまっていた。それでも、ユーリが逆にその様子に勘付かないようにと、彼女も優しいげな微笑を顔に貼り付けて答える。

「うん、行こう、ユーリ」

ユーリは微笑んだりリリィ又の手を取り、彼女の手を掴む手に少し力を込める。この手だけは離すまいと　胸に刻みつけて。

全てを取り戻して見せると、決意を込めて。

最小限に抑えた荷物を背負い、風を防ぐ為の大きめのマントを体に巻き付け、リリアーナと共に家を出た。

さようなら

マズール領      ヴァンガード協定連合法下、王都キール。  
マズール王城内謁見の間

壮大な天使の絵が天井に描かれている謁見の間で、マズール王は耳を疑う報告を部下から聞いていた。少し灰色掛かった山羊髭と、同じ色の長い巻き毛を揺らす初老の男である。淡い緑の瞳はそれとなく狡猾さと隙の無さを見る者に窺わせ、彼が頭上に冠むる金で彩ゴールドられた小さな王冠にはグリフオンの肖像。その頂を得る者が、確かにマズールの王である事を如実に報せていた。

「頭を上げよ。下を向いては報告するのにも難しい。そして申せ、何があつたのかを」

謁見の間の玉座に座るマズール王の前、三段の階段の下側で、片膝をついて報告をしているのはマズール王国独自の防衛力にして、最大戦力である《マズール騎士団》を率いる長      《ケーネ・ヴァスカンド》であった。

短く切り整えられた灰色の短髪。マズール王の言葉に従い、階段状のマズール王を見るその双眸には僅かに青み掛かった水色の瞳。切れ長の眉尻は上に傾いており、彼の瞳に宿る意志の強さを強調させる。

騎士団を受け持つには些か若さが残っているようにも見えるが、

くつきりとした顔立ちと無駄の無い立ち振る舞いには、清廉という言葉が似合っていた。軽装の鎧に身を包み、腰にはマズール紋章の刻まれた幅広の剣の鞘。

ケーネ・ヴァスカンドはマズール王の許しを得、すぐに言葉を並べていった。

「はっ。昨夜、旧エスクード領の土地管理に遣わせた部下が王都キールに戻りました。彼らには旧エスクード領東部の境界を宛がっておりましたが、予定よりも早くに王都へ帰還した部下に理由を問い詰めた所、虚言とも妄言ともつかぬ弁が返って来たので御知らせに参りました次第です」

「虚言とも妄言ともつかぬ言葉を　か？」

「はい、個人の判断で有耶無耶にしまうべきではないと判断致しました。ここに部下の言葉を奏上させて頂きます」

ふむ、とマズール王は少し首を傾げた。

少なくとも、マズール騎士団の末端の騎士の虚言を態々王に伝える訳もなからうと思い、少々の疑問こそあれど、とりあえずはケーネの言葉に耳を傾ける。

「旧エスクード領東部辺境にて、旧エスクード人の隠れ蓑となっていた田舎村を発見。同東部において最近発掘された鉱山の労働資源として活用しようとした所　この点に尽きましては別に私の言葉で述べさせて頂きますが、今は割愛致します　その村で不意の戦闘状況に陥ったようです。しかし、同村にて戦闘状況を継続している最中、ある一人の青年が状況に介入。誠に申し上げるに難き事ですが、そのたった一人に青年に派遣されていた騎士の大半が壊滅させられました」

「エスクード人…か。奴らの持つ『血』は争い事に向いているからな…。多少の犠牲は止むをえまい。それで、報告はそれだけか？」

「いえ、肝心の所が御座います。騎士達は撤退際に、その青年が『伝言』を我らが王へと伝えるようにと言葉を紡いだようなのです。その内容が問題とする所で　彼はこう宣言したのです、我が王

」

我が名は《ユーリ・ロード・エスクード》。

マズール王国に滅ぼされしエスクード王国の末裔である、と。

「《ユーリ・ロード・エスクード》

」

マズール王の表情が一瞬にして曇った。

忘れもしない、とマズール王は心の中で同時に毒づく。

第三次レザール戦争において、唯一生死を確かめる事が出来なかったエスクード王国要人。そして、最も生死を確認しなければならなかった者でもある。エスクード王国の王子は一人だった。シャル・デルニエ・エスクードの妃が子を産むという事に関して、あまり恵まれていなかったからである。そしてその妃はレザール戦争にて没した。この眼で見たからには見間違える筈が無い。とはいえ、シャル・デルニエ・エスクードが没した状態なら、この際妃の生死など些細な問題だった。問題なのはシャル・デルニエ・エスクードがその身に宿すエスクード王の『血の系譜』であり　ゆえに、最も重要なのは、その時点でエスクード王国を継ぐ可能性のある存在の生死である。

「それは真か、ケーネ」

マズール王はケーネに対して真偽を問うが、まずもって、ケーネ自身が部下の言葉を虚言妄言の類と称している限り、彼自身に真偽を決定する材料はない。

「明くまで、で御座います。真実をこの眼で見極めるまでは、私個人では判断のしようがありません」

「いや 構わん。私の方こそ下らぬ事を言ったな」

マズール王は少し苛立った様子で自分の頭を掻いた。

虚言であればいい。むしろ、虚言であつてくれと思う。マズール王はエスクード王族にある種の畏怖を感じていた。そして脳裏に過る最終的な疑問。その青年は本当にエスクードの末裔なのか。

「その者の特徴を部下らは見ていたか？ 特徴について何か言っていたか？」

「御意に御座います。それゆえに、私は此処に参りました」

ケーネはマズール王の言葉を予測していたかのように、即座に言葉を紡いだ。

「部下にその人物の外見的特徴を述べさせたところ」

その者は『銀の髪』と『真紅の瞳』を宿していたと。ケーネは発した。

言葉を聞き、マズール王は疲れ果てたように「嗚呼…」と短い声を上げた。

ケーネはマズール王の様子を見て、個人的な確信を得る。

「虚言ではなかったという事でしょうか」

「……正に。あの忌々しいシャル・デルニエ・エスクードと同じだ。『銀の髪』と『真紅の瞳』はエスクード直系王族の最たる特徴。…間違いないだろう」

最後の言葉はまるで自分に言い聞かせるように呟かれた。

マズール王の意気が消沈していく様をケーネは傍らで見ている。マズール王はエスクード王族を恐れている。そんな事実が眼の前の光景から伝わり、これ以上王を苦しめる事もないだろうとケーネは咄嗟にせめてもの慰めの情報を出した。

「恐れながら陛下、私自身部下の話で奇妙に思う節がありました…」

ケーネは畏まって言った。その表情には微塵の動きもない。

「部下達の話によると、その青年は《魔術》を行使したようなのです。さらにその時、右の真紅の瞳が黄金色こがねいろに変色していたと…」

「魔術…だと？」

誠に御座います、とケーネは端的な返事をする。マズール王は思案するように顎元の髭を何度か指で摩り、声を発した。

「その一点においては何かがおカシイと言わざるを得ないな。エスクード人は古来より『魔術の資質』に恵まれていなかった。自然出産で生まれたエスクード人にはまず魔力が宿ることはない…。それに、金色に染まる瞳か…。ベルマール、何か心当たりはあるか？」

そこでマズール王は思いだしたかのようにふと謁見の間の玉座側から真横に向かって声を投げかけた。

謁見の間の上部から玉座の左右を覆い隠す様に垂れ下がった紅色のカーテンの裏から、一人の男が姿を表す。

「いいえ、陛下、私には心当たりは御座いません」

齡は二十代半ばぐらいか。老獪さをたたえる紫の瞳と、落ち着き払った雰囲気。だがそれとは裏腹に、その男はひどく若く見えた。長い金髪は肩を優に覆い、紫の双眸は言葉を発した後も穏やかな光を灯している。心境の変化を悟らせないような。

「ふむ…『旧エスクード人』のお前なら何か知っていると思ったのだが…」

再び思索に耽るマズール王。

その後に続いた言葉があった。

「シャル・デルニエ・エスクードの下で『王国宰相』をしていたお前にも解らぬか」

「ええ　心当たりは御座いません」

紫の双眸は表情の変化をたたえない。全く動じない微笑を浮かべたまま、ベルマールは答えた。

マズール王は心の中で「何も知らぬ筈はあるまい」と思っていたが、何にしても、この妙に老獪染みた男が情報を口走る事はないだろうとも思い、一旦彼に対する尋問を取りやめた。

「まあよい。　ケーネ、土地管理については継続して行うよう

伝えよ。やり方はお前に任せる。同時に、エスクードの末裔を語るその者の正体を更に正確に調査するよう別働隊を派遣するのだ。その者を捕縛出来た場合は　私の前に連れてこい」

「はっ。御意のままに」

マズール王の王命に対し、ケーネは短い返事の声を上げると、おもむろに無駄のない動きで立ち上がり、一度マズール王に向かって



頭を垂れ、即座に踵を返した。

そこで、マズール王が思い出したように一人ごちて呟いた。

「ユーリ・『ロード』・エスクードか　　大層な名だな」

ベルマールにとっては、いつもの見慣れた謁見の光景だった。しかし、彼は今、歡喜に満ち、そして震えていた。

その感情を愚かにも表には出すまいと、ベルマールは理性を総動員して柔和な微笑を浮かべ続ける。

変化を悟られてはいけない。横で玉座に座り、思案気な顔をしているマズール王に

「陛下、私めにはまだ執務が残っております。先に失礼させて頂いても宜しいでしょうか」

声は震えていないだろうか。

ベルマールは内心に若干の不安を抱きつつ、言葉を並べたてた。

マズール王はベルマールの内心に気付いている様子もなく、ベルマールを尋問すると言うよりも、どちらかと言えば未だに自分の思考に区切りをつけて置きたいようで、少しの間をおいてベルマールの言葉に返答した。

「良い、下がね。末裔について何か解れば逐一知らせよ」

「御意のままに　　」

ベルマールはいつものようにゆっくりと足を動かし、足早になっ  
てはいないだろうか、等の些細な不安を再び抱いて、しかし、よう  
やく王座側にあるマズール王城の廊下への扉を潜り、同じようにゆ

つたりとした動作で扉を閉めた。  
そして声を出さずに、それでも

大きく深呼吸をした。

《ユーリ》。《ユーリ・ロード・エスクード》。なんと聞きなれた名か。

ベルマールにはマズールにおいて最大の『穢れ』とも見なされる過去があった。それはベルマール自身の行いから来る物ではなく、正確にはマズール王によって身に刻まれた後天的な穢れである。

旧エスクード王の側近にして　　エスクード王国の宰相。それがベルマールの過去の身分である。

そんな彼が何故、今ではマズール王の側近をしているのか。  
理由は単純で、解りやすいものだった。

ベルマールは王の側近として最上級の力を持ち合わせていたからである。政治力、戦略力、戦術力、そして　　個人としての武力。全てを高次元で持ち合わせていた。

その脅威性を誰よりも知っていたのは、敵国の元首であるマズール王その人。

一たび反抗すれば、ベルマールの畏怖にすら値する多彩な能力を自分の身に刻まれかねないという状況にある中、それでも、使えるものはどんなものでも活用しようとする意気の強い現マズール王は、ベルマールを第三次レザール戦争終結後に捕虜として確保した際、誓約系魔術とある誓約と制約を彼の体の内に刻み込み、同じく一国の王である自分の片腕として使用することを決めたのだ。

「嗚呼、しかし、何ということだろう」とベルマールは自室で誰にも聞こえないように呟いていた。

ユーリが生きていた。これ程までに歓喜を覚えたことがこれまでにあっただろうか。

仇国の王に仕えなければならぬという絶望に近い暗闇の中で見つけた光。

銀の髪に真紅の瞳、そして 『魔術を行使するエスクード人』

ベルマールは知っていた。

シャル・デルニエ・エスクードの一人息子であるユーリ・ロード・エスクードが、エスクード人として生を受けながらも、ある特異な理由のせいで魔術の資本である《魔力》を躯に宿している事を。

どう考えてもユーリだ。何度も確かめるように頭の中で反芻する。愛する友の息子。あるいは、自分の息子のように可愛がったエスクードの第一王子。

そして ベルマールの胸にはマズール王に仕え始めてから心の奥底に沈殿していた光と決意が浮き上がっていた。

「これで、私にもやらねばならぬ仕事が増えたようです」

全うしましょう、最後の君の命…否、願いを

ベルマールはほんの一瞬だけ決意の籠った鋭い視線を自室の窓から外に見える空へと投げかけ、しかし、次の瞬間には直ぐにいつも通りの微笑を浮かべていた。

### 3話 「景色」

村を出て数日。

徒歩での移動は思っていた以上に辛い。軋む足腰。

荷物は食料が減ったことで徐々に軽くはなつたが、蓄積する疲労を考慮するとあまり意味はなかつた。

なにより、ユーリは危惧していた。リリアーナの事を。

ユーリはその生まれから、身体的強度が並外れている。そのユーリでさえ、連日の徒歩による移動で若干の痛みを足腰に感じ始めていた。身体強度が並の人間よりも脆いアルトナ族である事を兼ねても、リリアーナにとっては予想以上に辛い行程な筈だ。

「リリイ、疲れてないか。大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。私は大丈夫」

何度訊ねても、彼女は大丈夫、と言い続けた。

まさか、大丈夫な筈などないのに　ユーリはリリアーナの精神力に感嘆しつつも、彼女が頑なに弱音を吐かない理由を知っていた。それでも、彼女の為に長い休息を取る事は出来ない。その遅れが民を殺してしまうかもしれないから。もどかしさだけがユーリの胸に募<sup>つ</sup>っていた。

「ユーリこそ大丈夫？」

額から大粒の汗を流しながらも、彼女が笑みを浮かべてユーリに言う。

「ああ、俺は大丈夫だよ。このくらい大した事ないさ」

レザール戦争の時に比べると、という言葉が続けて出そうになったのをユーリは理性でなんとか押し留めた。「戦乱の記憶」をリリアーに思い出させてはいけないと理性が叫んでいた。しかし、言葉で出さなくともその記憶は『景色』に映ってしまう。

ユーリとリリアーが今居る場所は、エスクードの旧市街 旧エスクード東端の街 《旧エスクード領ファスレア》。建物は崩れ落ち、焼け爛れている。過去、緑の映える美しい街だったファスレアは荒れ果てた荒野と、黒ずんだ瓦礫の街にすり替わっていた。景色は無音で二人に語り掛ける。

無言でいるのが辛くなったのか、リリアーが率先してユーリに話しかける。

「ここら辺は 昔は綺麗だったのにね…」

「ああ…。本当に…綺麗な街だった」

それでも口は凄惨な光景を代弁するばかりだった。昔の姿を知っているからこそ、今の姿と比べてしまう。

幾ばくか歩き続け、旧エスクード領ファスレアを抜ける頃には日が暮れ始めていた。

このまま夜になるまで歩き続けて野宿をするより、ファスレアの比較的傷が少ない建物の中で一夜を過ごす方が安全だろう。風を遮る建物があるだけで、休息の効果は数段上がる。そう思い、ユーリがリリアーに言った。

「今日はどこか安全な建物で一夜を過ごそう。明日頑張れば、どうにかキールには着けそうだ。リリイ、それでいいか？」

「うん」

リリアー又は笑顔で答える。

疲れはあるだろうに。

リリアー又の健気さはかえってユーリに罪悪感を募らせた。

人の居ない街というのは現実味が薄れていて、不気味さと幻想的な郷愁が相まって不思議な感覚にさせられる。

それもユーリにとっては一時的な感情だった。

人々で賑わっていた頃の面影を知っているからこそ、虚しくもなる。

そんな微妙な感情の遍歴を繰り返している中、比較的痛んでいない建物を見つけたので中へ入ろうとした。

そこでユーリは何かに気づいたようにリリアー又をその場で制止する。

「倒壊する危険がないか、俺が見てくるからリリイはここで待っていてくれないか」

「うん、行つてらっしゃい。気をつけてね、ユーリ」

リリアー又は文句一つ漏らさない。

細い四肢を擦りながら、所々灰に汚れた美しい顔にほんの少しの無理をたたえた笑顔を貼り付け、ユーリを送り出す。

ユーリは彼女の顔に纏わりついた灰を指で優しく落としてから、一歩、一人で廃墟に足を踏み入れた。

違和感の正体は余りにも呆気なく　ユーリの眼前に姿を現した。

床に散乱する灰色の物体　　薄汚れた人骨。

ユーリはそれを見て何の動揺も抱かなかった。

其処に骨が在るのは何もおかしい事じゃないから。当然なのだ。それに、見慣れている。

ファスレアで何人が死んだと思っている、とユーリは自分に語りかけた。

感傷も何もなく、ユーリはすぐに引き返し、首を傾げているリリアーナに声を掛けた。

「天井が少し倒壊しているから……他の家を捜そう」

さりげなくリリアーナの手を取って、足早にその廃墟から離れた。そうだ、思い出せ、此処は戦乱の火の粉が降り注いだ街なのだ、と心の中に言葉が生まれる。今こうして歩いている道端に人の残骸がないのが不思議な程に、此処は荒れた土地なのだ。

それでも、リリアーナは気付いてしまっているかもしれないが、せめて、少しでも、過去を思い起こさせる『モノ』は彼女には見せまいと今まで以上に歩く道に気を配って、ユーリはリリアーナを連れて歩いた。

仮初の平穏がある廃墟を捜しに。

ようやく見つけた仮初の平穏を手繰り寄せるように、比較的綺麗な建物を見つけたユーリとリリアーナは、建物の中に入るや否や適当に荷物を地面に敷いて眠りに就いた。

風避けがあるとはいっても夜は冷える。リリアーナの身体は少し震えていた。

それを見たユーリは寝る間際、先にリリアーナが就寝した事を確認し、自分のマントと衣服を脱いでリリアーナの身体の上に被せた。目元に掛かるリリアーナの金系の髪を指でどかし、小さく寝息を立てている彼女の頬を軽く撫でる。

「ゆっくり御休み、リリィ」

彼女を起こさないように、彼女を頬から手を離して地面に寝転が

る。上半身の衣服を脱いで半裸状態のまま、地面に敷いたバツクパツクを枕にして眼を瞑る。

寒さに耐えるように腕を体に巻き付け、睡魔に身をゆだねた。

だが、寝てから大した時間も経たないうちに、ユーリの意識は再び覚醒していた。

目が覚めた瞬間、自分の身体が妙に熱くなっている事に気付く。

長い距離を走り抜けた後のように呼吸が乱れ、頭の中が乱雑に揺れていた。

混濁した意識の中で、自分の身体に何が起こっているのかをなんとなく理解していた。

建物の中に転がっていたガラスの破片を拾い、咄嗟に自分の顔を映した。

「くそっ」

静かに悪態をつく。

右眼が黄金色に輝いていた。

瞳孔は縦に割れ、焦点を合わせるように微動している。

右眼を発生源として、妙な違和感が体全体に走った。虫唾が体の中を駆け抜ける感覚。

もどかしさだけが蓄積していった。

そのもどかしさを発散させようと条件反射的に体に力が入る。

【耐え切れないのなら、右眼を潰せ】



混濁した意識の中で、一つの声だけがはっきりと響いた。

声に従うように、ユーリは手に持っていたガラスの破片の鋭利な角を自分の右眼に狙いを定めて振り下ろす。

だが、寸での所で理性を働かせ、逆の手でガラス片を握る手を止めた。

虫唾は走り続ける。

(駄目だ。俺にとってこの右眼は必要なモノだ)

声は響き続ける。

【何故、お前だけがこんなにも辛い思いをしなければならない】

辛い。ツライ。

【いっそ全てを投げ出してしまえば良い】

そうしようと思った時もある。

【父の想いを汲むのか。だが父は言った。好きに生きると】

だからこそ、好きに生きると決断したからこそ、此処にいる。

【己に対する欺瞞だな。母も言った。好きに生きると】

違う。これは俺が望んだ道だ。

【もう一度言う。耐え切れないなら、右眼を潰せ】

「お前は優しいな、《ゼクシオン》」

ユーリは微笑を浮かべて言葉を紡いでいた。

【……】

声はそこで途切れた。

ユーリは手に持っていたガラス片を握りつぶした。手の中で鋭い痛みが走り、次いで、血の暖かさを感じた。

身体の中で蠢く違和感は消えない。それでも、痛みでそのもどかしさを消し去ろうと、強くガラス片を握り続けた。

隣で寝ているリリアーナを見る。

彼女の身体の震えは止まっただけで、その事にユーリは少し安堵する。

彼女を起こさないように足音を消し、ガラス片を握り続けたまま歩を進める。

建物の外に出て

「嗚呼……くっそ

」

小さく呟きながら両膝をつき、すく蹲る。

早く消えてくれ。そう身体の中で蠢く虫唾に対して言葉を紡ぎ、ユーリは耐え続けた。

ケーネ・ヴァスカンドはマズール騎士団の一個小隊に例の辺境地の土地管理を慎重に行う事を命じた後、ベルマールに呼ばれて彼の自室に向かった。

数々の豪華な部屋が存在するマズール王城の中であるのに、ベルマールの部屋はたいして大きな部屋ではなかった。

宰相という王の右腕でありながら、質素な部屋で生活するベルマールにケーネは多かれ少なかれ好感を抱いていた。もちろん、それはベルマールなりのマズール王国への反逆なのかも知れないと理解してはいるが、そんな様子を微塵も見せないベルマールをやはり優秀だと思っていた。

既にその才覚の数々を見せつけられてもきた。

何より、ケーネにとって、ベルマールは身分の違いはあれど気兼ねなく話が出来る友のような存在だった。身分上、言葉はいつも堅くなってしまおうが。

相手の話を何の文句もなく聞き、親身に答えてくれる。能力をとっても、人格をとっても、信頼を置くには十分だった。

そんな事を考えている内に、いつの間にかベルマールの部屋の扉まで辿りつく。

扉には《王国宰相執務室》と彼の役職を表す言葉が描かれたプレートが掛かっていて、また、そのプレートに書いてあるのが彼自身の名前ではないのが少し気がかりだった。

(いや……仕方ないか)

彼は旧エスクード王国宰相なのだ。仇国の王城に自らの名前など書きたくもないのだろう。

「失礼致します」

ベルマールの自室の扉をノックして声を上げる。

中から「どうぞ」と柔らかな声色が聞こえてきて、ケーネは扉の取っ手をゆっくりと回した。

「急に呼び出しまして申し訳ありませんね、ケーネさん」

「いえ、ベルマール様のお呼びとあらば 何時でも迅速に駆けつける所存です」

「ケーネさん、私に『様』等の敬称を態々付ける必要はありませんよ。私は貴方が憎むべき旧エスフード人なのでですから」

優しげで、少し妖艶な笑みを浮かべるベルマール。

その紫の双眸に貫かれると、自分の感情を全て読み取られてしまいうそで、ケーネは咄嗟に視線をベルマールの双眸から外した。

「そうは参りません。ベルマール様は王国宰相です。私より身分が高いのですから、敬称は無くしてはならないものですよ」

そう言いつつも、実の所、前提としてケーネはベルマールを憎んでなどいなかった。

「貴方も『御堅い』ですね。いやこの場合は律義とでも言いましょうか。時には羽目を外しても良いと思うのですが まあいいでしょう。ともかく、お入りなさい」

「はっ、失礼致します」

ケーネは一度頭を垂れて、いつも通りのきびきびとした無駄のない動きでベルマールの用意した椅子に腰かけた。

「それで 話と言うのは？」

「ええ、実はケーネさんに御願いたいことがあります…」  
「なんででしょうか」

「 っとその前に、最初に質問を一つ。マズール騎士団を例の村へ再派遣させましたか？」

「はい。先ほど二個小隊に明日例の村へ発つようと それがどうか致しましたか？」

「いえ、実はこの時分にあの村の周辺は特別風が強くなるので少し騎士団の派遣をずらしてはどうかと思いましたがね。移動手段の馬が余計に疲弊するでしょう。急ぐ以上に、逆に膨大な日数を費やしてしまうかもしれません。自然に逆らうのは得策ではありませんし、どうせなら安全に後日進行させてみては、と提案しようと思方をここへ呼んだのです。その風は短期間のものですので数日すれば止むと思いますし、土地管理に支障はないでしょう」

「それは 確かですか？」

「ええ、何と言っても、私は旧エスカード王国の宰相でしたから。母国の情報は頭に入っています。ちなみにその風は《ハリネ》という突風帯でして、旧エスカード地方を時分毎に転々とする厄介な風なのです。毎年作物類に被害を与えるので好かれる物ではありませんでしたね」

「……陛下はなんと？」

「私に任せて下さいました」

王が任せるというのだから、彼の言葉は正しいのだろう。同時に、従うべきなのだろうと思う。

ケーネはベルマールの言葉に頷き、直ぐに返事を返す。

「そうですね。ならば、急遽日時変更を伝えてきましょう」

「ありがとうございます。宜しく御願いますね」

ベルマールが笑顔でケーネに礼を言う。

解りました、と小さく頷いてケーネは椅子から立ち上がった。再び一度だけ頭を垂れて、踵を返す。

ケーネが部屋から出るべく扉に手を掛けようとした所で ベルマールが小さく呟いていた。

「貴方も過去の楔くわくに縛られるのではなく、今の己の心のままに

行動なさい」

それはとても小さな声だったが、ケーネの耳は確かにその言葉を捉えていた。

「それは私に対するの言葉でしょうか？」

ベルマールは言葉を濁し、苦笑しながら、いえ独り言です、と返した。

「では失礼致します」

「御苦労様です。伝令、頼みましたよ」

「御意のままに」

願わくば、彼が己の名誉を取り戻しますように。  
ベルマールは胸中で一人ごちて呟いた。

#### 4話 「魔女」

ユーリとリリアーヌがマズール王国の王都キールに着いたのは廃墟で一夜を過ごした次の日の昼過ぎだった。

足腰の軋みは溜まった疲労のせいで断続的な鈍痛を抱かせる程になっっていた。

ようやく徒歩での旅路に休息点を見出し、心の底から嬉しさと安心感が押し寄せてくる。

「やっとだな」

「もう私歩けない。あと一年は歩きたくない。一年と言わず一生歩きたくない。ユーリーこれから一生私を背負ってー」

「それだけ冗談が言えるならまだ歩けるだろ…」

リリアーヌは終着点であるマズール領キールの外観を眺めながら、怨念の混じった声色で呟いた。

数日間に渡る旧エスフード領踏破行程で、満足に水を浴びる事も出来ず、リリアーヌの金系の髪は砂に塗れ、所々毛先が飛び跳ねていた。それを手で何度も抑え、元の方向に戻るよう慣らしてはいたようだが、最後の数日には結局戻らないという事実を悪態と共に受け入れ、慣らす事もしないようになっていた。その変化をユーリは面白がっていたが、当のリリアーヌは冗談じゃないと毎回ため息を吐いていた。

兎にも角にも、無事に王都キールへ辿りつく事が出来たのは、二人にとって良い出来事だった。

急に気が抜けたのか、リリアーヌが足を少し震わせてその場へたり込む。

ユーリはリリアーヌに満面の笑みを向け、言葉を紡いだ。

「よく頑張ったな、後で飴玉を買ってやる。」

「飴玉だけ？ 私の苦勞は飴玉と同価値だってユーリは言うんだね。」

「待て待て、違つて。冗談冗談。好きな物を一つ買ってやる。理想的な交渉条件だと俺は思うが…？」

ユーリの言葉を受けたリリアーナが、咄嗟に嘘か真か判断出来ない程の繊細な演技を見せつけた。手で目元を覆い、すすり泣く様な声を上げて、肩を震わすリリアーナ。

突然の出来事に狼狽したユーリは恐る恐る別の交渉条件を持ち出してリリアーナの様子を窺う。

「…一つ？」

すすり泣きがピタリと止まり、今度はユーリの眼を上目遣いで覗きこむ。もちろん目元に涙など浮かんでいなかった。してやられたとユーリは頭を一度抱え、さらなる交渉を持ち出して来ているリリアーナに根負けし、遂に負けを認める。

「解った…二つ買う…でもこれ以上は駄目だぞ、二つまでだからな。」

「ふふつ、ユーリって泣き攻めに弱いのかな？」

リリアーナの方はしてやったりと口元に怪しげな笑みを浮かべていた。

小さく笑い、ユーリの弱点を露骨に示唆してくる。

リリアーナの得意げな声色に、ユーリは「リリィにやられると判断がつかないんだよ、全く…」とほんの少しだけ毒付いて、それでも洪々彼女の言葉は肯定した。



その後、再び足腰を叱咤し、王都キールの関所まで歩を進める。ユーリは荷物の中からローブを取りだして着込んだ。ローブのフードを目深に被り、銀の髪を出来るだけ隠す。

いくら Eskud 王族が死んだと思われてはいても、隣国の王都には Eskud 直系王族の外見的特徴を知る者が多く居るだろう。

どちらか片方ならばともかく、銀髪と紅眼が同時に眼に入れば誰もが一度は振り向くかもしれない。

『今の所』はユーリも面倒を避けたかった。

結果から述べると、入街の手続きはすんなりと終わった。

商業大国に訪れる行商人や旅人は多く、その全てを関所が入念に検査するという事は無かった。

「まさか Eskud の王子がわざわざ仇国あいつのど真ん中に訪れているとは誰も思わないよなあ」

「少しは仇国らしい対応を見せて欲しかった？」

「そういう気持ちが無いとは言わないが、ここまで容易いと逆に不安になるんだよ」

ユーリは先日マズール騎士に名を名乗ったことを思い出す。彼らは不測の事態を王に伝える為、騎士団の本土で王の現在地であるこのキールに戻ってきているだろう。

マズール王は騎士からその報告を経て、何も行動を起こさなかったのか。あるいは、自分がまさかキールに来るとは思わなかったのか。

「いや、俺の希望なんかどうでもいい。村の人達を救う事が

先決だしな」

容易い分には良い。困難を自ら求める程の余裕は無い。そう自分に言い聞かせ、遂にユーリはキールへの一步を踏み込んだ。

次の瞬間、目の前には煌びやかに栄えた街が映し出された。

人々で賑わう広場、通り。そのあちこちには衣服や宝石、香辛料を初めとした食物類、さらには動物に至るまで、様々な交易品が所狭しと露店という形で売り出されている。ユーリ達と同じような旅人風の人々が背荷物を背負いながら、馬車から降りながら、露店の店主相手に交渉を繰り返している。

暖色系の色で整えられた家々の壁がより一層街の活気を促す。視覚的な豊穡。耳に入る多数の人の声。栄えている故の騒音。

そして 街の中心で天高く聳えているマズール王城。

自分でも不思議なほどに、それらを体験してもユーリに大した感情は生まれなかった。仇国の本土というのは頭で理解しているが、それでもユーリの心に動揺を生まなかった。

心象風景に残っている戦の傷が疼かないのならそれはそれでいい。思いのほか冷静さを保ちながらユーリはキールへさらに足を踏み入れた。

街に入って真っ先に脳裏を過つたのはリアーナについての事柄だった。

リリアー又は《アルトナ族》と呼ばれる種族の娘だった。

今はユーリと同じような大き目のローブのフードで隠れているが、彼女の耳は常人と違って少し尖っている。街中を通り過ぎる分では気付かれることも少ないが、もし間近で、フードを外した状態で耳元を見られればひとたびに彼女がアルトナ族であると気付かれる。アルトナ族の端的な容姿の特徴がその尖がった耳だからだった。

国家の基盤にアルトナ族差別が根深く張っているマズールの王都でリリアー又の存在を悟られるのはなにぶん都合が悪い。常にローブを身に着けていられるとは限らない。

（念を入れておくべきか）

胸中で考えて、実行に移す。

「リリイ、宿を見つけたら買い物にいかないか？ さっきの報酬の一つ目として、何か買ってやるから。疲れてるかもしれないが」

「行く！ 早く行こうユーリ！」

ユーリがリリアー又を連れ回す事に対する言い訳を並べたてようとした時、リリアー又はいつにもまして澆刺とした声で即座に返事をした。余りの声の大きさと、鬼気迫るような表情にユーリは面食らった。

苦笑を浮かべる。だが、同時に、彼女が何故それ程に自分の提案に喰いついたのかが解ったような気がして、自分の今までの行動彼女と共に何かを買いに行くなどほとんどしてやれていなかった自分を少し呪った。

キール程栄えた街なら宿などいくらでもあるもので、思いのほか

宿の手配は早く済んだ。

部屋のほとんどの面積をベッドに取られている狭い宿だが、ベッドが二つある事と近場に料理店がある事を考慮し、何より宿賃の安さゆえ、そこに泊まることを決めた。

長期滞在は仮定の中から除外していたので、最低ユーリがマズール王城で『策』を施すのに必要な二日か三日の間だけ滞在出来ればそれで問題はなかった。

旅荷物を宿に置き、貨幣の入った革製の茶色い貨幣袋だけを腰のベルトに紐でしっかりと括りつけ、リリアー又と共に宿を出る。

通りに展開された数々の露店を見て回り始めた。

リリアー又の好奇心は尽きる事が無く、彼女は様々な物を見て回った。

よくよく考えても見れば、第一に、彼女にとってはキールのような栄えた街へ来ること自体初めての体験だったのだ。

その細い体のどこにそんな体力があるのか、と少し皮肉でも言つてやろうかと思つたが、楽しそうに動き回る彼女を引き留めるのも気が引けて、結局言わずじまいだった。

いくつかの露店を過ぎ去り、隙間なく並んでいた露店も点々とし始めた頃、不意にユーリがひっそりと佇む一つの露店を見つける。

魔術装具まじゆつそぐと呼ばれる体に身に着けるタイプの魔術用品が並ぶ露店だった。

怪しげな宝石が括りつけられたイヤリングや、難解なルーン文字が刻まれた金のブレスレット、同様のベルトや小剣に至るまで、様々な種類の魔術装具が置かれていた。

店主と見られる女は顔の下半分を怪しげな黒く薄いマスクで覆い隠しており、頭に被るいかにもと言つた風の《魔女帽子》と合わせ、顔をよく見る事が出来なかった。

露店の前で立ち止まったユーリに店主が気付くと、張りのある高

い声で言葉を投げかける。

「入り用かね？」

「ん、ああ、隠蔽効果を促す類の魔術装具は置いているか？」

顔が見えない以上、顔からは店主がどれくらいの年齢なのか判断のしようが無かったが、声色から店主が若い女である事はなんとなく理解できた。

するとそこへ、ようやくリリアーヌが追いついてきて、ユーリの隣まで走ってきては目の前に並ぶ魔術装具の数々に目を見張り、驚きの声を上げる。上げまくる。

その様子を見ていた露店の店主は「ほう」と一度短い声を上げ、ユーリに対して言葉を紡いだ。

「《アルトナ族》か。確かに、この娘が街を歩くにはお前の言うような魔術装具が欲しい所だな」

不意の言葉。

リリアーヌがアルトナ族である事が一目でバレた。

何故だかは解らない。耳は隠れているし　だが、どちらにしても此処はキールだ。

不味い、と一瞬身構えるユーリ。

露店の店主はそのユーリの様子を見て、妖艶さを伴う仕草で含み笑いを上げた。

「フフ、そう身構えるな。私はその娘をどうこうしようとは思っていないぞ？」

彼女の言葉が真実であるかどうかは未だに判断しきれないが、少なくとも彼女が即座に行動を起こす気はないと確信を得たユーリは、

渋々といった表情で身構えていた体から力を抜いた。

「それで、隠蔽効果を齎す魔術装具だったな」

「ああ、大仰な物じゃなくていい」

特徴的な耳元を人々の眼から遠ざける事が出来れば、と付け加え、ユーリは店主を見た。

店主の女は露店内の魔術装具を物色し始め、少し経ってから一つのイヤリングを差し出した。

「このイヤリングは人の視線を特定箇所から外す効力を持つ。周りの者の意識に訴えかける種類の魔術装具だ。効力は……そうだな、半年は持つだろう。効力射程外から見られたり、深く魔術に通ずる者に長々と見られたりすると効力は意味を為さないだろうが、前者は余程の視力を持っていなければバレることはない。後者に関して、は余程の魔術的資質の持ち主でなければバレはしないだろう。この街でそんな者に会う事などほぼ無いから安心するといい。あと一つ、一度この魔術装具を見破った者には以降効力を発揮しない。一度でも意識に本当の姿が映り込んでしまうと、当然の事、大した効力は得られなくなるという事だ」

ユーリは彼女の言葉に少し考えを巡らせる。

いつまでもキールに留まる訳ではない。効力としては十分か、と一度頷いて、ユーリは言葉を紡いだ。

「解った、それでいい」

「交渉成立、だな」

彼女はそう言いながら、指を三本立てて見せる。ユーリは一拍置いて、その意図するところを知ると

「銅貨三枚か？ 銀貨三枚か？ まさか金貨三枚じゃあるまいな」

「青年、交渉事をする時は金を得る側に判断を求めてはならない。強引にでも、自分の欲する条件を押し付けたまえ。でなければすつからかんになるまで搾り取られてしまうからな。特に、マズール人のような交渉事に長けた民を相手にする時は。 まあ私はマズール人ではないが」

ユーリは彼女に振り回されているような印象を得た。不思議で、魅惑的な 声そのモノに魔力が籠っているかのような声音。彼女の言葉は意識の奥深くにまで響く。

ふと脳裏に浮かんだ疑問をなんともなく彼女に投げかけた。

「なら一体何者なんだ？」

彼女はその言葉を受けて、また小さく笑った。そして紡ぐ

「私か？ そうだな… 言うなれば ほくねんじん 朴念仁シャル・デルニエ・ Eskuroidの愉快な仲間達の一人だ」

フフフ、と笑い声を付け加えて、彼女はそう言った。

ユーリの思考は止まる。

何故彼女から父の名が発せられたのか。

そんな中、続けて彼女が言葉を紡ぐ。

「お前の行動は見透かされていた、ということだ。お前の父にな。

《ユーリ・ロード・Eskuroid》よ 『やっと見つけた』」

「何故俺がEskuroid王族の末裔だと」

「解らないとも思ったか？ 阿呆、そんな訳あるまい。少なくとも

も、世間一般に言う所の最後の Eskud 王 シャル・デルニエ・ Eskud を知る者ならば、お前の身に宿る銀の髪と真紅の瞳を見ればお前が何者かなど直ぐに予想がつく」

ユーリはフードの隙間からほんの少しだけ見えている自分の銀髪に触れた。

「通りすぎる分には見えないだろうがな。細かく観察していれば、気付くには気付く。まあ、たとえ見えたとしても、大抵の者は『 Eskud 王族は滅びた。他人の空似だ』と思う。ところが私は『 Eskud 王族の末裔はまだ生きています』と信じていた。私は受け流さない。何故なら、ここでお前を待っていたから。お前から私に声を掛けなくとも、私からお前に声を掛けていたよ。一体何年の間待たされたと思っておる」

彼女はそう言うと、マスクを手で剥がし、ユーリとリリアーヌに素顔を晒した。

「お前の母になるかもしれない女顔だ、よく目に焼き付けて置くが良い」

「はい？」とユーリは呆けた声を上げた。

ともあれ、彼女の素顔は即座に目に焼きつけられる。

闇をたたえているような、真っ黒で少しウェーブが掛かっている髪。柔らかい輝きを放つ紺色の瞳。クッキリとした目鼻立ちはどこか気の強そうな印象を齎す。

ユーリが呆けていると、彼女が続けて言葉を紡いだ。

「実際は『ソフィア』に取られてしまったが…まあ、アレも中々に良い女だった。仕方あるまいて……」



「おい、泣いてるのか？」  
「泣いてなどおらん！」

とは言いつつも、彼女の目元が潤んでいたのユーリは確かに見た。訳が解らないまま彼女の言葉を聞き続けるユーリ。対する彼女は目元をゴシゴシと拭い、また言葉を並べたてて行く。

「それにしても、よく似ておる。髪と瞳はシャルのものだが、その他はソフィアに瓜二つだ。美しく産んでくれた母に感謝するが良い。父よりは幾分王族らしいぞ」  
「解るように話してくれよ。まるで話が掴めない」

ため息をついて、勝手に暴走を始める彼女を諫めた。

「 そうだな。順を追って説明しよう。まず、私の名は 《イゾルデ・リンデ・ミステア》。お前の父、シャル・デルニエ・エスクードの『友人』といった所だな。腐れ縁とも言う。そして私は 《魔女》だ」

魔女 人外れ、魔力を多く持った人間の女性形の事を指す。その魔力ゆえ、老いを知らず、長い間生き続けている者達の総称でもある。

そして魔女と言う総称は、世間一般に悪い意味を持っていた。人間として生まれながら、同じ人間種を遙かに上回る長命を誇る彼女たちは古来より同じ人間種に恐れられ、排他されてきたという。彼女はユーリに対し、その事実をあっけらかんと喋った。

「驚いたか？」

「それとなく、少しだけ。どちらかと言えば、最も魔の性質に疎いエスクード人の王族と魔女が知り合いであったことに」

「ふふ、お前の父は特殊だったのだ。あやつ交友は広いぞ。あやつが体現した独立国家の理念とは裏腹に、あやつ個人は人を惹きつける男だったからな。お前にもその素質がある。私をお前の元に惹きつけたくらいだからな」

イゾルデは嬉しそうに笑った。

「お前は私を忌み嫌うか？ 人の輪から外れ、長い時を生きる私を」

しかし、その言葉を発した時のイゾルデは、消え入りそうな程に頼りない笑顔を浮かべていた。

対するユーリは未だにこの魔女を前にして解らない事が多かったが、彼女の問いには即座に返答して見せる。

「いいや。貴女は人だ。常人より少し長く生きているだけの、人だ。それは貴女を忌み嫌う理由にはならない」

「魔女の長命を『少し』と言いつけるか」

「言いつける。事実だからだ。老いは常人より少し遅いだけ、命は常人より少し長いだけ。それ以外に何が違う？ 人が人である理由はそこにはないと俺は思っている。不安ならば再度断言して見せよう」

貴女は人だ。付け加えれば、俺達エスクード人の眼で見ると、魔の才に恵まれてる貴女は羨ましく映るよ。もちろん、そのせいで貴女が被ってきた不幸を度外視すればの話だが」

「妙に器が広い男だな。奔放とも言つか。ただ単に細かい事を考えるのが苦手なだけか？ シャルと同じ事を言いよる 湿っぽい事を訊ねてしまったな。今のは忘れろ」

イゾルデは再び嬉しそうな笑みを浮かべて、ユーリに言った。

「お前が今気にするのは私の『目的』…だな？」

「ああ、気にならないと言えばウソになる。父を知り、俺の存在を知る貴女の目的は何だ？」

話を切り替えてイゾルデが言葉を紡いだ。

「イゾルデと呼べ。私の目的は一つ。シャル・デルニエ・エスクードの息子に出会う事。そして、場合によっては息子であるお前に助力する事だ。シャルは第三次レザール戦争に踏み込むに際して、エスクード王国と直接関係が無い友人たちを全て遠ざけた。私たちが手を貸すと言つても、あやつは首を縦に振らなかった。歴代エスクード王の理念に生き、その理念に死んだ。しかし、あやつはこうも言っていた。『もし息子に出会う事があるならば、その時に手を貸してやってくれ』と。あるいは、あやつは歴代エスクード王の理念の限界を知っていたのかもしれない。それでも、歴代の王の理念を無為にはさせまいと事実上最後のエスクード王として理念を守り続けた。そしてエスクードは崩壊し、それでも尚、此処に今新たなエスクードの血が流れ込んできている。シャルは古きエスクード王国を自分の代で終わらせ、新たなエスクードを息子であるお前に託したのかもしれない」

「ははっ、どちらにせよ、俺がレザール戦争を生き抜いて初めて成立する理論だな」

力無い笑顔で笑うユーリ。

「現にお前は生き抜いた。結果が全てだ、それで良いではないか

よく生きていてくれた。私はお前の母の代わりにはなれないが

他の立場で傍に居ることは出来る」

イゾルデは不意に立ち上がり、ユーリを抱き寄せた。

鬱屈していた想いを全て吐きだす様に、強くユーリを抱き寄せる。その様子を不満げな表情で隣で見っていたリリアーナにイゾルデが気付く。

「ヤキモチでも焼いておるのか？ 《リリアーナ》。お前の事もよく知っている。安心しろ、私がお前をアルトナ族だと勘付けたのはその前知識があつてこそだ。フードを被っている限り容易には気付かれまい。それと　フフ、お前が呆けていると私がユーリを攫つて行くぞ？」

「ち、違う！　別に私はそんな事思つてない　」

「そうか、ならユーリは私が貰つて行こう」

「……それは駄目」

顔を俯けながら小さな声でリリアーナが口に出す。

彼女はすぐに顔を上げ、イゾルデの眼を真つ向から見つめた。イゾルデもそれに応えるように視線を交わす。

「俺は誰の物でもないぞ……」

勝手に展開されるイゾルデとリリアーナの無言の戦いとうんざりして、ユーリはため息交じりの声を上げた。イゾルデの腕の中からするりと脱出し、背伸びをする。

「奔放な奴だな。…本当にシャルに似ている。それにしても私の身体は気に入らなかつたか？　中身はそれなりに歳を食つておるが、体はびっちびちに若いぞ？」

魔女の特権の一つだ、とイゾルデが女性特有の丸身のある身体構造を強調しながら悪戯気にユーリに言った。

「私の方が若いし……」

「その細長いだけが取り柄の貧相な身体でよく言う。歳の割に成長するべき所が成長していないようだが？」

「なっ！ 中身おばさんの癖に！」

「聞き捨てならんな、リリアーヌ。男好みの熟成された精神にぴちぴちの若い身体、私は完璧だぞ？」

「嗚呼、もう勝手にやってくれ……」

うんざりとした様子でユーリは二人の言い争いが終わるまで待つのだった。

「……ということで、私はお前についていく。たとえお前が嫌だと言っても、勝手についていくぞ。実の所、助力するかどうかは本人を見てから決めようと思っていたのだが、シャルの息子である事を抜きにしても私はお前を気に入った」

彼女の言葉を受けて、ユーリはすぐに返した。

「別に断りはしないよ、イズルデ。助力してくれると言っんだ。それをむげにはしない。だが、もしかしたら、レザール戦争よりもずっと酷い戦いになるかもしれない。それで良いなら」

「見くびるなよ？ 仮にも私は魔に恵まれた女 魔女だ。シャルが力づくで私を遠ざけなければ、私はレザール戦争に一人でも介入しようとしていたくらいだ。今更恐れなどない。私はお前の傍に居れば」

リリアーヌが睨む。

イゾルデの直接的な物言いに、胸の引き締まるような思いを心に浮かべながら。

「ユーリはユーリだよ。イゾルデがユーリの父上の幻想をユーリに見ているなら」

「リリアーヌ、それは違う。確かにシャルとユーリは別物だ。私はユーリ個人に惹かれているのだ。ユーリを見て、シャルと違う事を知りながら、この男に惹かれているのだよ」

「むー…」

イゾルデは女として自分よりも上手だと、否応なく理解させられる。それでも、彼女の存在はきつとユーリの助けになるのだろう。自分の胸に浮かぶ我儘な気持ちを抜きにすれば、彼女がユーリの傍に居る事は良い事なのだと思え出来た。

「公然と口説かないで貰えるか 周りの視線が痛い…」

「フフ、初心な奴だ」

ユーリが通りすぎる男たちの憎悪の籠った視線を受けながら、そう呟いた。

傍から見れば美女二人を侍らせているように見えるが、その実二人とも特殊な境遇にいる者だ。

ユーリとしても、男として嬉しさが無い訳ではないが、それ以上に視線を向けねばならない目標があるだけに余り自分から関わろうとはしなかった。

イゾルデはまるでそれを気にせずに、ユーリの腕に自分の腕を絡める。

リリアーヌも負けじと反対の腕に自分の腕を絡めた。

結局その日はイゾルデが店仕舞いをした後、ユーリとリリアーヌ

はイゾルデを連れて一度宿に戻った。

宿に到着し、ユーリがイゾルデの為にもう少し広い部屋に変えてくれと宿の主人と交渉している中、リリアーヌがイゾルデに訊ねる。

「イゾルデは今まで何処に住んでいたの？ 家は？」

「キールの最西端だ。家は先日マズール騎士団に焼かれた。魔女である事が何処かからバレたらしくてな」

慣れた物だ、とイゾルデは呟く。辛かったね、とリリアーヌは咄嗟に言葉を述べていた。

少し目を丸めてリリアーヌの言葉に驚くイゾルデ。

「リリアーヌの同情には不思議と嫌な感じがしないな。いや、私の事はいいんだ。私よりも、ユーリとリリアーヌの方が辛かっただろう。お前達は戦いに放り出されるにしては幼すぎた……」

イゾルデはシャル・デルニエ・エスクードの個人的な知人であったがゆえに、エスクード王国の実情にも詳しくかった。

だからこそ、ユーリとリリアーヌが辿ってきた軌跡を熟知していた。

リリアーヌはふと笑って、イゾルデの言葉に返事を返す。

「私は大丈夫だったよ。ユーリが守ってくれたから。私の分も、ユーリが全部重荷を背負ってくれているから」

「そんな事はない。お前にもお前の背荷物がある。ユーリが戦で壊れなかったのは、お前が傍らに居たからだと思っ。それ程にレザール戦争には様々な狂気が渦巻いていた。ユーリをユーリたらし

めているのはお前が傍に居るからかもしれない。少し悔しいが」

リリアーヌはイズルデに姉のような優しさを見た。

確かに、彼女の精神は成熟しているのだからと思う。不思議な包容力を持った女性。魔女という意味嫌われた存在。

彼女は辛い経験をしてきている筈だった。それでも、その哀しみを周りに悟らせない。大人びた女性。

「そうかな。じゃあ一歩リードってどこ？」

「今に見ている。直ぐに追い抜いてやる」

女同士にしか解らない視線のやり取りをして、リリアーヌとイズルデは同時に笑った。

イズルデが先程露店の店主として見繕っていた隠蔽効果を促すイヤリングを取りだして、リリアーヌの左耳に付ける。

「当分はこれで大丈夫だ。気にせずに街を歩くが良い」

「ありがとう」

その銀のイヤリングを一度指でなぞり、リリアーヌは満面の笑みをイズルデに向ける。

当初些細ないざごきそあつたものの、既にリリアーヌとイズルデは打ち解けていた。お互いに敵意を持っていた訳でもなく、些細な口上でのやり取りはむしろ相手の考えを確認するような物だった。すると、そこへユーリが宿の主人の元から戻ってきて、結果を知らせる。

「部屋は空いているって。夜も更けて来た。今日は旅路の疲れもあるし、早めに寝よう」

「リリアーヌ、風呂へ行くか？ 髪を梳いてやろう。ユーリも来る



か？」

「馬鹿を言うな……」

「本当に来たらぶっ飛ばすからね？」

「だから行かないって！」

リリアー又とイゾルデが笑顔で顔を見合わせる。

その様子に「いつの間にそんな仲良くなったんだよ……」とユーリは一人肩を落とし、これ以上女二人に振り回されまいとそそくさと部屋へ戻って行った。

安宿に設置された狭い風呂からあがり、二人が手配された部屋に戻ってくる頃には時計の針は深夜を指していた。

旅路の疲れからか、リリアー又は直ぐにベッドに潜り込んで寝息を立て始める。対して、同様の旅路を歩いて来た筈のユーリは、未だに目を開けていた。

「お前は寝ないのか？」

イゾルデが水に湿った髪をタオルで拭きながら、ユーリに問う。

「やる事がある」

「マズール王城に特攻でも掛ける気だろう。余裕の無さが目に見えるようだぞ」

村への再侵攻を止めなければならぬ。マズール騎士団の本拠地は王城である。手っ取り早いのは本拠地に単独で潜入し、混乱を招く事。

「急くな、手は打ってある」

ところが、イゾルデはそれを見越していたかのように言葉を紡いだ。

「…手？」

「そう、そろそろその策が実る頃だ。少し外へ出よう」

イゾルデは外套を着込み、ユーリを促す。

二人はリリアーナの睡眠を邪魔しないように、宿の外へ出た。

それから数分後、二人が宿の前のベンチに腰かけていると、一人の男が二人の元へ近寄ってくる。

ユーリの知る男だった。

「お待たせしました。いきなり真夜中に呼び出しとは…いくらなんでも急すぎやしませんか？ イゾルデ」

金髪と紫の双眸を持つ男。

元エスクード王国宰相 《ベルマール・リ・シュトラス》、

その人だった。

ベルマールの肩には真っ黒なフクロウが居て、そのフクロウはイゾルデの姿を見ると羽ばたいて彼女の肩に移動する。

「一体何の用」

ベルマールは、半分言葉を紡ぎかけて、イゾルデの隣に座る銀髪の青年を見た。

そして途切れる言葉。  
彼の口元は震えていた。

「《ユーリ》」！

ベルマールは駆けよる。ユーリの元に。

ユーリの方も同じように驚愕を顔に貼り付け、立ち上がっていた。

「《ベルマールさん》…?」

「伊達にキールに長い間滞在していた訳でもない。来るべき時の為に、それなりの手は打っておくものだ。このキールに居るシャルの友人は一人ではないのだから」

得意げに鼻を鳴らすイゾルデをよそに、ベルマールはユーリを抱き寄せていた。

ユーリの胎動をマズール王国宰相として聞いていたが、この眼で見るとまでは　　と思っていたベルマール。

不意に、そのユーリが目の前に現れた。

言葉は紡げなかった。

一度は死んだと思っていた最愛の友の息子が、今こうして腕の中に居る。

王国宰相として、王子であるユーリと接する機会が多かったベルマール。レザール戦争後、辺境の村で浮世離れた生活を送っていたユーリは、まさかベルマールがキールで未だに生きているとは思っていなかった。自分以外の王族関係者は皆殺しにされたと

「生きていた…のか」

「ええ、私はエスクード王族ではありませんから…。その理由もあって、私は未だに生き永らえています。　　王族は皆殺されてしまった。それでもユーリ、貴方が生きていてくれるだけで、私はもう

何もいらない」

しばしの間、突然の再会に郷愁を抱く二人。

「男同士の抱擁は長い間見るに耐えんな。おい、ベルマール、ユーリは私のものだぞ、いい加減離れろ」

「いつユーリが貴女のものに？ ソフィア様にシャルを取られた腹いせですか？」

「ちちち違う！ ストレートに言うな阿呆！」

「いやはや、これ失敬致しました。魔女イゾルデともあろう方がこの程度の事で狼狽するとは思わなかったものでして フフフ」

怪しげな笑みを浮かべ、イゾルデを見るベルマール。

「これだからお前は嫌なんだ。口八丁でお前に勝つなど不可能に近いからな」

「またまたご謙遜を。容易くも百年を生きる貴女に私が口八丁で勝つなど あり得ない事です」

「もういい、私の負けだ、面倒になってきた」

イゾルデは遂に開き直って両手を力なくベンチに垂れさせた。

「では今回は私の勝ちということだ」

今回『も』だろ、とイゾルデが不貞腐れながら言う。

「貴女と話をするのは退屈しなくて良いのですが、何分私の方もあまり時間がないので。ユーリ、いきなりですが、貴方がキールに居る目的を教えてくださいませんか？」

ユーリは二人のやり取りを見ていたが、ふと訊ねられて言葉を紡いだ。

「ひとつ、俺が数日前まで住んでいたエスクード辺境の村の人々をマズール騎士団の追手から逃がす事。もう一つは」

一度言葉を切り、より強い声色で言う。

「エスクード王国を取り戻す事。最たる目的だ」

「前者の方は既に手を打って置きました。マズール騎士団はあと二日程は村に対して身動きを取れないでしょう」

返ってきた言葉にユーリは驚く。その様子を見てベルマールは笑顔をたたえ

「貴方は解りやすいですからね。村での騒動を聞いてから、きっとこのキールに来ると思っていました。大丈夫、後者の目的が果たされれば、結果的に村人たちは救われるでしょう。それまでの時間稼ぎをしたままです」

ベルマールがユーリの隣に腰掛ける。

「一応 訊ねさせてもらいますよ、ユーリ。シャルが最後に貴方に教えた『策謀』を覚えていますか？」

「勿論。覚えてなければ此処にはいないよ」

「良かった。それで 決行は何時にするのです？」

「明日。出来るだけ早い方が良いな」

「解りました。材料を整えておきましょう。私の胸に刻まれた誓約系の魔術も、イズルデに解除してもらったことですし」

イゾルデが横から「お前からは金を貰うぞ」とだけ口を挟んだ。

「解ってますよ。後で差し上げます。ともかく、これで準備は整いました」

「俺はすることがまるでないな」

苦笑しながら言うユーリ。

「いいえ。貴方がいてこそ、シャルが密かに建てていた策謀は意味を為すのです。これはただの始まり。問題はその後どうするか、ですよ 《陛下》」

「まだ早いよ、ベルマールさん。それにその呼ばれ方は慣れないからやめてくれ」

「そうですか？ いずれ慣れる必要があると思いますがねえ。まあいいでしょう。『殿下』。さて、時間もないので私はそろそろマズール王城に戻ります。それではまた明日」

「また明日」

止まっていた歯車が、音を立てて回り始める。

亡国の亡霊が、身体を求める

## 5話 「真実」

次の日の朝、宿で早々に就寝したりリアーヌが真つ先に目覚め、微動だにせずに寝るユーリと毛布をぐちゃぐちゃに蹴りながら寝ているイゾルデを見る。

「うわぁ……すごい対比……」

言葉では形容しがたい形に丸められたイゾルデの毛布を見ながら、つい言葉をこぼしてしまう。どうやったらそんな形になるのかとまじまじと観察していると、イゾルデが寝言のように不意に声を漏らした。

「嗚呼……ユーリ……」

艶やかな声音。

身体をくねくねさせているイゾルデを見て、リアーヌは咄嗟にイゾルデの脳天に手を振り下ろした。ぺちん、と軽快な音が鳴って、次にイゾルデが目を覚ます。

「んぁ……リアーヌ？ 何故起こした、良い所だったのに」

イゾルデの言葉を片っ端から無視し、次にユーリの身体を揺さぶるが、一向に起きる気配がない。

「まぁ……起きないよね」

その間に、イゾルデが毛布を元の形に戻しながら、ベッドから抜け出す。大きな欠伸を上げている姿を見る限り、俗に言われる魔女

という印象は得られなかった。  
どこにでもいそうな、あるいは少し珍しいタイプの、品行の悪い少女といった風で

「ユーリは起きないのか？」

「ユーリって寝るとなかなか起きないからね。でも大丈夫、秘密の手段があるから」

ぐっ、と一度右手の親指を立ててイゾルデに見せ、リリアー又はユーリの耳元に口を近づけた。

イゾルデが何をするのかと見物している中、彼女は小さな声で咳いた。

「ユーリ、あと三秒で私の料理が全部なくなっちゃうよ。一、二、三……あーあ、全部食べちゃった」

「うわぁ！　せめて一個だけは残しておいて！」

がばつと布団を蹴飛ばしつつ、上半身を凄まじい勢いで起きあがらせるユーリ。

「あれ…？　料理なんてないぞ…？」

「ある訳無いじゃない。ここは宿だよ？」

謀ったなりリイ、と澄まし顔のリリアー又は毒づくユーリ。

眠気眼を擦りながら、ベッドから完全に身体を起こし、覇気の無い声を上げる。

自分を起こすかのように紡がれる意味を含まない言葉の羅列がある程度続き

「はぁ、あまり良い目覚めじゃないな…」



「起きないユーリが悪いんだよ」

「もつとマシな起こし方ってない？」

「これが最も優秀な起こし方だと個人的に自負しておりますの」

演技ぶって大仰な身振りを加え、一礼するリリアーナ。彼女が高貴振ると、簡素な動きでさえ絵になっていて

「解ったよ、ちゃんと起きれるよう努力はするから」

ユーリは渋々リリアーナの起こし方を容認するしかなかった。

リリアーナは小さく笑い、次にユーリのベッドに上って彼の背中側に同じ向きで座る。

衣服のポケットから一本の黒い紐を取りだすと、ユーリの銀の髪を両手で纏め始めた。

「三つ編みでいい？」

「任せる。好きなようにしろ」

リリアーナは、ユーリの一際長い襟足の一房を器用に三つ編みにしていく。纏まった所で黒い紐で毛元を固定し、「はい、できたと短く声を掛けた。

その一連の流れを見ていたイゾルデは、柔らかい微笑を浮かべながら

「夫婦のようだな。だがそのポジションもいずれは私が」

「何の争いをしているんだよ…。まあいい、出来るだけ早く支度を  
して 宿を出よう」

「何か用事でもあるの？」

イゾルデは頷いたが、リリアーナは昨日の夜の事を知らない。

そこでユーリは一言だけ、彼女に言葉を与えた。

「『エスクードを取り戻す』」

その言葉だけで、リリアー又はこれから何が起こるのかを理解した。彼が何をしようとしているのか。その言葉を発した時の、少し楽しそうな彼の顔。

「解った、直ぐに支度するね」

リリアー又は短い言葉で返答し、出来る限り彼の心中を脅かさないように努めた。

既に彼は意識を集中させている。周りの物は一切見えていないのかもしれない。

それ程重大な出来事が、これから先に起こるのだろう。リリアー又はそう心の中で呟いて、すぐに身支度を整えた。

「リリアーも連れて行くのか？」

「ああ、一人よりも俺達と一緒にいる方が安全だろうからな」  
「過保護な奴だな」

イゾルデが苦笑した。

マズール王城      マズール王執務室。

マズール王のもとに、一人の臣下が唐突に重大な報せを持って来ていた。

「陛下、先日お話にありました《 Eskudo王家の末裔》がキール内部で捕縛されたという情報が」

まず真つ先にマズール王は驚愕し、何故 Eskudo の末裔がわざわざキールにまで来ていたのか、という事について思考を巡らせた。

「何時頃、此処へ来る？」

「は。騎士団長ケーネがすぐにも末裔を連れてくると。また、同時に連れ添っていたかの《魔女イゾルデ》と《アルトナ族の少女》も同様に連行してくるようです」

「とんだ一行だな。異例の組み合わせにも程がある」

何か企んでいるな、とだけ頭の中に言葉として残し、マズール王は執務室の椅子から立ち上がった。

「宜しい、到着次第、謁見の間に通せと伝えよ」

「御意のままに」

まあいい、今更出来る事があるなら、やってみる。

マズール王も決心する。徹底的に交戦してやるうと。そして遂に会合が果たされる。亡国の王子と、仇国の王の会合が

マズール王に一報が伝わる三十分前。

マズール王城内で人を探していたベルマールがようやく探し人を見つけ、声を掛けていた。

「ケーネさん、此処にいましたか」

王城の廊下の向こう側で、ケーネが驚いたように振り向く。すると、同時に凄まじい勢いで駆け寄ってきた。

「ベルマール様！ わざわざお越しにならなくても呼んで頂ければ私が向かいましたのに！」

必死の形相でそう言うケーネの額をベルマールが小突いた。整った顔が悪戯気に歪む。

「いえいえ、貴方は忙しい身ですから。私なんか気を遣わなくてもいいですよ。そ・れ・に！ 貴方最近王都で女性と会っているそうではないですか！ 私に裂いている時間なんてないでしょう！ いや、あつてはならない！」

「……貴方が言いたかったのは最後の台詞だけでしょうに」

うんざりしたようにケーネは項垂れた。

何処で仕入れたかは知らないが、労働時間外の情報まで知られている事に多少の恐怖を感じる。

対して、嬉しそうに微笑むベルマール。

「うっふっふ、いずれは奥方になるんでしょうかねえ、楽しみです  
ねえ。ご結婚されたらどうぞ私を呼んで」

「っ で！ 要件はなんですか！」

放っておくと止まりそうもない悪戯気な言葉を大声でかき消すケーネ。すれ違う部下達も耳をそばだてている。

ベルマールはケーネの大声に多少引きさがりながら、表情を一変させた。

「このくらいにしておいてあげましょか。要件と言うのはですね

昨夜『例のエスクード王家の末裔』を見かけたのですよ。この街で。夜分遅かったのに何をしていたんでしょうねえ」

「その台詞、そのままそっくり貴方にお返しします。ベルマール様、また夜分遅くに城を抜け出しましたね… 門兵は止めなかったのですか」

「 彼らの秘密は私の手の中ですので」

ベルマールが手の中で何かを転がすような仕草を見せると、ケーネはもう一度頂垂れた。しかし、すぐに姿勢を正してベルマールの言葉を反芻させる。

「それで、その後の彼の動向は掴めましたか？」

「いいえ。しかし、彼は銀髪に紅眼、日が差している間は多分に目立つ。もし王城前を歩いていたら簡単に見つかるでしょう」

最後の台詞に並々ならぬ意志が込められていた事に、ケーネは疑念を抱いた。

「まさか… 向こうから敵の本拠地に向かってくるなど…」

「ありえない話ではないですよ。第一王城に用がないならキールになんて来ません。彼がエスクード王家の末裔なら尚更です。今からでも遅くはありません。様子を見てきたらどうです？」

思案気なケーネ。

少しの間考えていたが、思い立ったような表情を浮かべて、姿勢を正して言った。

「では、行って参ります」

「よろしい。もし見つけたら陛下の前に連れて行くのを忘れずに」

「御意」

踵を返して走り去るケーネを、ベルマールは後ろから悲しそうな目ですっと眺めていた。

ケーネが王城の門に辿りついた時、そこには驚くべき光景が広がっていた。

『銀髪紅眼の青年』が門兵に拘束されていたのだ。隣には同じように拘束されている美しい少女と 先日、秘密裏な王命で辺境の住処諸共焼き払ったはずの《魔女イゾルデ》。

「ケーネ様、この者がエスクード王家の末裔を語ったので連れのもの共々、一時拘束しました。真偽の程は定かではありませんが……如何いたしますか」

「あ、ああ。その者の言っている事はおそらく真実だ。私が陛下の元に連れて行く。ご苦労だった」

「は、それでは縄を」

門兵はきびきびとした動きで右手を左胸に当ててマズール王国における敬礼をし、三人を拘束している縄を渡した。

「ところで 被害はなかったか？」

「いえ、抵抗をしなかったので被害はありません」

抵抗をしなかった。

第一、何故無抵抗で衛兵に捕まる？ 捕まりにきた、いや、その先に何か？ 考えを巡らせるケーネ。

胸中に何かひっかかる物を感じたが、とりあえず三人をマズール王の元へ連れて行くことにした。

「マズール騎士団長と見受ける」  
ケーネ・ヴァスカンド

王城の通路を三人を連れて歩いてみると、ユーリが突然話しかけた。本来、問いに答える義務などケーネにはなかったが、特に支障もないだろうと思いい、口を開いた。

「いかにも」

「そうか 先日の中では部下に悪い事をしたな」

「いや…」

ケーネは部下に、報告に関しては偽りなく、細部に至るまで説明するよう指示している。報告を基にすると、その件ではどちらかと言うと騎士団の方に非があると思っていた。無抵抗の老婆を、でっちあげた理由で先に一人斬り殺し、その後さらに男を斬り殺した。レザール戦争を知らない若者だけで構成された新規騎士分隊を送り込んだのが仇となった。

レザール戦争の苛烈さを知らない騎士は、なにぶんマズールが勝者であると言う優越感が先行してしまいがちだ。お互いに多大な犠牲を払ったあの戦。今は終戦しているのだ。

戦中とは違い、たとえ敵同士であっても人としては平等でなければならぬ。一方的に人権を害する資格など、誰も持つてはいない。どう見ても非は騎士団にあるのだ。その事に対し、我ながら激怒したのを覚えている。当事者であるこの青年ならば、より強い憤怒を抱いただろう。

それが何だ。

マズール騎士を数人切り殺した事を謝ってくるとは。彼の行動は誰が見ても正当防衛だと判断するだろう。無為に殺される事をよし

とする者など早々いない。

確かに、過剰な防衛と言えなくもないが、それでも彼の行動は正当だと自分自身が思う。

そう改めて思った瞬間

ケーネは己の価値観が揺らぐのを感じた。

自分の動揺を悟らせる訳にはいかない。

仮にも騎士団長と言う立場にいる人間が、立場上敵対している者に弱みを見せることはあつてはならない。

それ以上会話をすることなく、黙ってケーネは三人を謁見の間まで連れて行った。

ベルマールさんが言っていたのは彼の事か、とユーリは内心でほくそ笑む。

昨日ベルマールと話をした際、少しだけこのマズール騎士団長の話を聞いていた。それゆえに、興味も抱いていた。

一連のやり取りの中で、ユーリはケーネ自身が自分の立場と考える狭間に一筋の矛盾を抱き、動揺したことに気付いていた。深い観察。

とはいえ、この場でこれ以上物事を混乱させるのも得策ではない。そう思い、ユーリがそれ以上彼に対して言葉を紡ぐ事はなかった。

ケーネに連れられて行ったのはマズール王城の謁見の間。

扉は巨大で、開けることすら躊躇われるほどに威厳が漂っていた。



当然か、とユーリは心の内で言う。この中にはマズール王がいるのだから。

扉の前に着くと、ケーネが声を張り上げた。

「陛下、例の者を連れて参りました！」

少しの間があつて、中から「入れ」という声が聞こえる。

ケーネはその言葉を受けて謁見の間の扉を開けた。

開かれる視界。真っ直ぐに玉座に伸びる煌びやかな赤の絨毯。

そしてその絨毯の先　　悠然と玉座に座す　　現マズール王

《スト・フリオ・マズール二世》。

ユーリの胸は、此処でも思いのほか高ぶりはしなかった。

状況を合理的に判断出来るのならばそれでいいか、と軽く内心の危惧を受け流し、謁見の間に足を踏み入れた。

数歩歩いて顔を上げる。

その様子に気付いたマズール王が先に言葉を放った。

「貴様がエスクード王家の末裔か」

「ああ、いかにも」

遂に顔を合わせる両者。

片や玉座から見下ろし、片や縄に縛られながら上を向く。

これが今現在の立場の違い。レザール戦争で違えた、道筋の差。

「本当に生きていたとはな　　正直驚いている」

「そうか、驚かせる事が出来て良かった　　」

毒の籠った声色で軽口を叩くユーリ。

当然と言えば当然か、と隣で王に対して跪くケーネは胸中で語る。

忌まわしき一族の仇が目の前にいるのだから。  
そこでマズール王はケーネに語りかけた。

「御苦労だった、ケーネ。此処からは私が引き受ける。下がれ」  
「はっ」

軍人にとって、少なくともこのマズール王国において、王の命令は絶対。

その場に残って経緯を見たいという気持ちも少なからずあったが、王に促されれば謁見の間を立ち去るしか術はない。

踵を返した所で王の隣に立っているベルマールから声が掛かった。

「ケーネさん、お時間があったら私の執務室にお行きなさい。机に例の突風帯ハジネについての資料が置いてあります。読んでみる事をお勧めしますよ」

「御意のままに」

一度頭を垂れて、ケーネは謁見の間を出て行った。

「さて、邪魔者はいなくなつた。何かするなら今だぞ？ エスクード王家の末裔よ」

ケーネが出て行った所で、マズール王は顔に笑みを貼り付けて、灰色の髭をなぞりながらそう言った。続けて

「そして魔女イゾルデ。お前もな。住処諸共焼き払つたのだがさすがに死なぬか」

「当然だ、『小僧』。あの程度で死ぬのならとっくの昔にくたばっ

ておったわ」

「正に。悪運の強い奴だ」

次にマズール王は玉座の上からリリアーヌに視線を移す。

「アルトナ族か。やはりエスクードはアルトナ族と繋がっていたのだな」

「貴様が知った所で、意味はない」

ユーリが口を挟む。

「否、ある。アルトナ族が旧エスクード領に住みついているという事実が解れば、それは問題になる。全勢力をもって、ヴァンガード協定連合がそれを消しに来るだろう。その際に隣国として物的支援を送らねばならないマズール王国の王である私には、大いに関係がある事象だ」

「否、それにも意味は無い」

今度はユーリが言葉を紡ぐ。

「旧エスクード領は『貴様の物ではない』からだ」

その言葉にマズール王は顔を顰しかめた。

しかしその表情を悟られないうちに、即座に慚然とした態度をたえ、ユーリに言う。

「虚言だな。貴様の父は、第三次レザール戦争で我らに捕まり、負けを認め、国家権利を我らに引き渡した。誓約書に王印を押させたのだ。それが戦で勝ち得た者の権利であり、従わなければならぬ国家間の暗黙の了解。よって、エスクードはもはや存在しない。貴

様が王子である事さえ、もはや意味のない事だ」

「そう、暗黙の了解。だがそこには厳然たる事実が存在する。貴様  
は父に王印を押させた所で勝ちを確信したようだが、それで終わ  
りじゃない。どこの国も、その後全てを確認した上で、初めて勝ち  
を確信する。マズール王、貴様は侵略者として半人前だったんだよ  
」

「何を」

ユーリは己の口角がつまり上がるのを感じていた。  
今頃になって、感情が昂ぶり始める。

「聞け、貴様は最後の最後で気を抜いた。国家権利譲渡の誓約書  
を持って来い。教えてやろう、貴様の『愚』を」

マズール王は恐ろしい笑みを浮かべるユーリを前にして、肝が冷  
えた。

恐ろしい目つき。今にも喰い殺さんとしてくる獣のような。

「安心しろ。取って破いたりはいしない。第一、縄に拘束されてい  
るからな」

その一言が後押しとなって、ユーリの言葉が気になっていた事も  
あり、マズール王はベルマールに誓約書を持ってこさせる。

「持って来い」

「御意のままに」

隣に控えていたベルマールが動いたのを見て、ユーリは残忍な笑  
みを密かに浮かべていた。

少し経って、ベルマールが金糸の髪を揺らしながら誓約書を持っ

てくる。マズール王はそれを受け取ってユーリに見えるように翻した。

「これだ」

ユーリは契約書をまじまじと見て、遂に、堪え切れなと言わんばかりに、くつくつ、とくぐもった声を漏らした。

「それだ、それだよマズール王。一つ良い事を教えてやろう。その契約書の王印……」

「線が一本足りないんだ」

マズール王の驚愕した顔は忘れないだろう。

こぼれんばかりに目を見開いたマズール王は、契約書を翻してまじまじと王印を見た。

エスクード王国の紋章　　竜が翼を大きく広げた正面肖像画が描かれている。

ユーリに言われた通り細部を観察するが、一見しただけでは細かい線の有無など解らない。

すると　隣から妖しげな笑みを浮かべたベルマールが何かを手渡した。

「陛下、これが『本物の』エスクード王家の王印で御座います。此処に別の紙面をご用意致しました。押印し、比べてみれば一目瞭然で御座いますよ」

マズール王は半ば放心状態で言われるがままに王印を紙面に押し  
た。

そして比べる。並ぶ二つの王印。

ベルマールが改めて押しした方の王印を指さして言った。

「陛下、どうやら本物の王印は此处に一本線が入るようです」

ベルマールが指したのは、誓約書に押された竜の肖像画の右翼  
付近。

新たな紙面に押された肖像画と比べると、その大翼の模様が一本、  
確かに描かれていなかった。

なるほど、これは一本取られましたね、とベルマールが笑みを浮  
かべてマズール王に言い聞かせた。

「西国の元首ならば、皆どちらが本物のエスクード王印なのか知っ  
ている事でしょう。暗黙の了解というのは、そこに至るまでの確か  
な実証と、公平さの上に成り立つのです」

故に、各国共に王しか持たない《印》を各国元首にのみ公開する。  
各国の元首が、絶対に忘れてはならない形。王印の象形。忘れれば、  
もはや暗黙の了解など意味を為さない。

遙か昔より、戦争という暴力の所業、混沌とした所業の中の唯一  
の矜持にして唯一の公平さだった。

勿論、過去に王印を外部に漏らしたり、複製を試みようとした王  
は居たが、皆が皆あまりいい末路は辿らなかった。踏み込んでな  
らない一線を越えた者は、周辺各国、はたまた己の部下にまで限り  
を付けられた程である。元より、王印はその国にしか作れない素材、

技法を使い、作成される。その素材も技法も国家の極秘事項。知る者は一握りしかない。前述した条件も重なり、西国では未だにその暗黙の了解の前提が破られた事はなかった。

「ともあれ、陛下、貴方もエスクードの王印を知る内の一人で御座います。貴方は王位を継承するにあたって、最初に他国の王印を細部に至るまで記憶した。それが義務だった。だから貴方は知っている筈だった。あの時、エスクード王が押した王印が偽物である事を。しかし貴方はエスクード王に王印を押させた所で気を抜いてしまっただ。その結果がこれです。もう一度言います、よく御聞きください。この誓約書に押された王印は《偽物》です」

「これでは誓約書は効力を発揮しませんね」

「馬鹿なッ！」

吠える。そして己の内に答えを探す。果たして慢心があったのか。エスクード王直々に王印を押させた当時の事を思い出した。頑なに自国を守ろうとしていたあの屈強なエスクード王が、何故誓約に際して、あんなにも簡単に王印を振り下ろしたのか。当時は剣を突きつけられた状況下にいた為、さすがのエスクード王も判断が狂ったのかと思っていた。自分の命が握られている状況下で、一徹を貫ける筈もなく、為されるがままにそうしたのかと　　思っていた。

だが違う。アレがそんな弱者であったか。

今、この状況は、あの第三次レザール戦争の続きだった。

まだ戦は終わっていない。

その意味が今更ながら解ってきて、マズール王はいつそ清々しい程に度肝を抜かされた。しかし何時までもそうしては居られない。徐々に状況の変化に気付き始める。

手に持ったエスクードの王印を地面に叩きつけようとしたが、ベルマールに抑えられた。

「陛下、いけません。これは大切な『証拠』なのですから」

ベルマールの妖しげな笑みの意味に気付くマズール王。

「ありえん！ 貴様の持ち物は私の宰相にした時に全て没収した！ 何故こんなものを持っている！」

「いやはや、私も捕まった時にすっかりしてしまして……ついエスクード王から受け取った王印を飲み込んでしまったのですよ。貴方の監視が外れた時に慌てて吐きだしましたがね。あれは辛かった」

「わざとらしく、大仰に身振り手振りで事の詳細を告げるベルマール。」

追撃と言わんばかりにユーリが言葉を紡いだ。

「つまり、だ。マズール王よ。誓約書が効力を発揮していないと言う事は、今もエスクードは領地だけで存在している、という事と同義だ。お前が今まで騎士団を使って行っていたエスクード領の『管理』というのは、言い替えれば、列記とした『弱者に対する侵略行為』となるわけだ。この意味が解るか？」



侵略。暴力を糧とした行為。他国の領土を侵したという事実。それだけが問題なのではない。大国マズールが、現状、防衛力を持たないエスカード王国を侵略したと言う凶柄が一番問題なのだ。

エスカード王国が生きていたならば、この現状は非常に不味い。自然資源の採取の為、土地管理を行わせているマズール騎士団。その姿が一変し、自然資源の略奪の為、防衛力のないエスカード王国に無断に侵入し、搾取する相貌になる。

端的に言い換えるのなら、それは少なくとも この西方諸国からすれば忌避されるべき狡く下卑た行為だった。

そしてこの関係が問題となる所以が周辺各国にある。

現状、ヴァンガード協定連合に加盟しているマズールは、今や周辺各国には手を出せないレベルの大国となっていた。ゆえに、周辺各国は外交手段を使い、マズールと和平を結んでいる。マズールの方も、さらなる経済の潤滑が見込める和平は望む所だった。

しかし、だ。この状況でマズール王国がエスカード王国を侵略していた事を周辺各国に知られれば、和平状態は即刻敵対状態へと移行するだろう。

何故なら 『エスカード王国を密かに侵略していたマズール王国は、いずれ自分達の領土にもその手を伸ばすかもしれない』と思わざるを得ないからだ。一度やれば二度目がある事を誰もが予想する。次の対象が自国になるかもしれない。ならば、いつそのこと和平を解消し、周辺各国と結託してそんな危険国は排除してしまおう、と思う可能性すらある。仮にマズールに勝ちえなくとも、このまま一方的に搾取される側に回るくらいなら、せめて一矢報いてやろうという気になるかもしれない。

確実なのは 外交上の信頼が地に落ちる事。この事実が大陸の経済の大部分を動かしている『中央諸国』に知られれば、経済政策という形で攻撃される可能性もある。

いわば孤立無援。

その転機が、今此処に訪れていることに気付くマズール王。

瞬間、目の前のエスクード王家の末裔と、隣で残忍に笑っている自らの宰相に、多大なる怒りが湧いた。

だがマズール王の口は怒りより先に疑問を放っていた。

「し、しかし！ 王印を偽ったのは貴様らだ！ それは各国に責められぬ物ではないのか！？」

「違いますよ、陛下。偽物である事を確認するまでが貴方の義務だった。各国の認識は変わりません。偽物を振り下ろしたエスクード王ではなく、偽物を偽物と気付けなかったマズール王の負けであると、誰もが口を揃えるでしょう。何故なら、西方諸国においても『二度』の前例があるからです」

確かに、前例があつた。

ゆえに、各国の元首は認識を変えないだろう。非はマズール王に在る、と。

何を言っているのか。私ですら、他国同士が同じ展開になれば、義務を怠った元首を責める。

だがそれを理解した所で、マズール王の怒りは収まらなかった。

その怒りには、自分に向けられる怒りも含まれている。

そして 大吼。

「謀りおつたな 貴様等！！」

双国は踊る。

## 6話 「王剣」

ケーネは謁見の間を出る際にベルマールに言われた言葉を忠実に実行に移していた。

ベルマールの部屋の扉の鍵は開いていて、すんなりと中に入る。それでも一応「失礼します」とだけ呟いて、歩を進めた。

瞬間、目に入る机の上の分厚い本。半開きのまま置かれていた。中を覗き込んで見ると、丁度話に聞いた突風帯ハリネについて書かれていたので、読み始めた。

そして、読み進めて行くにつれてある真実に行き着く。

自分の手に意志とは関係なく力が入るのが解った。

「ハリネとは…… Eskud 各地を転々とする突風帯ではなく

Eskud 王国北部にのみ、それも冬にのみ吹く突風である。ブリザードを伴って吹く事が多いため、冬に育つ作物の類は被害を受けやすい。

「 毎年猛威を奮うため、近年、畏怖を含めてつけられた名である」

例の村は旧 Eskud 南東部に位置している。旧 Eskud 領の東に位置するマズールから村へ進行するのの際し、北部にのみ吹くハリネという突風が邪魔をすることなどまずない。

ケーネはその事実気付いた時、手に持っていた本を投げ捨て、部屋から飛び出した。

王城の廊下を走りながら、考えを巡らせる。

何故わざわざ『でまかせ』を伝えてまで、マズール騎士団の出発を遅らせた。

理由は一つ、それはあの末裔の為。身を挺してまで村を守ろうとしたのだ。村への追撃の事を考えないわけがない。それを先んじて読んだベルマール様の策。

それでも未だ、疑念は残る。なら何故、そうなることを読み切っていないながら、数日という短い期間だけ遅らせた。

それは数日あれば、その進行を完全に停止させるだけの策があったから。

いや、末裔が村を出る事は必然ではなかった筈。何故それで数日という短い期間を遅らせた。

まさかベルマール様は末裔がキールへ向かうことすら読み切っていたのか。圧巻の一言に尽きる。しかし、策と言っても今日まで彼らが顔を合わせた事などない

いや、そう言えば昨日、ベルマールは夜分遅くに外出し、そこで末裔を見かけたという。その時に何か打ち合わせをしたのか。そんな短い時間で。

ともかく 何故気付かなかった。

短絡的に見れば、信じたくはなくてもベルマール様は末裔の味方である可能性が高い。

それもそうか、彼らは旧エスクード王国において王子と王国宰相と言う立場関係。接触は幼少時から多々あったろう。

そして今、あの末裔 ユーリ・ロード・エスクードとその連れのアルトナ族の娘、さらに魔女イゾルデ、ベルマール様、そして王は謁見の間に五人だけ。単純に見れば一対四。

何があってもおかしくはない。何故もっと早く危惧しなかった。

「陛下　！」

早く、早くと吐きだしながら、謁見の間を指して走り続けるケ  
ーネ。額から溢れだす冷や汗が止まらなかった。

「今更気付いたのか……遅いな」  
「貴様ツ……！」

マズール王は玉座から立ち上がってユーリに吠えた。  
そして、隣にいるベルマールに咄嗟に命令を投げる。怒りに支配  
される声色。見事に謀られた事に対する怒りで、自らの顔を赤く染  
め

「ベルマール！　奴を殺せ！」

「残念ですね、陛下。私には命令の遵守という誓約は設けられてお  
りません」

「私に逆らうのか！」

「ああ　そういう言い方をすれば『もしかしたら』貴方の命令を  
実行に移していたかもしれないね。私に刻まれた誓約術式の意味  
するところは『反逆を許さず』でしたから」

「なにを言っているツ！？」

そう言っただけベルマールはおもむろに簡素な上半身の服を脱ぎ、マ  
ズール王に左胸の肌を見せた。

「誓約の魔法陣が……ない」

「ええ、魔女イズルデはその名の通り優秀な魔術師でありまして。  
彼女に誓約の魔術を無効化して頂きました。なので　もう貴方の

犬ではなくなりました。残念です」

と言いつつも、ベルマールは悲しむ所か、全く笑みを崩さなかった。

「くっ… ならば貴様ごとく！」

すると、マズール王は玉座の背元に立て掛けてあった剣の鞘を掴み、剣の柄を握って鞘から抜き放った。

「陛下、私めに暴力で勝とうなどと御思いですか？ …これでも私のはかの戦神と謳われた男の宰相をしていた男ですよ」

鋭い眼光。

怪しい笑みを浮かべていたベルマールは既に其処には居なかった。代わりに、エスクード王の右腕として猛威を奮っていた頃のベルマールが姿を現していた。凄まじい覇気と威圧の波動。

気圧され。

圧倒的な力量差が雰囲気としてマズール王に伝わる。

気圧されたマズール王は苦し紛れと言わんばかりに玉座から飛び降り、縄で縛られているユーリを目掛けて走りだした。

その様子を見てベルマールがまた笑う。

「陛下、その青年もまた、戦神と謳われた男の一人息子です。さらには 貴方の良く知るレザール戦争をエスクード側、それも最も執拗に狙われた王族として生き抜いた圧倒的強者です。お気を付けを」

その言葉を聞いているのかいないのか、マズール王はお構いなしと言わんばかりに駆ける速度に拍車を掛け、ユーリに向かって行っ

た。

横に剣を振りかぶり、ユーリの心臓目がけて剣を振る。剣の間合いが深くなり、顔と顔が近付いた。

ユーリは笑っていた。縄で縛られ、身動きが取れない状況での剣撃を打ちだされているというのにも関わらず。

しかし、その笑みの結果は直ぐに明らかになる。

次の瞬間　ユーリは縄による拘束を内からの腕力のみで引き千切り、完全に自由の状態でマズール王と相対していた。

心臓部目がけて横に奮われた剣の動きを、柄を握るマズール王の手を蹴り飛ばす事で、支点位置から止めて見せる。

蹴りの衝撃で尻餅をつくマズール王。再び斬りかかろうと、ふと視線をユーリの顔に向けた時、心臓が高鳴った。嫌な高鳴りだった。

金色の右瞳。縦に割れている瞳孔。人間ではない何かの瞳。視線。

自分が捕食される側に回ったという否応ない諦観が心中を支配し始める。

これ以上この男に近づいてはいけないと、本能が叫んでいた。

「なんだ、来ないのか」

対して、つまらなそうに呟くユーリ。

今の一連の攻防の中で、左掌から剣を抜き放っていた。儀礼用と見間違え程の美しい装飾が施された柄、そして柄の腹に刻まれている　竜を象ったエスクード紋章。

「《エスクード王剣》…」



マズール王はその剣を見て、体中から冷や汗が<sup>ほとほと</sup>進るのを感じた。  
エスクード王剣。

エスクード王国において、権力を主張する唯一の剣。力の権化。  
王冠と同じようなものだった。本来なら、先代エスクード王が持っていた物。

「何故……何故それを貴様が持っている　確かにあの時、エスクード王から奪い取った筈……」

「ああ、我が父はマズール王国がヴァンガード協定連合に加入したのを知った時、負けを悟っていた。だから　第三次レザール戦争に踏み切るに差し当たり、王印をベルマルさんに、王剣を俺に渡しておいたんだ。一所に王家の宝具を置いておくのは避けたかったからな。それもこれも、全てはマズール王国にエスクード王家の象徴を奪われない為。お前が奪ったエスクード王国の貴重品は全てが全て　偽物さ。問おう　貴様の奪ったエスクード王剣は異様に簡単に折れなかったか？　刃の閃きは鈍くなかったか？　装飾は拙くなかったか？　それでも気付かなかったのか……」  
「愚鈍な奴め」

最後に有りつ丈の皮肉を込めた言葉を付け加える。

その言葉を受けたマズール王の怒りは頂点に達していた。怯えも、恐れも、怒りが掻き消す。

「……何故！　お前はそれ程に私の前に立ちはだから！　忌々しいエスクード王よ！」

マズール王が叫んだ瞬間、ユーリの体がゆらりと陽炎のように揺れ、一歩、マズール王へと歩を進めていた。

マズール王と間近で相對して、これまで比較的穏やかだったユー

りの心が沸々と燃え上がり始めていた。  
錆びたと思っていた復讐心が雄叫びを上げる。

「殺しはしない。正直な所、今すぐ八つ裂きにしてやりたいと思わないでもない。だが、その行動が後々俺に災厄を齎すだろうとも思う。だから 『遊んでやろう』、マズール王よ」

マズール王は背筋の悪寒を感じて、なけなしの戦闘本能のままに咄嗟に剣を構えた。

その手に持つのはマズール王剣。マズール王の王冠と共に、権力を象徴する剣。権力を『象徴するだけ』の剣。

立ち上がり、マズール王剣を構えたマズール王を見て、それを待ちわびていたかのようにユーリも剣を正眼に構える。

「マズール王よ、我が父のシャル・デル・エ・エスクード智略が貴様に打ち勝った証明として、その手に持つマズール王剣を斬り落とす。しかと見届けよ、エスクード王剣の本来の切れ味と その閃きを！」

踏み込み、中段からの横一闪。剣筋は凄まじい速力を伴い、マズール王の視界から消える。

そして次の瞬間には 金属同士が弾ける甲高い音すら鳴らずに、マズール王が縦に構えていたマズール王剣が刀身半ばから真つ二つに斬り飛ばされていた。

剣と剣同士の衝突。だのにも関わらず、音すら鳴らずに斬り落とされたマズール王剣。王剣の切れ味の違い、そして剣を扱う者としての力量の差は明らかだった。

斬り飛ばされたマズール王剣の片割れは、マズール王の背後の玉座に突き刺さる。

膝から崩れ落ちるマズール王。身体ではなく、精神を斬られた。  
諦観。

「よくも　こんな鈍なまくびで父を斬れたものだな。さぞ苦痛だったろうに」

吐き捨てるようにユーリが言い、エスクード王剣を左掌の中に押し戻した。掌からは光が舞い散り、ユーリの右眼は金色に輝き続ける。

静寂が舞い戻る中、不意の来訪者がそこで姿を現した。

「陛下　！」

謁見の間の扉が勢いよく開き、その向こうからケーネの声が謁見の間に響き渡る。

「遅かったですね、ケーネさん」

「ベルマール様！　一体これは…どういう事ですか!？」

ケーネの視界に入ったのは、拘束が解かれたユーリの前で折れたマズール王剣を片手に跪くマズール王。刃が突き刺さった玉座の隣で妖しげな微笑を浮かべるベルマール。

ケーネの危惧していた事が、現実となった証拠でもあった。

「大丈夫、陛下を殺しはしませんよ。ねえ、ユーリ」

「ああ、そつちからこれ以上向かってこなければな」

ユーリはリリアーナとイゾルデの縄を解きながらベルマールの言葉に答える。

「大丈夫だったか、リリィ、イゾルデ」

「うん、大丈夫」

「この程度、慣れた物だ」

拘束を解かれた二人は、各々窮屈さに凝り固まった身体を解放するように背伸びをする。一悶着あったにも関わらず、二人ともその事を大して気にしていないようだった。

眼の前の光景から状況を推理するケーネ。否、推理する程のことですらない。

事実、マズール王剣は折られ、王は跪いている。答えは一つしかない。

「ベルマール様　これは謀反です！　何故ですか…貴方には王に逆らえぬよう誓約が施されて　」

ベルマールは着直していた服をつんざりした様子でもう一度下ろす。肌蹴る左胸。

其処に刻まれている筈の誓約魔法陣が無い事に気付き、ケーネは合点する。

「誓約が解除されている…」

高度な誓約魔術だった。しかし、それを解除出来る力量を持つ者が、一人だけこの場にいる。

《魔女イゾルデ》。

様々な事象がケーネの頭の中で繋がって行く。それでも、反逆の理由に関しては何も解らない。

いや　信じようとしていないだけだ。胸中の葛藤と戦っている最中、ベルマールが言葉を紡いでいた。

「貴方も良く知る様に、私は先代エスクード王の側近にして王国宰相でした。私からすれば、敬愛する友を殺したマズール王は仇敵で

す。そんな私がマズール王の宰相として一生を過ごすと御思いですか？ 私の前で無残に殺された愛する友の願いを無視し、この場に留まると御思いですか？」

ベルマールが鋭い視線と、咎めるような声色で告げる。

ケーネは、その言葉で万事に納得できてしまう自分が嫌になった。

「それでも」

ケーネが何かを言おうとするが、それをベルマールが遮る。

「私としては、貴方の方にこそ問いたい。御自分の信念を曲げてまで仕える価値が、このマズール王、そしてマズール王国に有ると御思いになるのですか？」

「……」

ケーネは言葉を紡げない。

ユーリと会話した時の、価値観の揺らぎが再び心に襲いかかった。ケーネの言葉を待つベルマール。

「それでも、今の私は　マズール騎士団長というマズール王国の『剣』です」

それ以上は言えなかった。

すると、ユーリが二人の会話の最中に、リリアーナとイゾルデを連れて謁見の間を出ようとす。

しかし、ケーネはそれを良しとはしなかった。扉の前で両手を広げて立ちほだかる。

「通す事は出来ない」

「ならば押し通るまで。イゾルデ、リリイを頼む」

「私の出番はないのか？ 家を焼き払われた恨みがマズール騎士団にはあるのだがな」

「全ての一步は俺が踏まなければならない。だから、今だけは俺の我儘を聞いてくれ」

ユーリの、臨戦態勢とも言える冷徹なまでの無表情を見て、イゾルデは大人しく引き下がった。

「仕方ない、今日の所はくれてやる。お前の力を見せて貰おう。戦神の息子である事を、その力で示して見せる。仮にも相手はマズール騎士団を率いる男。先程の王とは違い、手強いぞ」

「言われなくても ベルマールさん、剣をもう一振り貸してくれるか？」

「ええ、構いませんが」

ユーリが再び左掌から光と共にエスクード王剣を抜き放ちながら、不意にベルマールに声を投げ掛けた。ベルマールはユーリの言葉を受け、腰に佩いていた剣を鞘ごとユーリに投げて渡す。ユーリはエスクード王剣を片手で持ちながら、ベルマールから受け取った鞘から剣を抜き放ち、逆の手に持った。

「二剣を用いるか。シャルとは違うな。あやつは歴代エスクード王と同じで王剣のみを振るった」

「俺のは我流だから」

一方のケーネは、腰に佩いた剣を同様に抜き放ち、上段に構えて臨戦態勢に入っていた。

ユーリは両の手に持つ剣を、其々だらりと力なく持っていた。構えと呼べる物ではない。剣の切っ先が床を擦り、嫌な音を奏でてい

る。

「構えないのか？」

ケーネが咄嗟に言葉を発していた。その言葉に、ユーリは不気味な笑みを浮かべ

真正面からケーネに猛突していた。凄まじい速力。支点となったユーリの足元の金属鉋床が 抉れていた。

大理石だぞ、とケーネが内心で信じられないといった声を上げる。一瞬にして懐に踏み込んできたユーリに対し、多少遅れながらも迷いなく上段に構えた剣を振り下ろす。

対するユーリは、流麗な動きでケーネの懐の中で身体をのけ反らせ、その状態から金属鉋床を足の支点にし、横に回転する。異様な身体駆動。柔らかく、強靱で、速い。

回転によって、ユーリの持つ二本の剣が凄まじい速さで振り抜かれる。左手の剣で狭い空間に上段から迫り来たケーネの剣を弾き飛ばし、さらに右手の剣で体勢を崩したケーネの胸部に斬撃を繰り出す。

しかし、ケーネの身体もそれに反応していた。胸部に迫った斬撃を後ろに一步引く事で避ける。剣が弾き飛ばされた事による力の慣性を使った柔軟な動きだった。

ユーリは両手を剣を持ったまま地面に着ける事で身体の回転を止め、そのまま手を支点に飛び上がった一回転し、床に足を着ける。曲芸師のような、あるいは軽業師のような身軽な動き。しかし、その様相とは裏腹に、ケーネの手には重い感触が残っていた。両手で持っていた一本の剣が、しかも上から振り下ろしたのにも関わらず、片手での斬撃で弾き飛ばされた。回転によって威力が増大していたにしても異常だった。

凄まじい腕力と速さだ、と素直に驚嘆する。

対するユーリは

「よく剣を手放さなかったな。良い腕と剣だ」

と、感嘆したように。

ケーネはその上層からの言葉を受けても、嫌だとは感じなかった。むしろ嬉しくすらある。それは恐らく、本能的に彼が自分より高みに居ると言う事を悟ってしまったから。

眼の前のエスクード王家の末裔が、レザール戦争を生き抜いた強者である事を頭と身体に理解させた。

そして再び、剣を構える。

「敬意を表そう」

不意に、ユーリが言葉を紡いだ。そして同時に、相対するケーネはユーリの纏う雰囲気が変わった事を知る。臨戦態勢に入る事で露わになったユーリの放つ空気。

洗練された冷たい殺意の波動だった。

金色の右眼と深紅の左眼がその異質さを助長させる。先程とは違い、まるで感情や表情と言った物を映さない眼。

殺すか殺されるかの状況に一体どれほど長い間身を置けばこんな眼になるのか。

そう考えた時、ケーネの背筋が悪寒を感じていた。

未だに佇んだまま動かぬユーリ。

上段に剣を構えたまま動けないケーネ。

先にケーネの息が上がり始める。

駄目だ、動け。殺らねば殺られる。

そう思った瞬間、ケーネは己の剣に刻まれている《魔術式》の詠唱を唱えていた。魔術の始動。



「全てを燃やし尽くす業火、その身を以て、刃に閃け

ケーネの持つ剣の腹に刻まれた複数のルーン文字が、ケーネからの魔力供給を受けて光輝いた。数瞬して、剣の刀身から渦巻く真っ赤な炎が燃え盛る。業火を纏う刀身。バチバチ、と炎の燃え盛る音が謁見の間に響いた。

それでも、ユーリの表情に変化はなかった。

ケーネは炎を纏う剣を中段に構え直す。

そして、今度はケーネから仕掛けていた。

剣を両手に持ち、中段脇構えのままユーリの斜め前方から円を描くように走り寄る。片足を踏み込み、鋭い斬撃を繰り出した。炎に包まれた刀身が、赤い軌跡を描く。

ユーリは片方の剣でその斬撃を軽々と受け止めるが、ケーネの炎の剣はそのユーリの剣諸共じりじりとユーリの身体に迫っていた。ケーネの業火の剣が、ユーリの剣を溶かし始めていた。

それに勘付いた様子のユーリは、咄嗟にその場から跳躍し、大きく距離を取る。

ケーネの剣を受け止めた方の剣　王剣ではなく、ベルマールから受け取った方の剣　を見ると、刀身の腹の半分が溶けていた。

その様子を遠くから見ていたイズルデが、感嘆の声を上げる。

「中々どうして、良い魔術師でもあるようだ。剣に刻まれている魔術式はかなり魔力を喰う筈だが、なんなく発動させよる。その上、剣の腕も良い。マズールに置いておくには勿体ない人材だな」

ユーリはその間に半分溶けた剣をその場に捨て、動き出していた。再びの高速移動。

逐一ケーネの死角に入る込むように、回り込みながら近づいて行く。ケーネからすれば、その速力も相まって、まるでユーリの姿その物が消えているようだった。

見えない。化物だ。そう心の中で呟いていた。

大理石を強烈な踏み込みで壊しながら、死神が迫る。音を頼りに振り向くが、振り向いた時には既にユーリは移動している。そうしている内に、音が傍らまで迫り

ケーネの腹部に、エスクード王剣による斬撃ではなく、掌底が繰り出されていた。視界がぶれ、腹部の強烈な衝撃に息が止まる。

「ぐッ  
」

訳も解らないまま身体が浮遊感を得て、次いで背中に強い衝撃が走った。

ユーリの掌底は、一人を軽々と浮き上がらせる。衝撃は鎧を貫通し、背部を突き抜け、ケーネを謁見の間の扉まで軽々と吹き飛ばした。謁見の間に響く轟音。

ケーネは背中から扉に衝突し、あまりの衝撃で止まってしまった呼吸をなんとか復活させようともがいた。

その間にユーリがケーネの傍まで歩みより、それまでの強烈な殺意を引っ込めて、言葉を紡いだ。

「イズルデの言う通り、マズールに置いておくには惜しい人材だ。心に抱いている矛盾に決着をつけ、その後、望むならば エスクードに来ると良い。気に入った。よりよい返事を期待している。いずれ会う、その時まで」

ユーリはエスクード王剣を左掌へ再び戻し、踵を返す。

「行こう  
」

ベルマール、イゾルデ、リリアーナに対し、声を投げ掛けた。そしてそのまま、ユーリは三人を引き連れ謁見の間を出て行く。

ケーネはもがきながら、扉を潜って行くユーリ達を見て、必死に手を伸ばした。

待て、待ってくれ、と

去り際に、ベルマールが悲しげな表情で言葉を置いて行く。

「ケーネさん。事の詳細は『陛下』に御聞きなさい。そして…それを聞いた上で、貴方がどう行動するかは貴方の自由です。私は在るべき場所に、居るべき場所に戻ります。マズール王を陛下と呼ぶのもこれで最後でしょう。貴方も、私に敬称を施す必要は以後、ありません。それと、この際ですから貴方が以前私に問いかけた質問に答えましょう。もう隠す必要もないので。貴方は私に『何故貴方はそうも顔や体が衰えないのですか』と言いましたね。あの時ははぐらかしましたが、今はっきりと答えましょう。何故なら私は『長命のアルトナ族と、人間の混血児だから』です。それでは…いずれ、また会える事を祈っています」

ベルマールは最後に一言付け加えようとして、それを理性で押し留めた。

それは、いずれ時がくれば言える言葉。言う事になる言葉。その言葉がどちらの意味を持つのかは、まだ解らない。

私が決める事ではないのだ。

茫然自失のまま虚空を見つめるマズール王と、倒れるケーネを謁見の間に残し、三人はその場を去った。

## 7話 「道筋」

謁見の間か速やかに脱出するユーリ達。ベルマールが傍にいたおかげで、御得意の『でまかせ』と『甘言』で途中にすれ違った王城勤務者をなんなく欺いて行く。結果、大した労力を伴わずに、ユーリ達は王城から脱出する事が出来た。

その後は人で溢れ返るキールの街中に姿を消し、追跡者を巻く。とはいえ、長居すればするほど、マズール王が精神的に回復した時に、自分達が泣きを見る事になるだろうとはユーリとて理解していた。マズール王が策を施してくる前に、このままキールを抜けだし、マズール王国から脱出した方が得策だろう。

ユーリ達はベルマールを伴い、一度適当な宿に部屋を取った。外でうろつくよりは、何処かの建物の中で話をした方が安全だろう。宿の部屋に澄まし顔で入り、ベルマールが衣服の胸の部分に着けていた マズール紋章の刻まれた硬貨を適当に投げ捨てながら、言葉を紡いだ。

「さて、やるだけの事はやりました。後は この後どうするかでしょうね。何か考えはあるのですか？ ユーリ」

一息つけて、ユーリが答える。

「行先はおおよそ決まっているよ。でもその前に、考えておかなければならない事がある。エスクードが未だに存在している事 滅亡していない事 が確定したが、今現在それを知るのはマズール王だけ。だがいずれ周辺各国にも知れ渡るだろう。そこで生じる最も重大な問題は」

一息ついて、続ける。

「エスクードが大々的な防衛力を持たない、という事だ。エスクード人はレザール戦争後、散り散りになってしまった。領地が存在しているとは言っても、その実、国として成り立っていない」

「ならば、今から王国へ戻りますか？ ユーリが王国へ戻り、エスクード王国が未だに存在している事を周辺各国へ知らせれば、散り散りになったエスクードの民達は王国へ戻ってくるでしょう」

「それは駄目だ」

ユーリは予めその答えを待っていたかのように首を横に振る。

「中途半端に国としての権威を取り戻してしまえば、再び『戦争』が確立してしまう。大々的な再興宣言をする時には、既に昔以上の力を持った状態でなければならぬ。マズール王国がヴァンガード協定連合に所属していて、大国である事に変わりはないのだから。中途半端な状態で再び攻められれば、エスクードはもう立ち上がる事が出来なくなる」

「ならば如何に」

「周辺各国に知れ渡る、と言ったが、その実、マズール王がその情報を流通させるまでに時間差が生まれるはずだ。何故ならマズール王は、マズール人としての気質故、一度は手に入れた物を他国へ掠め取られる事を嫌う。否、どの国の王でさえ、自然資源の宝庫であるエスクード領を手放したくはない」

国毎、そして民毎の気質差は確かにある。文化の発展の違いによる細分化。もしくは、初めからそうであったかのように。

「もしかすれば、エスクード自ら再興を宣言するまで彼は黙っているかもしれない。エスクードが再興宣言をするまでに戦力を整え、宣言と同時に公式に、他のどの国より速く攻める、という策を取る

事も考えられる」

「どちらが先か、という事ですか…」

ユーリの言わんとする事を理解するベルマール。勿論、彼自身その事には気付いていた。簡潔に、後に付属する言葉を述べる。

「マズールの戦力がエスクード再興宣言より先に整えば、マズール王は自らエスクードが滅亡していないという事実を周辺各国へ報せ、同時にどの国よりも早く攻め入る事も考えられる、と」

「そう、だから俺達はマズール王国より先に戦力を整えなければならぬ。策はある。まずはその最初の策が成立しなければ、エスクードは再び滅びるだろう」

自国の滅亡を、さも当り前のように述べてしまっ辺りがユーリらしいとベルマールは思った。どちらかと言えば、ユーリは過程論よりも結果論を推し進めやすいのかもしれない。話の腰を折るのも蛇足な気がして、そのままユーリの言葉を引き出していく。

「それで、その策とは？」

ベルマールが訊ねた。

ユーリはその言葉を受け、襟を正し、ゆっくりと宣言する。

「他国と《同盟》を締結させる」

エスクード王国は独立王国だった。他国と貿易こそするものの、同盟という明確な繋がりには歴史上一度も締結させた事がない。他国の情勢に対し中立を貫いた王国である。故に、ユーリの言葉はベルマールとイゾルデに衝撃を齎した。

しかし、それこそがユーリの作り上げる新たなエスクード王国の

第一歩である事も理解していた。

「エスクードの歴史を塗り替えるか」

イズルデが少し楽しそうに笑みを浮かべ、ユーリに言う。

「当然だ。その為の布石を、父が命を賭けて蒔いたのだから。エスクードの理念も解る。だが、俺は俺の理念を基に、エスクードを作り直す。歴代の王に罵倒されようとも、この決心は揺らがない」

強い意志の籠った瞳を、何処か遠くへ向けるユーリ。前口上を述べてみたものの、たとえ父が命を賭けて種を蒔いたという事実が無くても、自分が今の時代にエスクードを建て直そうと思えば、自ずから歴史を壊していたとも思う。使命感がないと言えば嘘になるが、あくまで自分の意志に依る物だ。出なければ、こうまでして再興を望みはしなかっただろう。確かに、そう思う。

「解りました。して その第一歩はどの国と？」

「《ヴェール皇国》」

ああ、成る程、とベルマールが頷く。

《ヴェール皇国》 通称《麗国ヴェール》。マズール王国の北方に位置する皇国である。この半世紀程の間、戦を経験していない比較的平和な国である。

ベルマールは先代ヴェール皇帝と、西方諸国の貿易会談時に相対したことがあった。皇帝という割には気さくな人物であり、先代エスクード王と少し似ている所があったと過去の記憶を思い出した。彼が病で崩御した際に、先代エスクード王が直々に墓を訪れたのは記憶に新しい。高名な武人としての名も持つ彼の崩御を聞いて、如何に高名な武人とも言えども病には勝てないものか、と考えさせられ

たのも覚えている。

「ヴェール皇国と同盟を締結する事が出来れば、マズール王も易々とエスカードに手を出す事は出来ないだろう。立地的に、マズールがエスカードに攻め入ろうとすれば国の北方が空くことになるからな。そこをヴェールに突かれるのは嫌がる筈だ。準備が整うまではヴェール女皇に牽制して貰うのが一つの上策だな」

「確かに。その一步は大きいですね。しかし問題も有ります」

ユーリはベルマールの言葉に対し、直ぐに同意の頷きを見せ、同時に言葉を並べた。

「そう、問題は《聖法国家ルシウル》と同盟を結んでいるかどうかだ」

聖法国家ルシウルは、マズール王国と同じく《ヴァンガード協定連合》に所属している国の一つだった。マズール王国の影に潜むヴァンガード協定連合によって滅ぼされたとも言えるエスカード王国としては、最も手を取りたくない国の一つである。

もしヴェール皇国がルシウル王国と同盟を締結させている現状ならば、ユーリはヴェール皇国との同盟を諦めるつもりでいた。

事実、そういう噂が多少ながらユーリの耳には流れてきていた。

「間接的にですら、俺はヴァンガード協定連合と手を組みたくはない」

ヴァンガード協定連合はエスカード王国との因縁が深い組織だった。その戦いの歴史は後々ユーリの口から明かされる事になる。最も記憶に新しい戦いの記憶が、レザール戦争である。独立国家を貫いたエスカード王国と、国家間の相違を取り消す事を理念とした連



合組織ヴァンガードは、まさに対岸同士の存在だった。正反対である。

「まあ、実際に行つて見なければ解らないよ。本から得た情報は、著者の個人的な感情で歪曲している事もある。俺の持つ情報にはレザール戦争前後の間に穴があるし。ベルマールさんやイゾルデもキールにずっと居たんだらう? 《ミロワール運河》を隔てて北方に位置するヴェールの情報量は俺と似たような物だと思っけど」

「確かに、あまり有用な情報は入ってきませんね。私はあくまで王の手足だったので。一応情報操作もされていたようですよ。マズール王も文官としては良い手腕を持っていますからね。余り関わりの無い情報は与えまいとしていたのでしょう」

「私も同じようなものだ。浮世離れしていた事に変わりはない」  
「と言う事で、足を使って赴くしかない。どちらにせよ、面を合わせなければ同盟は結べない。仮に問題があるなら あとはその場でなんとかする」

予想の範疇を出ない類の問題について、この場であれこれと議論するのは無駄な事だ。状況を知り得ねば、結果の出しようがない。

「再興への一步を踏んだと言うのに既に断崖絶壁に立たされているような気がしますね…」

ベルマールが苦笑しながらため息をついた。  
確かに、とユーリが同じように苦笑しつつ応える。

「前代未聞の大盤振る舞いをしてやろうと言っただ。この程度、まだ序の口さ」

確かな一步を踏み込んだ事に変わりはない。これから歩む道が、

ただひたすらに険しかったただけだ。そう自分に言い聞かせ、ユーリは決意を胸に抱いた。

「ともあれ、私の仕事はこれで決まりましたね」

ユーリが具体的な何かを言っていた訳ではない。なのに、ベルマールは全てを見透かしているかのような視線でユーリを射抜きつつ、言葉を紡いだ。ユーリはその視線に真っ向から応え、一度頷く。

「ベルマールさんには、別働隊としての任務を与える。俺達が各国との同盟締結に走る間に、エスクード領へ戻り、散り散りになったエスクードの民を《王都セリオン》に集結させてくれ」

たとえユーリが各国との同盟を締結させ、自国へ戻ったとしても、その時にエスクードの民が散り散りでは意味が無かった。あくまで主体はエスクードの民にあるのだ。つまる所、ユーリが自国へ戻る事その物が、ある意味エスクード再興宣言となる。少なからず、エスクードの民はそれ知り、脈動するだろう。民全ての情報を統制し、外部へ漏れないよう抑える事など、出来る筈が無い。そうなれば、エスクード王族の王都帰還は瞬く間に各国へ広がり、そして マズール王国はその時点で再び攻めてくるかもしれない。故に

「また、集結させたエスクードの民に王都再興を促し、エスクード独自の軍事力と政治力を 国の機能を、俺が戻るまでに形にする事を命じる。可能ならば、《アルトナ王》にも一報を伝えておいてくれ。『謀略は完遂された。新たなエスクード王国における平等な権利を此処に譲渡する』 と」

ユーリが王都へ帰還した時に、国としての機能が十分に回復していなければ、焼け石に水、まるで意味が無い。攻め入られ、滅びる。

「しかと、心得ました。陛下」

「正式に王位を継いだ訳じゃないんだけどな」

「エスクード王剣こそがエスクード王の証です。それに、新たなエスクードを導いて行けるのは貴方しか居りませんから」

「過大評価だよ。まあ、褒め言葉として受け取って置く事にしよう」

ユーリは照れ臭そうに頭を掻き、それをベルマールは悪戯気な表情で眺めた。

そのままベルマールは視線を横に映し、ようやく話すことが出来ますね、と切りだして、リリアー又に言葉を投げかけていた。

対するリリアー又はベルマールの顔を見て真正面から「死んでれば良かったのに」と呟いていた。

「そんな事言わないでリリちゃん。ほらほら、再会の抱擁でも」  
「寄るな変態っ」

ベルマールはリリアー又をからかっているつもりなのだろうが、当のリリアー又は割と真面目にベルマールを避けていた。ある理由から、リリアー又はエスクード王族の元で生活していた為、ベルマールとも顔見知りだった。しかし彼女はベルマールが嫌いだった。本性を掴ませない飄々とした人柄、その上、リリアー又に度々ちよつかいを出していたベルマール。口で応対しようにも、ベルマールの方が遥かに格上で、物理攻撃で反撃しようにも、それこそ掠りもせず、に全て避けられる。一方的にからかわれるだけだった昔の記憶は、今も尚リリアー又の脳裏に残っていた。

対するベルマールの方は、当初はからかう事に別の意味も見出していた。しかし、繰り返し返している内にかからかう事が習慣になってしまった為、後戻りできなくなったという感が強い。

まあ、面白いから良いんですけどね、と内心で含み笑いを浮かべ、

ベルマールはリリアーヌの額を小突いた。

リリアーヌは腕を振りまわして「離れる変態っ」と罵倒するが、その罵倒は軽々とスルーされ、振りまわしている腕はまるでベルマールに当たらなかつた。全てを全て、手で防いだり、身体を半身にしたりして回避する。その様子を横で見ていたユーリがうんざりしたような表情でベルマールに言った。

「ホント好きだよ、リリイをからかうの……」

「何でしょうね、自分でも身に付いた習慣に若干の恐怖を抱きますよ」

「そう言いつつも顔は笑ってるけどね……」

「おっと、これは失礼、真面目な表情と言う物が苦手な物で」

その間にもリリアーヌの額を小突き続けるベルマール。ユーリは面倒になって、リリアーヌには少し悪いと思いつつも、それ以上関わる事をしなかつた。愛情表現は人それぞれである、と無理やり自分に納得させつつ。

「決まったのならさっさと行け、ベルマール」

「冷たいですねえ、イゾルデ。私を労わるくらいのお気を使えないんですか？ そんな事だからソフィア様にシャルを取られるんですよ？」

「貴様は本当に楽しそうにその話題を持ち出してくるな……」

「フッフ、弱みを見せた貴女が悪いのですよ」

イゾルデは怒りに頬を赤らめて握り拳を作り、震わせる。ベルマールはニヤニヤといつも通りの笑みを彼女に向けていた。

限られた時間しか残されていないと解れば、その日の内に動かさ

るを得なかった。特に、ユーリが帰還するまでのエスクード再興の役割を担っているベルマールは、一刻を争う様に宿を出、他の三人はそれを見送る様に、同様に宿の外へ出ていた。

「そういえば、忙しかったので伝えるのを忘れていましたが」

近場の露店で旅用品を買い漁り、それを旅荷に詰め込みながら、ベルマールが思い付いた様に会話を切り出した。

「リリちゃんの『御兄様』がキールに宿泊しているようですよ。マズール王城でアルトナ族の目撃情報を聞いたので、見に行ってみれば『殿下』でした。流石に私も性質の悪い冗談かと思いましたが、いやはや、結局の所、皆キールに集まってしまいましたねえ。考える事は同じなようで」

何故そんな重要な事を忘れていたのか、とユーリは頭を抱えてベルマールに言う。

ベルマールの事だからわざと隠していたのだろう、とも思うが、その伝え方が唐突過ぎてユーリの思考は止まっていた。それはリリアーヌも同様のようで、穏やかな顔のまま表情が停止している。大丈夫なのだろうか、なかなか見た事の無い滑稽な顔である。

「なんでそんな大事な事をもっと早くに言わないの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」  
「それはですね 極限まで驚いたりリリちゃんの顔を見たかったからに決まってるじゃないですか！」

そんな表情のまま口から吐き出される毒をまるで気にせず、言葉を返すベルマールの顔には満面の笑み。彼はそのまま遠くの一件の建物を指さし、続けて言葉を紡いだ。

「あの宿に匿っておいたので、足を運んでみるといいでしょう」

真っ先に動きだしたのはリリアー又だった。ベルマールには眼もくれず、一目散に走り去る。別れの言葉など<sup>も</sup>在る訳もなく

「フフ、リリちゃんはせっかちですねえ」

その後ろ姿を満足げに眺めながら、リリアー又が走り去った事を確認すると

ベルマールの表情が今までにない程真面目な物になる。

「ユーリ、ヴァンガード協定連合には気を付けてください。

近頃マズールに対する圧力が強いようでしたので、もしかしたら西国周辺にその手の者が駐在している可能性があります。国力が整わない内に貴方の存在がヴァンガードにバレれば何かしらの行動を起こしてくるかもしれません。イゾルデと《殿下》が共に居るならば、それなりの抵抗は出来ると思いますが、無理は禁物ですよ」

「忠告覚えておこう。そっちも気をつけて。俺が戻るまでエスクードを任せる」

「御意のままに」

ユーリも同様の面持ちで答える。

「それでは、本国にて 御待ちしております」

最後の最後は、やはり笑顔で。ベルマールはそう告げて踵を返した。それ以上の言葉は必要なかった。いずれエスクード王国で再び見えると確信しているからこそ、これ以上は<sup>まみ</sup>必要ない。

そう心に刻みつけ、ユーリはベルマールの背を見送るのだった。

リリアー又は息が上がるほどに全力で走った。

ベルマールが指で示した宿の扉を思いっきり開ける。力の加減が出来なかった。ふと宿の中を見回すと、数々の部屋の扉が眼に入る。一々全てを開けるのは些か面倒である。とはいえ、宿の主人に『アルトナ族が泊まっている部屋は何処か』と問う訳にも行かない。ベルマールの言葉が偽りで無いならば、自分の探し人はアルトナ族である筈だった。そして、此処はマズールで、アルトナ族は居てはならない存在なのだから。そこで多少の冷静さを取り戻し

「御主人様、宿泊名簿を見せて頂けますか？ 入用で…若い頃に別れた兄を探しておりますの。その兄が此処に宿泊していると旅の方向に教わりまして」

御願ひします、と流麗な仕草の一礼を見せる。その後、目をうるうるさせながら渾身の上目遣いで宿の主人に懇願するような視線を向けた。本来ならアルトナ族である自分が如何に可愛らしい演技をした所で、主人はアルトナ族である事を知れば真つ先に騎士団を呼ぶだろう。しかし、今は左耳に視覚変化の効力をもたらず魔術装具を付けている。

そのリリアー又の思惑通り、宿の主人はリリアー又の容姿に見惚れ、半ばその色香に惑わされたまま、「勿論ですよ、お嬢さん」と言葉を紡ぎながら一冊の分厚い冊子を取りだし、リリアー又に渡した。

リリアー又は出来るだけ御淑やかさを失わないよう、優雅さを残した手元で冊子を捲って行く。

その実、瞳は凄まじい早さで動いていたが、その事に店主が気付く事もなかった。

そしてリリアーヌの視界に一つの名前が入ってくる。

「《イシュメル・カレヌ・リインミューレ》 二七号室……」

「お兄様の名前は見つかりましたか？」と主人が訊ねてくる。兄の本名を見つけ、一瞬たじろぐ。《リインミューレ》の性を主人に教えた所で、その名が『アルトナ族の姓』を指すとはまず解らないだろう。そう冷静に判断を下し、確信する。

「はい 二七号室の宿泊者はまだ滞在しておりますか？」

「ああ、イシュメル様ですね。王国宰相ベルマル様から仰せつかっております。個人的な御客様という事で。何やら訳ありの御方のようなのですが、私の宿は『そういう御方』を泊める事を別段忌避してはいませんから。金さえ払って頂ければ、また、私共に危害を加えない限りは、私達は何も御訊ね致しません」

店主の宿自慢が始まる。

とはいえ、ベルマルもわざわざその宿泊者がアルトナ族であるとは伝えていないだろう。

「まだ御部屋に居られると思いますよ」

「有り難う御座います。このご恩は忘れません」

「いえいえ、私も御嬢様のお役に立てて光栄です」

芝居掛かった一礼を主人が見せつける。それを眼の端に捉えつつ、リリアーヌは宿の階段を上がって行った。二七というプレートが掲げられた部屋を見つける。

躊躇はなかった。

扉の取っ手を回し、押しこむ。

視界が開け、部屋の中で寛いでいた二人の人物の後ろ姿が眼に入



った。いきなり扉が開いた事に驚いた様に、その二人は振り向く。

「《兄様》……！」

その顔を見間違う筈が無かった。

リリアー又は固まったまま、声を発していた。部屋の中にいた人物の片方。リリアーと同じ金糸のような髪の毛を肩元で切り揃えている青年が、その大きな水色の眼を見開く。そして、透き通るような美声上げた。

「……《リリアー》？」

「兄様！」

リリアー又が勢いをつけて、その青年に抱きついた。

「あれ？　なんでリリアー又が此処に？　あ　」

戸惑う青年。しかし、何かを思い出したように言葉を紡いでいた。

「ユーリも一緒だね？」

「うん！」

「ユーリは僕がこの部屋に居るって知ってる？」

「あ　」

「なら案内してあげなきゃ。リリアー又が此処に居ると言う事は、もうマズール王の前で一芝居打ってきた所だろう？　ベルマールさんから計画の事は聞いていたからね。ともかく、ユーリが今この宿の店主に長い間容姿を見られるのは不味いから。彼らの言う『不干涉』も何処までが本気が解らないからね。ほら、行っておいで　」  
「ちよつと待つてて、すぐ連れてくるから！」

そう言つてリリアー又は興奮した様相を呈したまま、一度部屋を出て行った。

青年の隣にいた褐色の肌の女性が眼を丸めたまま訳が解らないといった表情で青年に訊ねる。

「どういう事なんだ？」

「なに、すぐに解るよ、《アガサ》」

青年は優しい微笑を浮かべたままそう返した。

「……俺もイズルデもこれ以上容姿を見られるのは困るな…手軽に変装出来る魔術装具とかないのか？」

「顔全体を視覚変化させる程の魔術装具がどれ程高値で取引されるか知っているか？ リリアー又によった物でさえ、本来なら金貨三枚は下らない物だぞ…第一そんな手間の掛かる物を作るのも面倒だし、買い手も限られるから作っていない」

「一回目はワザと捕まるって目的があつたから良いけど…マズール王の前で一芝居打ってきた後に再び捕まるってのは御免蒙りたいな…いくらなんでも間抜け過ぎる。マズール騎士が追跡の任に出ているかも知れないし…早くキールから出たい」

再びローブを着込み、そのフードを頭から被って頭髪と顔を隠す。イズルデの黒い外套には元からフードがついていた為、今はそれを被っている。とはいえフードを目深に被った得体の知れぬ二人。悪い意味でそれなりに目立っていた。

「宿泊名簿でも主人に借りるか？」

「この格好で？ …絶対見せてくれないだろ…怪しすぎる…」

「ベルマールがまだ居れば良かったな…」

現状、マズール王都キールに至っては、ユーリとイズルデは非常に動きづらい状態だった。ベルマールがエスクードへの旅路に着く時に、自分達もヴェールへの旅路に出ようと思っていたのだ。それが不意の言葉で後回しになっている。

「《イシユメル》の奴もなんでわざわざキールに来るかね…」

「お前が絶対に訪れると解る場所がここだからな」

二人が宿の前で立ち往生していると、不意に宿の扉からリリアーヌが出てきて、二人に手招きをした。二人はほっとしたように彼女の指示に従い、宿の主人に凝視される前にそそくさと階段を上がって行く。リリアーヌの渾身の演技があつた為、主人の方も深く関わるつもりはないように思えたが。

リリアーヌに案内されて彼女の後に宿の部屋へ入室する。そして

「やあ、遅かつたじゃないか 《ユーリ》」

「《イシユメル》お前…アルトナ族がキールに居る事がどんな意味を指すか解っているのか？」

「解っているとも。だからそれなりの対策はしていたさ」

青年 イシユメルが自分の耳元を指さす。その左耳には、リリアーヌと同じようなイヤリングが括りつけられていた。そこでイシユメルが一度微笑を浮かべ、ユーリの前に立つ。背の高さはほぼ同じで、その事に感慨を受けながらイシユメルが言う。

「やっと追いついた。もう君に『もやしっ子』と蔑まれる事もなさそうだね」

言葉を紡ぎながら、青年がユーリの肩を抱き、そのまま引き寄せ  
る。

「生きていてくれて嬉しいよ、ユーリ」

青年の眼には涙が浮かんでいた。軽口を叩く口元は震えていて、  
先程までの微笑も崩れ ユーリはその様子になんともなく気付い  
て、言い返そうとしていた皮肉を飲みこんだ。

「そして 《リリアーナ》」

ユーリの肩を離すと、今度は隣でその様子を眺めていたリリアー  
ヌの肩を抱き、同じように抱き寄せた。

「僕のたった一人の妹、君を辛い境遇に身を置かせてしまった僕を  
許してくれ 『御帰り』、リリアーナ」

「兄様の所為じゃないよ。私は大丈夫 『ただいま』」

リリアーナの眼にも涙が浮かぶ。

すると、青年の隣で頭の上に疑問符を浮かべていた褐色肌の女性  
が上ずった声で言った。

「いい加減にあたしにも説明して欲しいんだが…」  
「説明するよ。余り時間も無いだろうから簡単にだけどね」

イシユメルがリリアーナを解放し、彼女に優しい笑みを向けた。

## 8話 「代償」(前書き)

説明文が多くなってます。早めに載せないと話が掴めないと思うたので。少々くどい感じになってしまいましたが、お楽しみ下されば幸いです。

## 8話 「代償」

さて、とユーリが部屋のベッドに座りつつ、呆れた様子で言葉を紡ぎ始めた。

「アルトナ王の実子たる『イシユメル第三王子殿下』がこんな所で何をしているんだか」

ユーリの言葉は、その場に居る他の誰に対しても周知の事実だった。しかし、一人だけ、その事を微かに疑っていた者がいて

「本当に王子だったのか…」

褐色の肌をした女性 アガサが嘆息気味に呟く。健康的な肌色に、鸛色の瞳。あるいは、南方諸国なら何処にでもいそうな女性ではあるが、背は高く、細い四肢にもそれなりの筋肉がついている。目鼻立ちが中世的で、演劇で男装役でもすれば一儲け出来そうな感じだった。

「だから本当だって言ったじゃないか。ようやく信じてもらえた？」

疑っていた訳ではないが、と前置きを口上しつつ、続きを紡ぐ。

「あたしの抱く王子像と掛け離れていたんだ、疑う方の言い分も考えてくれよ。まあいい、それで、続々と部屋に入ってきたこいつらは？」

こいつら、と一纏めに言い表しつつ、人指し指を向ける方向にはユーリ、リリアーナ、イゾルデの三人。アガサの問いにイシユメル

が答えようとした所で、突然ユーリが、

「待て、イシュメル。お前が連れてくるといふ事は信頼に足るのだから、俺の名前と身分をそう易々と喋られても困る。少なくともマズール王国領キールに於いては」

ユーリはイシュメルから対象をアガサに移した。

「大丈夫だよ、ユーリ。アガサは 僕の生涯の伴侶だから！」

「…は？」

ユーリの眼が点になる。こいつはいきなり何を言いだすのか。ほらみる、彼女も目が点になってる。

声高に何かを主張された、という事実だけ、アガサの頭の中を駆け巡った。いくつかの段階を踏まえ、ようやくイシュメルの言葉を完全に理解したアガサは、不意に肩元で握り拳を作り、勢いよくイシュメルの脳天に振り下ろす。重厚さを伴った接触音を奏でつつ、イシュメルが悲鳴を上げた。

「あいたっ！痛い！痛いからアガサ！」

「ふふふふざけた事言ってるからだ！」

脳天を抑え、痛みに耐えるイシュメル。二撃目の為の予備動作に入るアガサ。訳が解らないまま眼前で展開される痴話喧嘩。

仲良さそうだなあ、とユーリがしみじみとその様子を見ているが、このままでは会話が進みそうにない。むしろイシュメルが気絶する可能性すらある。割と本気で。そう思い、仕方なく二人の間に仲裁に入った。

「後で存分に殴って良いから、今は話を進めよう」

「本当か？ 本当に存分に殴っていいんだな？」

顔を輝かせるアガサ。

「ああ、イシユメルもそれでいいな？」

「良いわけが無いよね？ 普通ならそこで被害者である僕に同意を求めないよ？」

「いや、イシユメルなら別に良いかなって」

僕はユーリの中でどんな人物として扱われているのだろうか、と頭を擦りながら急に遠くを見る目で呟いたイシユメル。

その間にユーリがアガサをたしなめ、場を整える。

「まあ、お前が大丈夫と言うのだから、今回はそれを信じよう。だが一応忠告もさせてくれ。これから聞く事を誰にも言わないで欲しい」

「やましい事でもあるのか？」

「それをやましいかそうでないかを判断するのは俺ではなく、聞く者だ」

何か事情があるのだろう、と何となく理解し、

「素性を訊ねたのはあたしだ。あたしから言っただからには、了承し

よ」

「恩に着る」

アガサの眼を真っ直ぐに見つめ、一度頷き、満を持してユーリが自らの名を名乗った。

「俺の名前はユーリ。《ユーリ・ロード・エスクード》」



「名乗り恐縮。あたしの名前は《アガサ・ユークリッド》だ。って、エスクード？」

アガサが疑問の籠った声色で声を上げた。

「ははっ、普通そうなるよな。アガサの反応は正しいよ。亡国エスクードの名を姓に冠するなんてどんな妄言かと普通は思う」

「あたしは南国系の出身だから西国には詳しくないが、それでもエスクードが熾烈の果てに亡国となった事は知っている。……ん？

国名を姓に冠するって事は

「彼も王子だよ。いや、王と言った方が良いかもしれない」

イシユメルが復活して、横から口を挟んだ。

その言葉を理解するのにアガサは数秒を要した。あたかも、何処にでもいるような流浪の旅人のような流れで自分たちの部屋に入ってきた者が、まさか一国の王族であるなんて在る訳がない。そう思いつつも、同じような前例をアガサは知っていた。隣にいるイシユメルである。王族というのは、もっと高貴で、国の中心で優雅に暮らし、御忍びで城下街へ遊びに来るとは言っても、もっと御供やら護衛やらを引き連れて華々しく。一つの価値観として、アガサはそんな印象を王族に対して抱いていた。

「何故だろうな、頭を抱えなくなってきた。王子？ 王？ いやいや、まさか」

「ははは、久々にこういう反応を見た気がするよ」

ユーリはアガサの反応を見て、ついぞ笑ってしまう。彼女の反応こそが普通なのだ。亡国を再興するべく訪れたキールで出会った者達は、皆自分の素性を理解していた。疑う事すらなく、よくよく思えば彼女の言う通り、普通は自分の眼の前に旅人の如く扮装して歩

いている者が王族だとは思わない。妄言虚言、即座に信じる事が出来る者など居ない。

「だが、事実だ。俺はエスクード王家最後の末裔。エスクードを建て直す為にこのキールに居る。やる事はやったから直ぐにでもキールを出たいんだけどな」

「そうだね、早めにキールを抜け出しておこうか？」

さも当り前の如く発した言葉は、イシユメルによるものだった。ユーリは少し眉を顰めて、イシユメルを見た。

「付いて来るのか？」

「何の為に僕が危険を冒してまでキールにいたか、君が解らない訳がないだろう？」

「リリアーナをアルトナ族王の元へ連れ戻す為」

リリアーナが一瞬、びくりと動いた。イシユメルはそれを視界の端で捉えていた。

「違うよ。それは違う、ユーリ。確かに、君としてはリリアーナを旅路に連れて行きたくはないだろう」

一瞬にして、空気が変わる。ユーリとイシユメルの間には、凄まじい視線の応酬があった。火花が散っているかのような、それでいて空気は冷たい。話の内容を掴めていないアガサさえ、二人が数秒の間無言で何かのやりとりをしている事は解った。それも、余り穏やかではないやりとりを。

「何事も自分の思い通りになるとは居ないだろうね？」

「…当たり前だ。それでも、どういう道筋がリリイにとって最も良

いかは解っているつもりだ」

「『良い』？ 君はリリアー又じゃない。彼女にとって何が最も『良い』かは彼女が決める事だ。君が他者の視点から一方的に決めて良い事柄じゃないよ。彼女の内面を無視してる。外面しか見ていない。僕がユーリよりもリリアー又の事を理解しているとは言わない。事実、兄妹である僕より、君の方が彼女と一緒にいた時間は長かった。でも、今の君の言葉は納得しがたい物だよ」

「五月蠅い」

ばつの悪そうな顔で、イシュメルの言葉に対して一言だけ紡ぐ。リリアー又は一人、申し訳なさそうな顔で俯いていた。二人が、自分の事で争いを始めたのは解っている。兄が、自分の想いを汲み取って、ユーリを説得しているという事実も、それでも、リリアー又はユーリの想いも無視出来なかった。だから、言おう。

「私…父様の所に戻るよ」

儂い微笑だった。今にも泣き出しそうな

その表情が、イシュメルの眼に焼きついた。全てを押し殺し、抑え、ユーリの言葉を受動しようとする姿勢を端的に表している表情。レザール戦争が、どんな傷を彼女に負わせたのか、理解してしまう。彼女の身体は、ユーリが守った。恐らくその身を盾にして。しかし、それ故に、別の傷が生まれてしまった。過程も結果も、イシュメルは理解してしまった。ユーリが悪い訳ではない。それでも、その事に対する怒りの矛先を向けられるのは、ユーリしか居なかった。知っているのに。彼がレザール戦争で全てを失った事も。彼がどんな想いで彼女を守ったのかも。

「そんな顔をするのはやめてくれ、リリアー又」

「私は大丈夫だよ、兄様」

「そんな訳ないだろう！」

イシュメルはそこで初めて声を荒げた。身体が熱くなる。しかし、頭には冷静な部分がまだ残っていて

「此処じゃ駄目だ。どちらにせよ、キールを出るまでは一緒なんだ。此処で騒ぎを起こすのは僕としてもユーリとしても得策じゃない。出よう、キールを」

「…解った」

ユーリとイシュメルの間は、まだぎくしゃくしたままだった。それでも、お互いに事を冷静に考える力は残っている。イシュメルの言葉に従い、ユーリは立ちあがった。他の皆は二人の間に口を出せる訳もなく、釣られる様に二人の後に付いて行く。

王都キールから逃げるように。キールをそのまま北上すると、同マズール領商業区、ガルツヴェルグ公爵領特区<sup>エスカリエ</sup>という街があった。商業大国の真髄とも言えるエスカリエは、マズール王国において公爵位を保持する《ガルツヴェルグ公爵》がマズール王から独自に管理を任されている街である。

「ここなら追手の勢いも弱まるだろう。ガルツヴェルグ公爵はマズール王家に爵位を賜ったというよりも、マズール王から爵位を奪い取ったみたいなものだ。彼の野望が一国の王になる所まで伸びていたなら、あるいは俺がキールで相對したのはガルツヴェルグ公爵だったかもしれない」

「商業手腕に関しては現マズール王を上回るといふ評価だからな。公爵領特区エスカリエならばマズール騎士団の追手は入って来るのも難しいだろう。マズール王とガルツヴェルグ公爵は一際仲が悪いと言ふ噂もある」

イゾルデが頷きながら言う。

ユーリもそれに頷き返し、

「エスカリエ郊外の宿に部屋を取ろう。一日くらいなら時間を稼げる。マズール騎士団は俺と同時にベルマールさんの方も調査しなければならぬからな。追手は分散するし、エスカリエではマズール騎士団も自由に動けないだろう」

「エスカリエの商人たちは政府の犬である騎士団を目の敵にしているからな。金に煩い商人たちが税の取り立てをしている騎士団を簡単に街に入れる事はないだろう。だが、それでも国家権力である騎士団を完全に止める事は出来ない。持って一日だぞ、ユーリ。それまでにお前らの話に区切りをつける。私たちの入る余地はなさそうだ」

少し残念そうにイゾルデが苦笑と共に言葉を紡いだ。

「解ってる」

ユーリは自分の意志を確認しながら、ゆっくりと歩を進めて行った。

宿に着いて一息。ユーリとイシュメルはリアーヌを連れて外へ出ていった。

その間、アガサとイゾルデは宿の部屋で寛ぎながら彼らが帰ってくるのを待つ。

ふと、アガサがイゾルデに訊ねた。

「イシユメルから話を聞いたが、貴女は魔女なのか？」

アガサの質問にイゾルデは笑顔で答えた。

「いかにも。魔女を見るのは初めてか？」

「いや、一人だけ出会った事がある」

その返答はイゾルデの眼を丸めさせる。魔女というのは何処に居ても疎まれ、遠ざけられる存在。ゆえに、魔女は俗世から離れて孤独に暮らす事が多い。いかにも一般人らしい彼女が魔女を見る事はほとんどないように思えた。だからこそ訊ね返す。

「ほう、何処でだ？」

「檻の中」

少しして、イゾルデは自分の安易な質問を恨んだ。

「あたしは元奴隷なんだ。色々あって、あたし自身を売る事しか生きられなかった。金も力もない子どもだったよ。その時に、魔女を見た事がある。同じ檻で、何度か話もした。彼女は物知りで、あたしは色々教えてもらった」

「そうか…すまないな、嫌な事を聞いた」

魔女は前述した理由から、大抵性格が歪曲している。誰もが誰もそうであるとは言い切れないが、得てして歪んでいる場合が多い。

魔女であるイゾルデはそれを知っている。魔女と話をする事は難しい。魔女は自ら人と関わろうとはしない。関わっても、大抵が悪い結果に結びつくから。

そう思いつつも、イゾルデはなんとなく、彼女の言葉を信じた。清々しく、素直で、実直さの窺える人柄。アガサは人に警戒を抱かせる類の人物と真逆だった。彼女ならば、捻くれた魔女でさえ心を開くかもしれない。戯れに話をしてみようと思うかもしれない。

「別に気にすることじゃない。今は違うし…まあ、あたしの最初に買ったのがイシュメルで、本当ならイシュメルの奴隷という事になるんだが　あいつは自由に自由に生きるという。気まぐれかとも思ったけど、最近はそうも思えなくなつたよ。あいつ、頭良い癖に馬鹿だし、御人好しだし。本当にあたしを好いてくれているなら嬉しいけど　」

「きつとイシュメルはお前だから買ったのだろうよ」

「　　って変な話になつたな。今のは忘れてくれ。イシュメルには言わないでくれよ？」

「心得ているよ、アガサ。心配するな」

恥ずかしそうに頬を朱に染めながら、アガサは頭を掻いた。皆の前でははぐらかしていたが、アガサの方もまんざらではなさそうで初々しいな、等と老婆心のような物を芽生えさせながら、イゾルデはアガサに微笑んだ。

それから他愛のない話をしていると、イゾルデがアガサのもどかしそうな様子に気づいて、彼女のもどかしさの理由を話し始める。

「ユーリ達の事を知りたいか？」

「あ、バシてたか？」

「隠し事は苦手なようだな。その魔女に隠し事をするコツを教わらなかつたのか？」

「教えてもらったけどあたしはどうも苦手で。 知りたけれど、それをあたしが知る事で話がややこしくなるなら別に教えてくれなくてもいいんだ。ただ あたしは余りにイシュメルの事を知らない過ぎる。あいつは私に余計な心配を抱かせたくないのかもしれないけど、もう半ば道連れ状態だし、教えてくれると助かる…かな」

アガサは、人の心を見抜く力に長けていた。その上で、相手の意志を尊重しようとする彼女の姿勢に、イゾルデは少なからず感動を覚えていた。人が皆、彼女のようななら、魔女という存在はもう少し楽に世の中で生きていられたかもしれない。とはいえ、事実はそのではない事は確かだ。イゾルデは余計な考えを排除しつつ、アガサに言葉を投げかけた。

「ユーリもお前の事を信用しているようだから、教えてやろう。アルトナ族の歴史、エスクードの歴史、そしてユーリが辿った険しい道の軌跡を」

イゾルデが話し始める。それは多分な悲劇を含んだ悲しい物語だった。

イゾルデは言葉を選びながら、演説するかのように、ゆっくりとはっきりと話し始める。

「エスクード王国は、十数年前に同エスクード領西端に位置する森に隠れるように住んでいたアルトナ族と同盟を結んだ。グラン聖戦と呼ばれる人間とアルトナ族の争いが勃発する前の事だ。エスクード領に住むアルトナ族も、大陸に散らばって生きているアルトナ族同様、人間を目の敵にしていた。だが、先代エスクード王の人柄と、



粘り、そして確かな対価を払い、アルトナ族と同盟を結ぶ事に成功した」

「本で聞いた事がある。エスクードはアルトナ族と繋がっているかもしれない、と」

「事実、繋がっていた。しかし、その実、エスクードもアルトナ族も、多大な犠牲を払っていた」

「犠牲？」

「そうだ、と頷き、続きを紡ぐ。」

「遙か昔より、人間との間に大きな溝を作っていたアルトナ族だったが、実の所、何度か人間と同盟を組んだ事がある。どちらかと言えば、アルトナ族を疎外していたのは人間の方だからな。アルトナ族の魔術的資質は人間種を上回るものだ。故に、それを軍事利用しようとする人間がいてもおかしくはない。アルトナ族は同盟の元に同盟を締結した人間の国に加勢し、幾度も戦に参加した事がある。」

「だが、終戦してしまつと、彼らは急に無用の長物になつてしまつた。彼らが反乱を起こせば多大な犠牲が出る、同盟国はそう考えた。彼らが争いを好まない種族だと理解していながら、強大な力を恐れる想いが優先され、結果、再び疎外した。アルトナ族は同盟を結ぶ度に裏切られ、裏切られ、裏切られた」

「人間から手を差し伸べておいて……か」

「そうだ。だがアルトナ族は馬鹿だつた。正直で、清廉で、やはり馬鹿だつた。彼らはそれでも同盟を持ちだしてくる来る人間を信じ、締結させた」

馬鹿だつた。イゾルデは自分に言い聞かせるかのように、そう言葉を紡いだ。

「アルトナ族達は人間を責める以前に、自分達を責めた。同盟国を

想う力が、私たちには足りなかった、と。そこで、彼らはいつからか同盟誓約の証として、『自らの部族の者を差し出す』様になった。紙面や口頭での誓約は容易い。端的に言ってしまうえば、裏切る事も同様に容易い。簡単になかった事に来る。証拠を消すのが容易いからな。詰まる所、戦乱の蔓延る世の中では、同盟とは口ばかりの物で、締結させたにも関わらず同盟国を疑い続けなければならぬ状態だった。アルトナ族はそれを己の身を削る事で覆した。事実、アルトナ族の誓約の方法に心打たれ、彼らに心を開いた王もいた。かつて、だがな」

最後の言葉を強調するイゾルデ。アガサは彼女の言葉を静かに聞き続ける。

「不条理の能動的受動が、同盟国に対する誠意となる事を知ったアルトナ族は、以後、それをアルトナ族の掟として制定させた。それこそ、人間達の思う壺だったかもしれない。さらに、部族から差し出される者は、徐々に身分の高い者になっていった。アルトナ族は一層己の身を削る所業に打って出た。心理的効果は確かに増大する。しかし、その一方で負荷は計り知れなくなる。だが、掟を重要視するアルトナ族は、それ以降の時代でさえ、その掟を守り続けた。そして――」

現アルトナ王の長女にして第四子、《リリアーナ・シーヌ・リインミュール》第一王女はエスクードとの同盟に際し、エスクードに引き渡された。

「この時代にまで遡ると、さすがのアルトナ族も人間との共存を諦めかけていた。最後かもしれない、そう思いつつ、アルトナ王は先代エスクード王の申し出を受け入れた。我々との共存を望むのならば、その娘を守って見せろ、と。期間を設け、その期間の間リリア

「又を守り続ける事が出来れば同盟を締結させる、という条件で、王の子息たちの中で最も弱く、幼いリリアー又が差し出された。アルトナ王も苦渋の選択だったろう。私も一度相對した事があるが、あれは多分に氣弱で、優しすぎる男だった。アルトナ王はアルトナ族としては未だ若く、平均寿命が二百年近くある彼らの中では若輩者だったしな」

「二百年!？」

アガサが驚愕を顔に貼り付ける。

「アルトナ王の血族は、アルトナ族の中でも最も魔術的資質を受け継いでいる者達だ。イシュメルは恐らくもつと生きるぞ?」

「二百年か…種族の違いを痛感させられるな」

「まあ、その話は追々、だな。ともかく、そうしてリリアー又は幼少からエスクードで暮らす事になった。だが、それから数年して、エスクードはレザール戦争に突入した。アルトナ王でも予期しない事態だったろうよ。アルトナ王は父として娘を呼び戻したいという氣持ちと、アルトナ族として種族全体に制定された掟を守らねばならないという氣持ちの狭間で漂った」

アガサが息を飲む。

「どっちを選んだんだ?」

「後者だ。決めかねるアルトナ王だったが、《リインミューレ》の姓が後者の決断を大層後押しした。リインミューレはアルトナ族の中でも名のある血族。それ故に、リインミューレの血族がアルトナ族全体の掟を破れば、種族全体に混乱が巻き起こる。悲劇が収束した瞬間だな。数年経過した頃には、先代エスクード王とアルトナ王は随分と親交を深めていた。お互いの性格の相性が良かったのだから。先代エスクード王の一人息子であるユーリも、その頃にはアル

トナ王の子息達と打ち解け、随分とアルトナ族の森に入り浸っていたという。最も年齢の近かったイシュメルとは兄弟のような関係だったとシャルは言っていたな。だが、そこでレザール戦争だ。お互いに苦悩はあった。第一次、第二次に至り、リリアーヌを守り続けたが、第三次レザール戦争は様相が異なった」

それはアガサもよく知る所だった。ヴァンガード協定連合が凄まじい軍事力を援助したため、派手な戦になった事。

「そこからは私も知らない。ユーリがリリアーヌを守りきったという事実は、現状を見る限り確かだ。アルトナ王の指定した期間も過ぎた。だからこそ、ユーリはイシュメルに誓約を果たした証としてリリアーヌをアルトナ王の元へ送り届けるよう諭そうとしたのだろう。リリアーヌがこれから起こる別の戦の火の粉に巻き込まれない様に」

「成る程…な」

アガサが一人ごちて思索に耽る。

アガサが思索に耽るのを見て、イゾルデはそれ以上言葉を紡がずに、ユーリ達が帰ってくるのを待った。アルトナ族の払った代償については話したが、エスクードの払った代償についてはまだ話していない。とはいえ、彼女の頭をこれ以上混乱させるのも得策じゃないだろう、そうイゾルデは胸中と思う。

本当は、もっとややこしい話なんだが、と心の中で呟きながら

「僕達二人が言い争っても答えは出なさそうだね」

「…」

郊外の宿の外。人通りのない裏路地で、ユーリとイシユメルはリアーナを間に置きながら互いの想いをぶつけあった。二つの想いの板挟みとなるリアーナ。ユーリもイシユメルもお互いに譲る気はなく、答えは出ないままだった。散々想いをぶちまけて、その後冷静さを取り戻したイシユメルがユーリに言う。

「リアーナはもう大人だ。彼女の行動は、彼女に決めさせるのが良いと、僕は思う」

リアーナ又は二人の板挟みになりながらも、答えを決めかねていた。ユーリが自分を心配する想いも、兄が自分の意志を尊重しようとする想いも。それでも、リアーナ又はユーリを心配させたくなかった。レザール戦争の時から、そうやって生きて来た。彼の重荷になるまいと。本当は、傍に居たいと思いつつも

「ユーリに従うよ、兄様」

あの表情。全てを受け入れるような、自分を押し殺しているかのような。

ユーリはリアーナの顔から目を背けたかった。イシユメルが何故こうまで食い下がるのかも、彼女のその表情が原因だと、気付いているのに。

彼女はレザール戦争で心を傷つけてしまった。何かを棄て去った。ユーリもそれが解っていた。戦時下、共に居たのだから、その変化に気付かない訳もなく。また同様に、自分も何かを棄て去ってしまったと自覚しながら。遂に、彼女の顔を真正面から見据え、嗚咽するかのよう、ユーリが言葉を紡いでいた。

「良いんだ、リリイ。もういい。そんな顔をしないでくれ。」

お前はお前の好きなように生きれば良い。付いて来るのも…自由にしろ……」

「でも」

「お前が俺の傍に居た方が、俺の為になる場合もあるって、解ってるから。お前がそうしたいのなら、俺はお前を守るよ」

蟠わたかまりは残る。それでも、自由にしろと言ってくれたユーリに対して、リリアーヌは頼りない笑顔を浮かべる。知っている。私はユーリに守られなければ生きていけない事を。それでも、ユーリの傍に居たいという気持ち強い事も。

好きなものだから、仕方が無い。

本当は、離れたくない。一度離れたら、彼がそのまま帰ってこないような気がして。その感情を押し殺す術を知っているのも事実だけれど、今は彼の言葉に素直に喜ぼう。

イシュメルは、ユーリが目元を手で覆い隠している事に気付いていた。嗚咽に近い発声と、少しだけ震えている手。

「リリアーヌ、アガサ達の所に戻っておいで。僕たちはもう少ししたら戻るから」

笑顔でリリアーヌに言いながら、彼女の頭を撫でる。彼女は一度だけユーリに視線を向けるが、兄同様何かを察知して大人しくその言葉に従った。

そして残る二人。幾許の間、言葉を交わす事もなく、イシュメルはユーリの傍らに立っていた。路地の中に一本だけ建っている街

灯の柱に背を預け、日の沈んだ暗い空を見上げる。ユーリは未だに目元を覆いながら、同じように、街灯の柱の反対側に背を預け、そして遂に声を上げた。

「俺の所為なんだ」

ユーリは泣いていた。

それを悟られまいと、リリアーナには悟られまいと、必死で耐えていたのだろう。イシュメルはそう思う。

「俺がもつと巧くりリイを守る事が出来れば、リリアーナが何かを棄てる事もなかった」

隠してきた想いを、全てぶちまける様に、ユーリは言葉を紡いでいく。

「知ってたんだ。リリアーナが俺を心配させまいと自分の想いを押し殺している事も、その度に儂い笑みを浮かべる事も。いつからか、そうなるようになっていた。レザール戦争の時、倒壊した建物の下洞穴で過ごしていた時も、俺が戦いから戻ると、いつもリリアーナは笑っていた。終戦後、村で過ごしていた時も、俺が帰ってくるといつも笑っていた」

その度に、自分を責めずには居られなかった。付け加える言葉も、イシュメルは静かに聞いていた。

「俺は守り切れなかったんだ、イシュメル。お前の妹を」

イシュメルはその言葉を受けて、優しい声音で答えた。

「君は彼女を守り切ったよ。でなければ彼女は此処には居ない。君は父上の言葉通り、彼女を守った。誰もそれを責めようとはしない。それに、生きているならば、棄てた物を拾う事も出来る。また探せばいい」

君は彼女を守るために、何を棄ててしまったのだろう。そんな言葉が不意に脳裏に浮かんで、イシユメルは咄嗟に言葉を切った。

きっと彼も何かを棄ててしまった、その事実だけが何となく理解出来てしまって、イシユメルの中を駆け巡っていた。何を棄ててしまったかは解らない。けれど、いずれ解る事だ。

僕はその時に彼を支えてやれるだろうか。

イシユメルは己の不安に対し、櫓を飛ばす。

何の為に此処へ来た。僕の想いは変わらない。彼を支える。その為だけに彼の元へ来た。偽りはない。自分の存在価値を、そこに見出す。彼の為なら僕は死ぬるだろう。兄弟と慈しみ、親友と慕う君の為ならば。だから

「僕は君が生きていてくれて、本当に嬉しいよ、ユーリ。もう見失なうものか」

ユーリは、彼の言葉を受け止める。兄弟と慈しみ、親友と慕った彼の言葉を。

目元を拭い、顔を向ける。

「お前は死ぬな。俺より先に死ぬな。約束しろ。約束するな  
ら付いてきてもいい」

「ははは、随分と厳しい約束だね？」



本当は、同じ言葉を彼に返したいけど　世界の戦乱の渦中に  
これから踏み込もうとしている彼には、死ぬなどは言えなかった。  
きつと彼は覚悟している。ずっと覚悟していた。レザール戦争から  
ずっと。

「良いよ。解った、約束する」

幼少から、肉体的にも精神的にも強者で在り続けた君が、これ程  
までに弱い姿を晒してまで、そう願うならば、聞くしかないじゃな  
いか。イシユメルは心の中で苦笑しながら呟いた。

「なら、付いてこい」

ユーリの表情はいつもの顔に戻っていた。リリアー又の前では決  
して涙を見せなかった彼。涙を見れば、彼女がまた心配する。全  
てが終わるまでは、きつとその姿勢を崩さないだろう。若しくは、  
リリアー又が棄て去った物を取り戻すまでは。

「君は王になる。そして　いつか死ぬだろう。その時まで、僕  
は君の傍に居よう」

「ならば、お前は俺の半身であれ。そして俺がお前の半身である事  
を知れ。先に逝くな、それだけだ」

「御意のままに　」

仰々しく一礼して見せるイシユメル。ユーリは彼の肩を一度叩き、  
宿へ戻って行った。

子どもの時とは立場も状況も大きく変わった。取り巻く環境は変

わり、心も変わる。それは此れからも変化するかもしれない。

それでも、たとえ君がどんな道を辿ろうとも、僕は君の友で在り続ける。

## 9話 「右眼」

マズール領王都キール。マズール王城 王室。

ケーネの焦燥を含んだ声が響いた。

「陛下、今の話は本当ですか!？」

エスクードは未だに、微かではあるものの存在している。その経緯と事実を、マズール王に聞かされた所だった。

「事実だ。謀られたのだ。そして何よりも、私が義務を怠った結果だ」

王室の簡素な執務椅子に座って半分茫然としているマズール王と、執務机の前で片膝を床につけて話を聞くケーネの姿があった。

「陛下は、この後どうなさるおつもりなのですか…」

どのような判断と行動を起こすにしても、その全てはマズール王に依存する。ケーネは徐にマズール王に訊ねていた。

「どうする、か…。どうもこうもないであろう。騎士団は全てマズールに帰還させる。他国に勘付かれるのも時間の問題だな」

「しかし、勘付かれれば」

「どの国もエスクードを獲りに来るだろうな。あそこは自然資源の山だ。鉱石を初め、木材、穀物、水に至るまで、あの土地は様々な特異に恵まれている」

マズール王の方針は、当然の処置とも言える物だった。事実、エ

Eskudoが未だに存在しているのなら、現在 Eskudo領に駐在しているマズール騎士団は不法侵入している事になる。それも規模の大きな領地侵害。一つの国として、それはあるまじき行為。現状が他国に知られた時、騎士団を Eskudo に置いたままにすれば言い訳すら出来ずに責められる。

それだけはあつてはならなかった。

一度騎士団を退かせ、 Eskudo に再度宣戦を布告し、攻め入る。こんな状況は滅多にないものであるから、定石とは言えないかもしれないが、いうなれば今行使する事が出来る中で最良の策であった。

「では、騎士団を帰還させ、早々に Eskudo に攻め入らなければ  
無理だ」

即座に返された答えに、ケーネは目を丸めて抗議した。

「何故ですか！ Eskudo は今でも瀕死の状態：直ぐに攻め入れれば  
…！」

「瀕死…？ いや、あの末裔がそんな軟<sup>やわ</sup>な筈がない。何かしらの策は打つてくる。なにしろあちらにはベルマールがいるのだ。末裔の力の底も知れぬ」

「しかしッ！その程度なら量で押し切れれば 時間を与えて十分な策を練られる方が厄介であると私は判断します！」

「お前も知らぬわけではあるまい。形上、『虐殺』と名打たれた我が国がヴァンガードに加入した後に起こした第三次レザール戦争を。圧倒的な物量差：連合の力を借りて『止め』を差しに行つたあの戦で、 Eskudo がどれほどの抵抗を見せたか…。あの場にいた者にしか解るまい。いや、 Eskudo の民と剣を交えた事のある者にしか解るまい。たかが小国、されど…アレの防衛力は紛う事なく大陸の頂点に位置する物だった。末裔が事実を伝え、今一度工

Eskudoの民が反骨の意志を閃かせ、ひと所に集まれば

ケーネは当時の事を思い出す。騎士団員の一人として先陣を切った第三次レザール戦争の事を。

一言で言えば 強大だった。

『戦神』。

力の権化たる先代 Eskudo 王シャル・デルニエ・ Eskudo。初めて見た時に率直に思ったのは、『敵わない』という諦念にも似た感情だった。 Eskudo 王剣 今思えばその王剣も偽物だったのが を片手に戦場を駆け回るその男は、武力の頂点に位置していると確信出来る程の人間に見えた。

事実、彼は闘いに於いては負けておらず、マズール王に殺されたのは、彼が突然『降伏を進言してきたから』であった。闘いには負けず、戦いに負けた。

時間稼ぎ。

戦に参加しなかった国民を逃がすための。数日もの間、休まずに当時の宰相ベルマールと戦い続けた Eskudo 王は敵側から見ても尊敬に値する程の人物だった。

王だけにあらず、レザール戦争に出陣してきた Eskudo 人は皆が皆、強大な武力を誇っていた。小国との戦とは思えないほどの犠牲を生んで勝ち取った勝利。元の数が膨大だった為、それも一般見識から見れば小さな傷。それでもやはり、実際のところ犠牲は大きかった。

「アレはな、『力』に特化した民なのだ。 Eskudo の民は力の権化。我らマズールの民に、逞しい商魂が宿る様に… Eskudo の民は純粋な力に特化した民族なのだ。あるいは、『暴力』に。根本的に、体に通っている『血』が違う。歴史的に見ても、自然資源に恵まれている Eskudo はあらゆる時代に搾取される側として存在した。それでも、現在まで存在し続けているのはどの時代においても

国を守ってきたからだ。遙か原初、我らが一つから生まれた時にはなかった民の『差異』も、そうやって時代を重ねる毎に枝分かれしていった。現存している事に、エスクードの血族の証明が為されている。領土を広げようとしなかったのもエスクードの民の気質かもしれない。奴らは自らその暴力を使って支配領域を広めようとはしなかったが、自分たちに牙を向ける者に対しては全く容赦しなかった。唯一、奴らに『魔』の適性がないのは幸いだ。神はその辺を考慮しているらしい」

長々と、誰に話しかけるでもなく言葉を並べるマズール王。傍らのケーネはそれを静かに聞いた。

「だが…」

マズール王は続ける。

「我らとて、その気質と能力故に、一度手に入れたものを手放す程愚かではない。今はまだ様子を見ることしかできんが…あいまみいずれ再度、あいまみ相見えよう、末裔よ」

その言葉を聞いて、ケーネはゆっくりと立ち上がり、一度頭を垂れて王室を出ていった。胸中に引つかかる物を感じる。しかし、マズール王は立ちあがった。今はまだ、決断の時ではない。そう己に言い聞かせながら。

ガルツヴェルグ公爵領特区エスカリエ。

次の日の早朝、宿の部屋で小さな会議を開いていた。

ユーリが現状を確認しながら、皆に言い聞かせている。

「マズール王に大きな動きは見られない。慎重だな。こちらとしては大いに有難いが、その分あちらも上策を練ってくるだろう。…とはいえ、その点に関しては今考える必要もない。何より、今の状態ならヴェール皇国と同盟を締結させられれば先手を打てる」

「ヴェール皇国か。美しい国だと父上に聞いているよ」

「そういえばイシュメル、お前王子としての執務はどうした？ どうやって森を抜けだしたんだよ…」

「なーに、簡単な事さ！ 全部兄上達に押しつけて来た！ 僕第三王子だしぶつちやけそんなやる事無いし、父上にはバレると止められるから置き手紙だけ置いて抜けだしてきたのさ！」

「一応言っておくが、威張れる事じゃないからな？」

大きなため息をつくユーリ。胸を張って言うイシュメル。  
そこへアガサが言葉を挟んでくる。

「いや、あのさ、ユーリ。あたしがそんな重要そうな事聞いてて良いのか？」

「ん？ ああ」

ユーリがアガサの申し訳なさそうな顔をにやにやと見ながら、

「勿論道連れだけどな！」

「なななんだと！？」

「え？」

「さも当り前の如く言うなよ！ なんだよその『俺何か間違った事言った？』みたいな顔は！？」

「落ち着きなよ、アガサ。どっちにしろ僕は付いて行くんだから、アガサも付いてくればいいじゃないか。僕と一緒にだし、良いでしょ

「？」  
「自惚れるな馬鹿！」

風切音を立てながら、アガサの拳がイシュメルの脳天に舞い落ちる。

「あいたっ　　！冗談なのに！本気で殴る事ないじゃないか！」

「騒がしいのう…！」

「兄様って頭良いけど馬鹿だよ。変わらなくて嬉しいけど…悲しくもあるよ、私」

イゾルデとリリアー又は極力二人に近づかないように離れつつ、状況を見ていた。ユーリはアガサを「いいぞ、もつとやれ」等と煽りつつ、イシュメルが振り回されるのを笑みを浮かべて見ている。

アガサがイシュメルの髪を引つ張るのをやめ、ようやくため息と共に言葉を発した。

「まあいいか：イシュメルの言う通り、あたしはイシュメルに付いて行く事になっているしな」

「じゃあ殴る事なかったよね？　なかったよね？　僕の言った事当たってたもんね？」

「一々煩いぞ馬鹿。ともかく…そういう事なら、宜しく頼むよ、ユーリ王子？　陛下と呼んだ方がいいか？」

「さっき呼び捨てにしてたじゃないか。俺はさっきの呼び方の方がいいな。アガサには俺の友人で居て貰った方が嬉しい。こちらこそ、宜しく頼むよ、アガサ」

「恥ずかしい事を堂々と言ってくれるじゃないか。解ったよ、ユーリ」

アガサも満更では無さそうで、頬を掻きながら適当に視線を漂わ



せ、少し笑みを浮かべて答えた。その様子を見ていた他の皆も、微笑む。

「エスカリエで適当に旅の為の備品を買い集めよう。その後、マズール領を北に抜けて《ミロワール運河》を渡り、ヴェール皇国デルサス皇都だ。ミロワール運河地帯ならデルサスを経由してきた行商達もいるし、ヴェール皇国の情報を仕入れる事も出来るだろう」

西方国家と西北国家の大きな国境線として流れる《ミロワール運河》。大陸北方から流れ出ており、大陸の西へ斜めに湾曲し、下流は大陸西方、そして西の海に霧散する巨大な運河である。北方から物資を運ぶ行商人達は皆このミロワール運河を渡って行商をしていた。

「なら、早速備品を買いに行こうよ。分担する？」

イシュメルが言う。確かに、備品を調達し、マズール領に出るには分担して買い集めた方が早い。問題は分け方だ。ユーリは少し思案して、皆に伝える。

「俺とイシュメルとイゾルデ。それと、リリイとアガサ」

イシュメルはユーリがリアーナを自分と別の分担にした事に素直に驚いた。彼の心境に何か変化でもあったのだろうか。

その視線にユーリが気付いて、言う。

「別に、俺といつも一緒に居る方が安全だとは言えないだろ。仮に騎士団に目を付けられても、俺とイゾルデが一か所にいれば騎士団はこっちに注視しやすい。マズール王が真っ先に狙うとしたら俺だしな。だから俺は変装なしで外に出る。簡単に言えば陽動だ。イゾ

ルデも好きにしてい。イシュメルはどっちでも良いんだが、騎士団と事を構えられたら俺とイゾルデの方だから一応、だな。十中八九、騎士団はリリイ達の方には行かないだろう」

ユーリは一度言葉を切り、でも、と続ける。

「もし騎士団が近い位置にいたら、迷わず逃げる。目立たない様にゆっくりとな」

後半はリリアー又とアガサに向けて。

「買い物するだけでも一苦労だな。ユーリとイシュメルの懸念が減る様に、リリアー又とアガサにはこれを渡しておこう。リリアー又は勿論の事、アガサまで狙われるとなるとイシュメルまで発狂しかねんからな」

イゾルデがリリアー又とアガサに何かを手渡す。

イゾルデが手渡したのはルーン文字が彫られた金属製の腕輪だった。金色に輝く腕輪の外側に、細かいルーン文字といくつかの魔法陣が刻まれている。

「いざという時は腕輪のルーン文字を一度なぞり、その場で留まれ。一分間だけ近くの人間から姿を見えなくする事が出来る。と言いつつも、実際にその場から消える訳じゃないから動く効力が薄まる。そこは気をつける」

「魔術装具か。…面白い術式だね。周囲の人間の意識を装具保持者から逸らす、つてとこかな？ イゾルデ」

「大まかに言えばそうだな。魔力を平均並に持つ者なら楽に扱えるように工夫したんだ。御蔭で効果時間がやけに短くなってしまったがな。私もキールに来てから時間を持て余していたから、魔術装具

なら有用な品から趣味の域を出ない品まで相当作り込んだよ、イシユメル。お前も一目で魔術装具の術式構成を見抜くとは中々だな。…さすがは魔に優れるアルトナ族の王子と言ったところか」

「お褒めに与り光栄です」

演技掛かった一礼をするイシユメル。

イシユメルはイズルデを忌避するどころか、逆に尊敬していた。元々人間種に対して強い憎しみを抱いている訳ではなかった。どちらかと言えば、魔女という存在はアルトナ族と似ていて、同族と呼ぶにふさわしいのかもしれない。そう考えれば、人に虐げられつつも、世界に諦観せず、自我を保ち、長い間を生き続けている彼女は尊敬するに値していた。

どこか飄々としつつも、歳の割に無邪気な面もあり、時々見せる年長者の威厳の様なものもある。彼女はアルトナ族である自分に対しても、友人の様に振る舞ってくれる。彼女も同じ気持ちなのだろうか。そうであれば嬉しい。一度、彼女が先代エスクード王と共にアルトナ族の森を訪れた時に会った事があった。彼女はその時もアルトナ族達に歓迎された。皆同じような想いだっただろう。まさかこんな形で再び会う事になるとはその時は思わなかったが、成ってしまったのだから仕方が無いし、素直に再会を喜ぼう。同じ、ユーリを支える者として。そして、友人として。

その後、先にアガサ達が宿を出て行った。移動手段として扱うのは馬だったが、それは最後に皆で宿を出る後に人数分買う事になった。その事に対し、アガサが意気揚々と「その時はあたしに任せてくれ！」と息まっていた。彼女は奴隷になる前は馬売りとして過ごしていたらしい。譲れない物が在るのだろう。

そして幾許か経って、ユーリ達が宿を出て行った。

「さて、二人が居なくなつた所で生々しい話をしようか？ ユーリがリリアーナとアガサを別行動にさせたのはこういう理由もあるんだろう？」

イシュメルがエスカリエで最も人で賑わう中央通りを歩きながら言う。

「流石に聡いな、イシュメル。まあ、態々聞かせる必要も無いと思つてるから」

「それには賛成だね。それで、いきなりだけど、聞いておきたい事がある」

イシュメルがこれから紡ぐ言葉をユーリも察していて、自分の右の脛に少し触れた。

「制御出来るようにはなつたんだね」

「成り行きだよ。開眼させっぱなしだと魔力がだだ漏れになる。魔術師には簡単に勘付かれるからな。マズール戦争下でそれを身を以て知り、どうにかして抑えられないかと思つて四苦八苦した結果、ある程度なら制御出来るようになった」

ある程度なら、という言葉をユーリは胸中で強調していた。しかし、語感に表す事は無かつた。

そこでイゾルデが少し眉を顰めて言う。

「私もお前の右眼について大まかな情報を知っているが、それでも確認させてくれ。お前の右眼は元々の自分の眼じゃないな？」

「ああ、そつだよ」

それこそがエスクード王家が払った代償。そして代償の果てに得た特異な力。

「俺の右眼は《竜族》の眼だ」

やはりか、イズルデが額を抑えて大きく息を吐く。先代エスクード王から聞いてはいた。しかし、この眼で見るとまでは、と心のどこかでそう思っていた。

不意に、ユーリが手を瞼から離し、眼を瞑る。そして開いた時には

瞳孔が縦に大きく割れた、金色の眼。

竜族。彼らは皆、金色の眼をしている。そしてまた、竜族の魔力はその眼に最も多く宿るといふ。生態系の頂点として、この大陸にて人々と同じように時を刻んできた種族。人前に現れる事はほとんどなく、その圧倒的な長命の元に、観察者として世界に存在しているという色が濃い。

エスクード王国は遙か昔、その建国に竜族が関わっていたという。そしてまた、エスクード最後の末裔にも、竜族が関わっていた。

「…軽く言うがな、ユーリ。その眼は人間の身体には行き過ぎたモノだ。いつか限界が訪れるぞ」  
「知ってる」

短く返すユーリ。その短い返答だけで、イシユメルとイズルデは理解した。彼は誰よりもそれを理解している、と。若しくは、既にその限界の前兆が出ているか。彼自身が言葉を発しないのは、それを言う必要がないと感じているからか。若しくは

「ところが、エスクード人であるユーリには魔術式を正確に編む力がほぼ無い。せつかく竜族の膨大な魔力があった所で、うまく魔術を発動させる事が出来ない」

イシユメルが説明を再び始める。

だから、とユーリが核心の言葉を紡いだ。両腕を覆い隠している長い袖をめくりながら、イゾルデに腕が見えるように。

「自ら編む事が出来ない魔術式を、俺は身体に直接刻み込んだ」

露わになるユーリの左右の手の甲から上腕部に掛けて、複雑な魔法陣と膨大な数のルーン文字が彫られていた。そして、エスクード王剣を出し入れする左掌にも、五亡星の魔法陣と、その中に刻まれたルーン文字。特に、手の甲から上腕部に掛けての魔術式はおぞましい程に複雑で、まるでそれが人間の腕である事を忘れてしまいうな程に、恐ろしかった。イゾルデでさえそれを見て一瞬言葉を失う。

「……《刻印式》というやつか」

「そうだ。俺は魔術式を編み込む事を刻印に任せ、『複数の刻印』を使い分ける事だけをひたすらに修練した。左右の掌に剣を出し入れる為の召喚系術式を、左右の手の甲から上腕部に掛けて同じ攻撃系術式を二つ。刻印を別個に認識し、使い分ける事が求められた」

「成る程。…所で、誰がユーリに刻印したんだ？」

「僕だよ。レザール戦争に差し掛かるに当たって、ユーリの希望を叶えるためにアルトナ族総出で術式開発が為された。それで、完成した術式を僕が刻んだ。魔術式を編む事に関しては一応僕が一番巧かったからね」

イゾルデはユーリの腕に刻まれた刻印をまじまじと見つめ、もう

一度問う。

「…お前が何歳の時だ？」

「十五歳の時だったかな」

「…天才という奴か…」

しみじみと呟くイゾルデ。イシユメルが苦笑いしながら訂正する。

「いやいや、別の誰かでも出来たかもしれないけど、僕には僕なりの想いがあつたからね。　　そういえば、ユーリ、両腕の刻印式は使ってる？」

「戦争中は結構使つたな。その後は村でマズール騎士団と剣を交えた時に一度だけ。右眼の魔力を総動員したところで多用は出来ないから、ここぞという時に使ってる。第一、普通に『殺す』だけなら剣の方が早い」

「物騒な事を言うなあ。まあ、その所は今置いておく事にしよう。　　その刻印式は確かに燃費の悪さがピカイチだからね。効

力は絶大だけど…発動させる事が出来るのはユーリくらいかな」

「ほう、私でも無理か？」

「うん。術式を開発したアルトナ族の誰もが発動を断念した程の魔力要求だから。僕の上から二番目の兄上が今現在アルトナ族の中で最も魔力を多く持っているんだけど、その兄上でも無理だった。それに、仮に術式の効力が得られても、肉体性能が並はずれているエスクード人だからこそ巧く活用する事が出来る類の術だから。いわばエスクード人でありながら魔力を持つユーリの為の魔術ってところかな」

「いずれ見てみたいものだ」

「見えるさ、嫌でもな」

ユーリが自虐的な笑みを浮かべる。いずれ起こる出来事を予見し

ているかのような、達観しているような表情だった。それより、と話題を別の方面に移しながら、ユーリが言う。

「俺の能力よりもイシユメルの方が『えげつない』と俺は思うよ」

「言い方悪くない？ もっと別の言い方があると思うんだけど」

「俺は端的に示したまでだ」

「フフ、頼もしい限りだな。私が出る幕がないのはそれはそれで少しだけ残念だが、逆に私が出なければならぬ状況よりは幾分マシだ」

「ははっ、違くない。言葉で示すよりも、実際に見た方が早いな。その機会が永遠に訪れない事を祈りたいものだが、生憎、誰に祈ればいいのかも解らない」

それもそうか、とイシユメル、イズルデ共に小さな笑みを見せて、一旦その手の会話を遠ざけた。

いずれ話し合わなければならぬ事柄である事に変わりはないが、せめて今は仮初の平穏を。

そう三人は心の中に思い浮かべ、エスカリエの中央通りを闊歩した。



9話 「右眼」(後書き)

《刻印式》 用語辞典【八行】

## 10話 「視線」

「さて、大体の物は買ったから、俺は少し剣を買いに行こうかな。先に帰っててもいいぞ？」

バックパックを背負うユーリが言う。エスカリエの中央通りで買い集めた旅の備品を詰め込んでいるバックパックはそれなりに重く、十分な量を買った為、値もそれなりに張った。ユーリが懐から金貨を数枚取り出した事で、支払い自体は実の所スムーズに済んだのだが。

「ふむ、我流と言っていたが、何故二振りも剣を持つんだ？」

イズルデが不思議そうに訊ねた。いくらエスクード人の強靱な『腕』が在るといっても、両手で一振りの剣を持つ他の一刀流者と比べると、斬撃に力が入りづらいのは明確だった。その問いに対し、ユーリは端的に返す。

「両手に剣を持っていた方がたくさん殺せるから」

ユーリは片手で一人を両断する剣を振るう事が出来る。エスクード人なら大抵の者はそうだろうが、ユーリの放った理由の言葉はイズルデに単純に恐ろしさを抱かせた。時々見え隠れするユーリの思考回路。その境遇からなのか、彼の他者に対する殺害思考は無邪気で、鋭かった。

「確かに両手で一振りの剣を扱う方が力も入るし、敵の斬撃も受けやすい。ただ、攻撃範囲が限られる。片手で一振りずつ持った方が斬角は広がるし、俺はまともに敵の剣を受ける事をあまりしないか

ら受ける性能に関しては半ば無視してるな」

徹底された戦への順応。今でこそ、その片鱗の多くは見えてこない。危惧すべきは、彼が自らの危機を察知した時である。果たして戦の狂気がどれ程彼を変えてしまっているのか。

「ともかく、俺は少し露店を回ってくる。それじゃ」

ユーリはひらひらと手を振って一人で人ごみの中に消えて行く。

イシュメルとイゾルデはユーリに付いて行く事も無く、先に宿へ帰る事にした。

数時間後、ユーリが宿に帰ってくる。先に帰ったイシュメルとイゾルデはともかく、リリアーヌとアガサも食材関連の買い物を終え、既に寄宿していた。

ユーリは部屋へ戻るや否や、直ぐに荷物を整理し始め、言葉を紡ぐ。

「エスカリエ街門の方が少し騒がしくなってきた。そろそろ潮時だ。行こう、ヴェール皇国へ」

「駄賃は弾んでくれるんだろうね？」

「お前が勝手についてくるだけだろ。褒章も駄賃もナシだ」

イシュメルの冗談に笑いながら答えるユーリ。アガサとイゾルデも同じように笑う中、リリアーヌだけが少しだけ苦笑していた。ユーリがその様子に気づいて、微笑を浮かべて言葉を投げかける。

「行こう、リリアー」

差し伸べる手。

リリアー又は一瞬、その手を掴む事を拒んだ。胸中を駆け巡ったのは不安。私はユーリの邪魔にはならないだろうか、という不安。それでも、手を差し伸べ続けるユーリを見て、不安を振り切り、その手を掴む。

自分の想いに嘘は付けない。

邪魔になると不安になるなら、それを払拭する為の研鑽をつめば良い。心の端でそう思いながら。

「馬は何頭買うんだ？」

エスカリエの中央通りを五人で北へ進んでいると、アガサが不意にユーリに訊ねた。

ユーリはその言葉を受け、考える素振りを見せてから答える。

「四頭：かな。リリイは誰かの馬に相乗りすれば良い。アガサは一人で乗れるよな？」

「そりゃああたしは馬売りだったからな。当たり前だ」

「イゾルデは？」

「伊達に長くは生きておらんよ」

「僕も大丈夫」

イシユメルは訊ねられるより先に答える。

「ってことで、四頭だ。これで良い馬を選んでくれ」

ユーリはそう言うと懐から金貨を一枚出して、アガサに渡す。ア

ガサは眼を見開きながら震える手で金貨を受け取ると、しみじみとした様子で呟いた。生唾を飲む音が聞こえる。

「金貨なんか触れた事すらなかったが…容易く出してくれる物だな？」

「はは、国を再興するのに金はいくらあっても足りないからな」

確かに、と一度頷くアガサ。ユーリの言葉に現実感を持ってないでいたアガサも、金色に光る硬貨を手にしていくらか理解した。彼の言葉は紛れもない事実で、偽りすらないのだと。

馬屋はその特性上、大体は街の外側に位置する。ユーリ達は馬屋に到着すると、アガサに馬の選別を任せた。彼女はまず店主といくらか話をすると、馬本体を見る為、馬が繋がれている厩へと足を運ぶ。その厩には十数頭の馬が売りに出されていた。一頭一頭、じっくりと馬を観察するアガサ。ぶつぶつと一人で何かを言いながら、時には馬の筋肉に触れ、それを確かめるように。彼女自身は自分しか聞こえないように小さな声で呟いた。たつもりなのだろうが、感覚器が敏感なアルトナ族であるイシユメルとリリアー又は、確かに彼女の言葉を聞いていた。その内容は、在る一つの事実を二人に突きつける。

「お前、長い距離を走るのは好きか？」

一拍を置いて、

「はは、解った解った。ちゃんと連れて行ってやるから。あんまり興奮しないでくれよ」

続いて、

「なら、他にお前が優秀だと思っ奴を教えてくれ」

まるで彼女が馬と話しているかのような話しぶりだった。

イシユメルとリリアー又は、互いに顔を見合わせ、同時に小首を傾げる。先に行動を起こしたのはリリアー又だった。馬の額を撫でているアガサの隣に進み出て

「アガサ、もしかして馬と喋ってる？」

「え！？ いや私は何も」

「…喋ってるでしょ？」

「…」

ジト目でアガサを凝視するリリアー又。

それに根負けしたかのように、アガサが両腕を投げ出して観念したかのように答えた。

「ああ…喋ってた。 気持ち悪いだろう？」

「そんな事無い！すごいよアガサ！」

アガサが予想した反応とは、まるで裏腹だった。

「アガサにそんな力があるとは知らなかったなあ」

イシユメルがアガサの隣に歩を進め、満面の笑みで言う。

「ん？ なんだなんだ？」

ユーリとイズルデもその様子に気づいて近づいて来る。リリアー又がユーリ達に向けて言葉を紡いだ。

「アガサ、馬と喋れるんだって！」

アガサは恥ずかしそうに頬を朱に染める。皆の視線を一身に集め、その事に気付いて顔を俯けながら、ゆっくりと声を上げた。

「あたし…『ラ・シーク』なんだ。人に知られると気味悪がられるから隠してたんだけど…」

「『完全なる馬との交信者』か。聞いた事が在る。古代遊牧民の血族に稀に生まれるという特異な能力者の話を　まさかこんな身近にそんな希少な能力を持つ者がいるとは思わなんだが」

イゾルデでさえ、眼を丸めて驚いている。

すると、不意にユーリが大声を上げて笑い始めた。

「あつはつは、不思議な奴らが集まったもんだな」

一瞬アガサがびくりと身体を微動させる。そこへ、ユーリが彼女の肩に手を掛けると、心底嬉しそうに言葉を紡いでいた。

「その力は自慢すべき物だよ、アガサ。少なくとも俺達の中にアガサを気味悪がる奴なんかいない。よくよく考えても見ろって。亡国の亡霊にアルトナ族の二人、それに魔女まで。随分奇特な面々が集まったものだと思わないか？」

アガサはユーリの言葉に従って、共にいる皆を順々に見て行く。

「まあ、確かに…」

ユーリは理解していた。彼女が特異な力を持つが故に、様々な困

難に出会ってきただろうという事を。だからこそ、言い聞かせる。

「いつもみたいに堂々としていれば良いんだ、アガサ。周りの眼を気にするなどは言わない。でも、俺達の前では気にしなくて良い。誰もその能力を気味悪がったりしないから」

アガサは皆の眼を見る。

誰も、嫌な眼をしてはいなかった。化物を見るかのような、嫌な目つきを。存在を排他しようとする目つきに、何度苛まれてきたか。アガサは再び俯く。

よくよく考えれば、彼の言う通りだった。亡国王家の末裔、アルトナ族、魔女。このマズール王国に至っては、自分以上に忌避される存在。きつと皆、心の何処かに闇を持っている。それでも、自分を快く迎えてくれる。あるいは、『同じ』だからか

「…ありがとう」

「泣いてる？ 泣いてるのアガサ？ フッフ、この姿を目に焼き付けておこう…あんまり見れないからね！」

「黙れ馬鹿！」

「兄様…空気読もう？」

リリアーヌがイシユメルの脛を蹴りつける。痛み悶えるイシユメル。ユーリとイゾルデが笑った。アガサも、それに釣られて笑った。肩に掛かるユーリの手に暖かさを感じながら

馬四頭。アガサが『会話』をしながら選んだ馬達。彼女が「優秀だ」と太鼓判を押すだけあって、それぞれの馬の肉体は引き締まった筋肉に隆起している。鹿毛の馬が二頭、青鹿毛の馬が一頭。そし



て月毛の馬が一頭という内訳である。アガサ曰く、鹿毛の二頭は兄妹馬で、どちらも長距離疾走に向いている。青鹿毛の馬は気性が荒いが、疾走能力全般に優れ、その気性故に他の馬と並ぶと一際力を出す。月毛の馬は大人しい気性で、最も短距離疾走速度に優れているという。とはいえ、長距離能力も通常馬以上には在るらしい。

「青鹿毛の馬はあたしが乗るよ。気性が荒い分、手懐けるのも難しいけど、あたしなら『会話』出来るから。ユーリ達はどの馬に乗る？」

「ユーリは月毛の馬に乗れば？ いざという時、ユーリが真っ先に動けた方が良く。此れから先、エスクード王である君が居なければ物事が進展しない、ということもあるからね」

「それもそうだな、なら月毛の馬に乗ろう」  
「あと、リリアーヌもね」

鹿毛の兄馬にはイシュメルが、妹馬にはイゾルデが。そしてユーリと同じ月毛の馬にはリリアーヌ。そうして旅の準備が整う。

後は目の前に佇むエスカリエの北街門を抜け、北へ進み続けるだけ

ユーリはアガサから月毛の馬の手綱を受け取り、軽い身のこなしで月毛の馬に跨る。跨った状態から傍らに立つリリアーヌに手を差し伸べ、彼女が手を掴んだ事を確認すると一気に力を入れて持ち上げる。彼女の軽さを腕に感じながら、リリアーヌを自分の前に座らせた。

「…リリイ、髪が長すぎるな…」

身長差はあるものの、リリアーヌの髪は長く、多量で、風に戦そよぐと時折ユーリの顔に当たった。

そこへイゾルデが馬を動かして駆け寄り、紐を渡す。

「いつも結んで貰ってるんだ、今度はお前が結んでやればいいだろう？」

ユーリはイズルデから紐を受け取り、後ろからリリアーヌの髪を纏めて紐で結ぶ。

「よし、じゃあ、行くか」

四頭の馬が地面を踏み鳴らし、進む。

ユーリ達が街門を潜ると、そこには広大な平原が広がっていた。エスカリエの隣の平原の先に、いくつかマズール領の街が点在しているが、その間に広がっているのは平原だった。ユーリ達は点々としている街々を避けながら、北へ向かう

正午過ぎに出発した四人は、さしたる障害にも出会わず、無事に夜を迎えた。マズールが商業大国であるだけに、キールとエスカリエからそう遠くない道では大勢の行商人とすれ違った。夜まで馬を走らせれば、それなりの距離は進めるもので、野宿の準備をする頃には周りに人影はいなくなっていた。

大国マズールの領地は広大で、人の住まない地域も多く残っている。ユーリ達が野宿場所として指定したのは平原を抜けた先にある森だった。窪地になっているその森に人気は無く、また、野生の獣も見当たらなかった。丁度良いオアシスだ、とユーリが呟きながら馬から降り、バツクパツクから荷を取りだしていく。

その間、アガサが馬を綱で地面に刺した杭に繋いだ。とはいえ、アガサが勝手に何処かへ行かないよう重々馬達に言い聞かせていたので、逃げ出す素振りもなかった。

「うまい！うまいぞ！リリアーヌ！」  
「でしょ？ いったもユーリの食事は私がつつてたんだよ。ユーリ  
って家事全般が駄目駄目だからさ…可哀想な程に…」

アガサの褒め言葉に、のけ反るほどに胸を張ってリリアーヌが答  
えていた。

夕飯時。リリアーヌがエスカリエで購入してきた食材の数々を簡  
易的な調理道具で調理し、披露している最中だった。アガサが頼に  
次々と料理を詰め込んでいく。ユーリはさも当たり前のようにリリア  
ーヌの料理の数々を同じように頼張る。

イシュメルがリリアーヌの言葉を受けて、

「リリアーヌに苦勞をかけてたみたいだね？」

と苦笑しながらユーリに言うが、ユーリはその言葉を適当に受け  
流していた。

大陸全域に群生するシャムの木から採れる実を甘煮にした物、羊  
肉と、肥沃な土を含む洞窟の天井に逆さに生えると言う天根草リパス・ハーブの合  
わせ焼き、形の良い鶏の卵焼きの中にはマズール領王都キールの特  
産品であるキールチーズが入っていて、とろけるような味わいだっ  
た。

食事の後は、適当に皆で話をしながら夜が耽るのを待つ。ユーリ  
とイシュメルが背負っているバックパックには、小さな簡易テント  
も入っていて、その間にユーリとイシュメルは二人でそれを組み立  
てていた。

「大人しく男性陣と女性陣で別れようか」

「私はユーリと一緒にいいぞ？ いや、一緒に良い」

テントを組み立て終わると、イシュメルがそう言ったが、真つ先にイゾルデがそれを否定する。ちらちらとユーリの方を見つつ、上ずった声色で投げ掛けた言葉を、今度はイシュメルが否定した。

「イゾルデだけは絶対ユーリと一緒にしちゃいけない気がする」

「何を言うイシュメル。私が最もユーリと一緒に寝るべきだと思っただが。お前も私と代われればアガサと一緒にだぞ？」

「……確かに一理ある！」

魅惑的な言葉にイシュメルが洗脳され始めた所で、リリアーナが額に青筋を浮かべながら、裏のある満面の笑みでイシュメルに言う。

「冗談だよな？」

「…うん、悪かったよ…リリアーナ」

全く笑っていないリリアーナの眼を見て、大人しく観念するイシュメルであった。イゾルデも渋々それに従い、女性陣用のテントに入っていく。

「僕達もそろそろ寝ようか？」

「そうだな」

ユーリが頷き、自分たちのテントに入って行った。

それから数時間。イシュメルは、隣で仰向けに寝ているユーリが

就寝していない事を知っていた。

「寝れないの？ 何処でも寝れるのが特技みたいだったユーリが？」

「そういうお前も起きてるじゃないか、イシユメル」

「僕は良いんだよ」

何が良いんだよ、と適当につっこんで置く。それから大して会話をする訳でもなく、ただ夜が更けて行くのを待った。不意にイシユメルが寝返りを打って、ユーリの顔を横から見ると、

彼の眼は、何処か遠くを見ているようだった。

「何を探しているんだか……」

「はは、別に明確な何かを探してる訳じゃないよ。あえて言うなら探し物を探してる、ってとこだな」

「言葉遊びかい？」

イシユメルはユーリの眼を見る。未だにその眼は遠くを見ていた。彼がそのまま何処かへ行ってしまうような儚さを湛える眼。その眼を見ていると、不意にイシユメルの心を恐怖が覆い尽くした。ハッとして反射的にユーリの腕を掴んだ。

「君は何処にいるんだい？」

紡いだ言葉に対する返答は、悲しい言葉だった。

「解らない。俺も解らないよ、イシユメル」

儚い笑みに眼を細め、少しだけ自虐的な声色で答えたユーリ。

「頭の隅の方で、いつも戦の事を考えている気がする。どんなに穏

やかな気持ちになっても、楽しい気持ちになっても、結局何処かで戦う事を考えてるんだ。忘れられない。忘れる必要が無いと、自分で思ってるからかもな。とんだ狂人がいたもんだ」

「……」

イシュメルは言葉を紡げない。軽々しく答えるべきではないし、それ以前に、どんな言葉を掛けるべきか解らない。同情、叱咤、どちらも自分の口からは出なかった。自分が発してしまえば、それは薄っぺらな意味しか持たなくなる。同じ境遇に居る者でなければ、共感の意味を持たない。

「悪い、お前を困らせるつもりはなかった」

イシュメルの胸中を悟ったように、ユーリが言った。

「寝よう、明日は一日中馬に揺られる訳だからな。御休み、イシュメル」

「…御休み」

自分が恨めしい。こんな自分が、果たして彼を支えていけるのか。不安を払拭するように、イシュメルは目を閉じ、意識を閉ざした。

それから三日は疾走続きだった。

ようやく景色が大きく変わる。《ジュラルル森林》。ミロワール運河の両側面に凄まじい大きさで群生する森林群が眼に入った。この森を抜ければミロワール運河である。しかし、このジュラルル森林こそ、ある意味最も難題な面だった。

行商人の通行路であるジュラル森林には、『賊』が多く住みついている。深い森は絶好の襲撃地帯で、何度かマズール騎士団が賊の討伐に赴いた事が在るが、賊の膨大な数も相まって、完全に散らすという事は敵わないでいた。故に、ジュラル森林を通る行商達は傭兵を雇って護衛の任に着かせたり、はたまた行商人自身が『武装商人』として戦闘力を兼ね備えていたり。

本来なら態々危険がある地域に足を踏み入れたくはないが、ヴェール皇国へ行くにはミロワール運河を渡るしかない。行商と違って大きな荷物を持っていない為、幾分か襲撃の可能性は減るだろうが、その危機と隣り合わせである事に違いは無かった。

「夜になる前に一気にジュラル森林を抜きたいところだな」

「全くだね。夜は彼らの動きが活発になるし……」

森林の前で馬を止める。時分は昼。

「際どいな……かといって此処で留まれば無駄に一日を消費する破目になる。森を抜けてしまえばマズール騎士団の追跡隊は捲けるだろうし、このまま行くのが吉か」

「そうだな、私もその方が良いと思う。賊如き、今更私たちの手を煩わせはしないだろうよ。でかい組織が出てこなければ、だがな」

イゾルデが頷きながら言った。一番の危惧する所は『組織的な賊』に出会う事だった。統制された賊軍はまばらにうるつく賊よりも圧倒的に面倒な存在だった。マズール騎士団が賊を壊滅させられなかった理由が、そこにもある。ある意味、賊の聖地的な側面を持つジュラル森林。数多くの賊が集まる故、そこで集団が生まれるのは当然の事。運が悪ければ出会う事も在り得る。

「アガサ、馬達の疲労の方はどうだ？」

「まだ大丈夫。連日の疾走で多少の疲れは溜まっているが、こいつらは疲労に強い方だし、あと数日なら連続疾走もこなせると思う。勿論、途中で多少の休息は必須だけど…」

「解った、もし賊に出会ったら、アガサは馬達を逃げないように止めてくれ」

「解った…」

アガサに緊張が走る。馬達を止める事は可能だろう。だが、自身も自身が賊と対峙した時の事を考えると、不安が募る。奴隷時代に出会った魔女に、ラ・シークで在る事を考慮して最低限の馬上槍術を習った事があるが、それでも実戦は経験した事が無い。

「気負わなくて良いよ。遭遇する事自体、まだ確定した事項じゃないし、イシュメルとイゾルデがいる。滅多な事で危機には陥らないさ」

微笑を浮かべて、ユーリが言った。その微笑に少しだけ救われながら、遂にアガサも決心する。

「リリアー又は…」

「私は大丈夫だよ、慣れてるから」

アガサが言おうとして、リリアー又のいつもと変わらない微笑に驚く。イゾルデから聞いたユーリ達の話の思い出して、確信に至った。この程度なら、確かに慣れているのかもしれない。それでも、自分の命を他人に預けている状態は恐ろしい筈だ。いや、リリアー又はユーリになれば全く怖気づかずに命を預けるかもしれない。これまでそうしてきたのだから

「心配するな。俺が先頭を走る。俺の後ろにアガサ、その裏にイゾ



ルデ、最後尾は感覚器がよく効くイシュメルに任せる」

ユーリがリアーナの頭を一度撫で、前方に広がる鬱蒼とした森に視線を向ける。

「行くう」

そしてユーリ達はジユラール森林へ遂に足を踏み入れた。

馬達は器用に踏み鳴らされた地面を選んで疾駆する。アガサに予めそう教えられていたのだろう。馬車を引く行商人や、それに付随する鎧甲冑の傭兵等、多くは無いものの、時折すれ違った。ジユラール森林内を闊歩するのが自分達だけで無い事を知り、アガサの肩の荷は少し降りた気がした。

森林の景色は全く変わらない。鬱蒼として、暗鬱で、上空を遮る高い木々の隙間から時折一筋の光が舞い降りている。見た事もないような植物や、気色の悪い虫などを視界の端に捉えながら、ユーリ達は進み続ける。そんな中、意外な程に『獣』の類には出会わなかった。それには理由があつたが、アガサは気付かない。

イシュメルは時折先頭を疾駆するユーリの背を見て、彼の背から金色に輝く濃度の濃い『魔力』が放出されているのを確認していた。イゾルデも同様に、その様子に気づいていた。すると、イゾルデがイシュメルの横に馬を付け、口を開く。

「 竜の眼の所為か」

「 たぶん。ユーリの右眼は『白竜』の眼だから…」

「 ……よりによって白竜とは………」

イゾルデは古い知識を頭の中から引きだす。

白竜。竜族はその体色によって部族が分かれる。『白色のシオン族』、『黒色のガーラ族』、『青色のニール族』、『緑色のシース族』、その他にも様々な色の竜族が存在すると言うが、公に下界にて確認されたのはニール族とシース族である。何故シオン族とガーラ族の体色と名前が判明しているかと言えば、それはニール族とシース族の証言に寄るところが大きい。ニール族は大陸中央の一国家に姿を表し、その国家元首と会話をした事がある。シース族はそのうちの一頭が、現在向かっている麗国ヴェールに三百年程前に姿を表し、当時のヴェール皇帝と個人的な戦火を交えたという。共に、その二頭から竜族の世界についての話を聞き、後世の為に記録に残した。

ニール族は言った。『白竜は竜族の頂点である』と。

シース族は言った。『白竜は竜族の原点である』と。

下界の者達には想像もつかない話だが、彼らの中にも争いというものがあるらしい。遙か昔に、白竜族と黒竜族の争いがあった、と『原点にして頂点』と謳われる白竜族に反旗を翻したのは、最も白竜に接敵する力を持つ黒竜族。それ以上の情報は下界にはない。

イゾルデは白竜が下界と関わりがあったことに驚く半面、その眼を受け継いでいるというユーリの境遇を心配する。ただでさえ人の器に収まりきらない竜族の眼を、よりによって白竜の眼をその身に宿しながら、何故彼の身体は壊れないのか。もしかしたら、壊れ始めているのかもしれない。

ともあれ、現状獣が近寄ってこないのは、生態系頂点の『威圧』による物だと、イシユメルもイゾルデも認識していた。獣は人型種よりも圧倒的に『本能』が利く。弱肉強食の世界で、異種族と交戦することが多い獣たちは、本能的に自分たちが敵わない相手に気付く。ユーリがわざわざ竜の眼を開眼させているのは、獣たちを遠ざ

ける為。

その事を確信させるように、アガサが後ろを振り向き、イシュメルとイゾルデに言葉を述べた。

「馬達が少し怯えてるんだが…獣が近くにいてもいいかもしれない」

イシュメルは微笑を浮かべて一度頷いて見せた。

「大丈夫だよ、獣に関しては」

「そうなのか？」

「うん、たぶん怯えてるのはユーリの所為だから」

アガサは小首を傾げながら、まあいいか、と再び前方を向き直した。

「加減が利かないのが難点だな」

「いや、加減してるよ、あれでも」

イゾルデの言葉をイシュメルが否定した。今度はイゾルデが首を傾げる。アガサの証言通り、馬達が怯えているのだ。自分たちの乗る馬まで怯えさせるのは、ユーリの本意ではないと思つての言葉だったか

「『威圧』に加減が無かつたら、今頃、馬は元より僕達まで全力で逃げてるだろうから。竜族の威圧はこんな温い物じゃない。僕はあの眼の『本体』と会つた事があるから解る。ただそこに『居る』だけで本能が利きづらい人型種でさえ尻尾を巻いて逃げる。もしくは気絶する。白竜に『威圧する眼光』を向けられても、その場に留まつて、その上あるうことか視線を交える事が出来たのは、ユーリの父君とユーリだけ。ユーリの父君に至つては、白竜に飛びかかった

程だったけど　あの時は割と本気でユーリの父君が同じ人型種である事を疑ったよ…」

「あつはつは、流石と言うか、やっぱり底抜けの馬鹿だなシャルは底抜けに『鈍い』奴だったしな！」

当時の事を思い出してわざとらしく身震いするイシュメル。対するイゾルデは、その話を聞いて大笑いした。手綱を離し、腹を抱えるイゾルデの目元には、少しだけ雫が浮かんでいた。それが笑い過ぎによるものなのか、別の因子によるもののかは判断出来なかったが

「　　っ」

だが、イシュメルのわざとらしい身震いも、イゾルデの大笑いも、一瞬にして止まった。二人は同時にある事に気付く。

「感じたか、イシュメル」

「イゾルデも？」

「私は『こういう視線』をよく知っているからな」

二人が感じたのは、背中に突き刺さった『敵意の視線』だった。ねっとり絡みつくような、まるで品定めするかのような。しかも、その様子を全く隠そうとしない。

「下品な視線だな」

「同感だね」

最後尾のイシュメルとイゾルデに纏わりついていた視線は前方に流れていく。何となく、イシュメルはその変化に気付いて、同時に、酷く『焦燥した』。

「あ  
」

呆けるような短い声。勘付く。この敵意の視線にユーリが気付いた時の行動サイン図が、予想出来てしまった。苛烈な戦場に長い間身を置いていたユーリが、敵意の視線に気づかない訳が無い。そして

案の定、ユーリが行動を起こしていた。

ユーリは背中に敵意の視線を感じた瞬間、馬を止め、飛び下りていた。全く感情というものを含まない冷たい声色で、静かに告げる。

「リリイを任せる  
」

「駄目だ！ 一人で行くな！」

ユーリは『敵意』と『殺意』に異常に敏感だった。

イシュメルは叫ぶ。危惧した事が、彼の眼前で起ころうとしていた。イシュメルの声はユーリに届かない。イシュメルが馬を止め、ユーリの元に駆け寄ろうとした時には、ユーリは生い茂ったジユラール森林の繁みの中へ姿を消していた。

ユーリの持つ『戦の狂気』が顕現した瞬間だった

10話 「視線」(後書き)

《ラ・シーク》 用語辞典【ラ行】

《竜族》 用語辞典【ラ行】

《白竜》 用語辞典【八行】

## 11話 「狂気」

ユーリがその場を離れて程なく、馬達が大きく嘶いた。

「行くな！」

勝手に走りだそうとする馬達。一刻も早くこの場から逃げようという意志の表れ。

アガサが強い声で馬達を制止させる。それでも、馬達はいつまた逃げようとするか解らない状態だった。

アガサの乗っていた気性の強い青鹿毛の馬でさえ、何かに怯えている。

そしてまた、イシユメルとイゾルデとアガサは背筋に走った悪寒に気付いた。

「ユーリが本気になった」

イシユメルは呟いた。

「なんだ…これ…」

アガサの足が震える。自分の背後に何か恐ろしい物が居るかのよ  
うな感覚。今すぐ頭を抱えてその場に跪きたい。何も見たくない。

何も聞きたくない。振り返れない。ひたすらに、心が震える。

アガサには強すぎる刺激だった。

イシユメルとイゾルデでさえ、その場から動こうとしない。

ただ、リリアーヌだけが馬から降りて平然と立ち、ユーリが駆け抜けて行った方向を見ていた。

「止めなきや」

紡いだ言葉は意味深で

リリアー又はユーリの後を追う様に繁みに入って行く。

「リリアー又！」

イシユメルは我に返ってリリアー又を止めるが、彼女はユーリと同じように、その場から消えて行った。

「僕が追う！イゾルデはアガサと一緒にいてくれ！」

「解った！」

返答を聞き、イシユメルは駆けだした。

纏わりついていた視線は消えていて、恐らく『敵意』を醸し出していた者たちはユーリに注視し始めたのだろうと確信する。

叫んだものの、ユーリは単体ならば何事もなく帰ってくるだろう。そう思った。だが、リリアー又をその場に向かわせる訳には行かない

ユーリは金色の右眼に強い輝きを灯しながら、繁みの中を駆け巡る。背中に纏わりついた敵意の主を探しだす為。たった数瞬、背中に纏わりついた視線から、大体の居場所を判別し、神速にて猛突して行く。

敵意と殺意は慣れ親しんだ物。故に、それら向けられた時に起こす行動は自動的に決まっていた。何度も何度も向けられた圧力。敵対者の波動。殺意に対しては殺意を。敵意に対しては敵意を。ただ、ユーリの『それ』は向けられた威圧よりも鋭く、強大で恐ろし



い物だった。

脳内を占める思考は、殺意に染まり  
殺される前に殺す。

自分に対する殺意と、リリアーヌに対する殺意に、ユーリは敏感  
だった。

左掌からエスクード王剣を抜き、王剣を持ちながら、右掌に仕舞  
っていた別の剣を抜き去る。エスカリエで調達した剣。掌の召喚術  
式内に留めておけるのは剣一本ずつ。

エスクード人の腕力で剣を振るうと、時々余りの衝撃に刀身が粉  
砕されてしまう事があった。故に、値は張ったが丈夫な剣をエスカ  
リエで購入していた。刀身の長さは王剣と同じくらいで、一メートル  
弱。元々王剣が一刀流用。つまり両手持ち用に作られている  
為、王剣の方は柄が長いが、その剣は片手持ち用に柄が短く、比較  
すると、その剣は片手用の割に刀身が長かった。両刃の刀身は細身  
かといって刺突剣程ではない。重量は恐らく二、三キルグラム程。  
ユーリにとっては軽い物だった。

ユーリはその剣と王剣を携え、遂に茂みから抜け出た。

開ける視界。木々の少ない森林内の丘地だった。高みから森林を  
通る者たちを物色していたのだろう。

ユーリの眼の前には数人の賊と思しき者達。ユーリの襲来を予期  
していたかのように、皆が皆短剣ダガーを抜き去って身構えている。顔の  
下半分を覆う布を付けていて、表情は窺えない。盗品と思しきちぐ  
はぐな軽量鎧を身に着けた筋骨隆々の大男が一人、露出度の高い衣  
装に二本のダガーを構えている細身の女が一人、猫背の真つ黒な暗  
殺者風の衣装を着た男が一人。計三人。だが、ユーリの知覚器官は  
もう一つの気配を感じ取っていた。近場に聳え立っている太く高い  
樹の上にもう一人。

「くそつ！ 勘の良い奴め！」

ユーリが其々を観察している間に、大男が悪態をついた。

「大層な荷は積んでねえが奴隷商に高く売り付けられそうな娘共が居たから、つて狙つてみりゃあ、こいつあとんだ外れだよ。お前、男なのか」

どうやら賊たちはユーリを女だと思つていたらしく、それに対して悪態をついていた様だった。あるいは、顔だけならばそう思う者も居るかもしれない。中性的な美貌を持つ事に変わりはなく、また、遠目からではユーリの身体は細身に見える。近くでよくよく骨格や纏う筋肉群を見れば、男であると解る筈だったが、遠目で、それも馬に乗っている状態では見づらい。エスクード人の特性として、たとえ腕の太さが並であっても、中身の筋繊維の純度、強度はまるで別の物だが。

「まさかあの小娘も男だつて言うんじゃねえだろうなあ？ ええ、おい」

ユーリは答えない。大男の方すら見ていなかった。姿の見えないもう一人の気配を探る様に、樹の上に視線を向けている。

「まあいい、どっちにしろ、その顔なら高く売れるだろ。男色家のお偉いさん方に綺麗なまま届けてやるよ」

そこでようやくユーリが大男に顔を向ける。口元は不気味な笑みに歪んでいて 大男はそれまでの間に、ユーリの『視線』を向けられなくて『幸運』だったかもしれない。

「あんまり身体に傷を付けるなよ、値段が下がる」

大男が、軽装の女と猫背の男にそう告げた時

ユーリが大男の眼前に一瞬で接敵していた。金色の右眼の縦に割れた瞳孔と、『同様に瞳孔が縦に割れた真紅の左眼』が大男の眼を射抜いていた。まるで右眼に同調しているかのような瞳孔の変化。

「なんだこの眼」

漸く気付き、怯え、それすらも虚しく

そして、凄まじい速力で振り抜かれた王剣が、大男の首を割断した。

「！？」

驚愕に歪む大男の顔だけが、遠くに鈍い音を立てて落下する。

軽装の女と猫背の男は即座に動けない。それでも、仲間が容易く殺されたという事は理解できて、ようやく短剣を構えてユーリに突貫していった。

首から大量の血を噴き出しながら倒れ込む大男の身体が地についた瞬間、再びユーリが動きを開始する。猫背の男に向かって同様に突っ込んでいく。

猫背の男は一気に縮まった間合いに対応しきれず、先手をユーリに取られる。左手の剣を外側から内側へ、横薙ぎに振る。支点となつたユーリの左足が土の地面を大きく抉り、さらに腰の回転を加え、剣は勢いを増す。キリキリと、風を斬る不気味な音を放ちながら、前傾突貫体勢を取っていた猫背の男の顔の横へ迫る剣。猫背の男はなんとか片手に持つ短剣をユーリの剣の斬撃軌道線に割り込ませ、受け止めに掛かるが、手遅れだった。

ユーリの剣は猫背の男が構えた短剣を軽々と粉碎し、全く勢いを

失わないまま猫背の男の頬にめり込む。そして男の顔が上下に割断されて

ユーリの後方から迫っていた軽装の女は、その様子をまざまざと見せつけられた。宙を飛ぶ男の顔の上半分に着いている眼が、女を見ていた。

単純な恐怖。

剣を交えずして、戦意を刈り取られた。

縦に割れた瞳孔が異様に恐ろしくなる。興奮状態だったからなのか、どちらにせよ、何故今まで気付かなかったのだろうかと、自分を恨んだ。

制動を掛けて、「逃げろ」と叫ぶ本能のままに、方向転換。直ぐにユーリから離れるように走り去ろうとする。

だが 金と真紅の双眸が、彼女の背を見ていた。ぐるりと首を回転させ、逃げる女を見るユーリ。彼女に戦意が無い事を知っていながら、彼は止まらなかった。

敵対者は殲滅する。逃がせば、また狙ってくるかもしれない。逃がすな。

狂気の理性が囁く。

殺せ、殺せ、殺せ、と。

ユーリの速力は女の逃げ足を遙かに上回り、容易く彼女に背に追いつく。

軽装の女は振り向けない。しかし、悟っていた。振り向けば、そこにあの恐ろしい双眼が迫っていると。諦観が過る。

ユーリが王剣を振り上げ、真上から、女の脳天に狙いを定めて振り下ろした。

しかし、剣は思わぬ障害に邪魔される。

王剣を振り下ろした瞬間、女の身体を覆う様に、女の頭から爪先までを覆う『魔法陣』が広がっていた。王剣は魔法陣に触れると、まるで金属を斬りつけたかのように甲高い金属音を鳴らして弾かれる。

「物理障壁……」

「た、助かった……?」

理性が答えを導き出す。そして狂気の理性は別の敵対者を知らせる。先程樹の上を感じたもう一人の気配。ユーリはもう一度剣を女に向かつて斬りつけるが、魔法陣が邪魔をしてまるで剣が通らない。軽装の女は必死の思いで振り向き、ユーリと、その間に展開された魔術による『物理障壁』を見て安堵の声を上げる。

樹の上から黒いローブとそれに付随するフードを目深に被った男が姿を表し、叫んでいた。

「今の内に早く逃げろ!」

「で、でも」

自分の身の周りに展開された物理障壁によって、多少恐怖を払拭しつつ、男に言葉を返す女。逃げたい。でも、逃げれば彼が一人残される。この『化物』と一緒に

「良いから! 後で追いつく!」

黒ローブの男は、それでも叫んでいた。遂に女は決心を固め、一度頷いて

「あ、ありがとう!」

軽装の女は目元の涙を拭って再び足に力を込め、走り始める。黒ローブの男はその様子を見て少し安堵したように息を吐き、フードを捲りながらユーリに強い視線を向けた。

だが、男がユーリに視線を向けた時には、ユーリは次の行動に移っていた。いつの間にか両手の剣を地面に放り投げていて、代わりに、自分の右腕の手首付近を左手で掴み、力を込めている。淡々と、冷たく放つ言葉。右腕全体に刻まれた刻印魔術式が不意に輝いた。

「右腕刻印術式      《神威》」

青白く輝く電光。雷光。雷電。白雷。

バチバチと、不規則に鳴り響く雷鳴。

雷電を纏う右手を携え、ユーリは背を向けて去る軽装の女を目がけて神速で走りだす。

そしてまた、女は背部に『眼』を感じた。

「え？」

振り向く。映る。銀色の死神の顔。全く表情が無い、冷たい顔。

軽装の女の周りには、未だに物理障壁が展開されている。物理障壁を展開した魔術師の男は、ユーリの行動を無駄な足掻きだと判断した。女も、ユーリが繰り出そうとしているのが右手による物理的な『突き』であると判断すると、同じように安堵する。

が

ユーリが繰り出した雷光を纏う右手の刺突は、展開されている物理障壁を軽々と貫いた。一瞬。女が眼を見開くと同時に、その真っ白な雷を纏う突きは女の左胸を貫いた。紙を剣で突き刺すように、その肉体をまるで物ともせず、ただ、胸部を通過する。

「あ  
」

神速で駆け抜け、急制動を掛けた事により、ユーリの身体に纏わりついていた風達が少し遅れてその場で揺らぐ。戦ぐ。

次いで、バチン、と女の身体が雷光に当てられて大きく脈打った。不自然な身体の波打ち。女の身体で、電光が嬉しそうに弾けていた。微かな風の流れを感じながら、女は口元から大量の少し黒く濁った静脈血を吐き出し、その左胸に鮮やかな赤の動脈血を滲ませ絶命した。肉の焼ける匂いと血の匂いが混じり、気色の悪い香りとなって辺りに散る。

ユーリが右手を女の左胸から引きぬくと同時に、その手で抉り出した女の心臓を握り潰した。真っ黒に焦げた『肉』が飛び散る。

赤と紅に染まる銀髪と、顔。  
返り血を纏う死神。

振り向き、魔術師の男を見る。「後はお前だけだ」と言っているかのような、研ぎ澄まされた殺意を孕んだ眼を向ける。

女の身体を貫いたにも関わらず、青白い雷光を纏った右手は一滴すら血を浴びていない。

ユーリは雷光が弾けている手を漂わせながら、今度はゆっくりと歩を進めていた。

それは理性が働いた為。戦に必要な理性だけは、狂気に取りこまれていない。理性は告げる。相手が魔術師である事を。迂闊に近づけば手痛い反撃を受ける可能性が在る事を。様子を見、隙を突き

狂気が叫ぶ 殺せ。

魔術師の男は女が殺されたのを見て、あらん限りに顔を歪めた。不思議と怒りが湧かなかつた。恐怖の色が強すぎて

何故物理障壁が突きで崩されたのか。考える。考える。しかし、答えは出ない。得体の知れない魔術。死神の右手に閃く白雷が原因だと解っているのに、死神の右腕で明滅する魔術式が膨大で、複雑過ぎて、全容が掴めない。ある程度の魔術式ならば、読めば理解出

来る。これでも魔術師の端くれだ。対魔術師の為に、それなりの知識は積んでいる。だが

「何なんだ……何なんだよ　お前はア！」

解らない。唯一つ、物理障壁が意味を為さない事だけは理解出来る。否、単純に効力が足りなかっただけかもしれない。そう思い、魔術師の男は先程の障壁よりも、更に『硬い』物理障壁の魔術式を脳裏に思い浮かべ、念じ、それに対応するだけの多量の魔力を込める。現世。

男の周りを、半球状に巨大な魔法陣が覆った。巨大な物理障壁。さらに、もう一度似たような魔術式を脳裏に弾き出し、念じ、現世させる。魔術障壁。巨大な物理障壁の内側に、同規模の魔術障壁を作り出す。二重障壁。

あの白雷が魔術系統の効力を持つならば、内側の魔術障壁で止まる筈。多大な魔力を支払って二重障壁を形成し、ユーリの行動を窺った。

対するユーリは、魔術師を覆う二重障壁を見ても、何の反応も示さなかった。

その障壁が、意味を為さない事を知っていたから

すると、白雷が弾ける右手は不意に雷光を失っていき、遂に右手から白雷が消え去る。

「効力切れか　」

魔術師が笑みを浮かべる。だが

「右腕刻印術式　　《神威》　」



続けて、

「左腕刻印術式                    《神威》」

刻印術式の同時使用。双腕に弾ける白雷。

「…なんて魔力量だ                    」

感嘆の声を上げる魔術師。

だが、魔術師は感嘆すると同時にユーリの際を見つけていた。

「あの魔術の効果時間は一分といった所か。一度の発動に多量の魔力を要する…あれを防ぎできればまだ機会はある」

三発現世させる事自体化物染みているが、と油断を招かぬように心を叱咤する。二重障壁に魔力の大部分を持って行かれたが、まだ少量の魔力は残っている。確信し、最後の魔力は攻撃用に取っておこうと思った。

魔術師が動かない事を知ったユーリは、相手が時間稼ぎをしに来ていると判断する。理性が弾き出す結果。敵対者の魔力量は薄い。攻める。

飛び出す。魔術師までの道のりを、じくざぐに凄まじい速度で踏破して行く。

そして                    まずは神速からの右手の突き。物理障壁が貫かれ、霧散する。さらに、制止状態から一瞬で最高速度まで加速すると、同じように左手で魔術障壁を貫く。『霧散する』。

「魔術障壁でも防げな                    」

つまり、あの白雷が自分の障壁を遥かに上回る威力と効力を持つ

ているという事。一体どれだけの魔力が込められているのか。果たしてそんな強力無比な魔術が人間に行使できる代物なのか。思考は巡り、答えは無く、彼自身の神速が相まり、攻撃を返す余裕さえ刈り取られて、彼の突きは無慈悲にも

雷光が弾け、黒ずみ、赤く染まり、力なく倒れる。

その様子を、両手に弾ける白雷を湛えながら、ただ静かに死神は見守っていた。生気の無い眼で、縦に割れた瞳孔で、金と真紅の瞳で。

止めなくちゃ。

リリアー又は一心不乱に繁みを駆け抜けていた。出っ張った枝が肌につきかかり、肌が破ける。所々血は出ているが、そんな事を気にしている暇はない。

リリアー又は知っていた。ユーリは『完全な臨戦態勢』に入ると『敵』を殲滅する為に邪魔な感情を全て排他する。

ユーリが初めてレザール戦争で人を殺した時の事を、未だに良く覚えている。

彼は泣いた。泣いても泣いても、それでもどうしようもなく、何かを発散させるように泣き続けた。本当ならば、その苦しみを知るユーリの父様や母様が支えてくれただろう。それでも、その時既に、ユーリの血族は皆死んでしまっていた。家族も親族も、民ですら。此処で別れたら、以降絶対に再会する事はないと、お互いに知っていた筈なのに、そうする事しか出来なくて

それから戦争はもっと激しくなって、結局、ユーリは自分と私を守る為に数えきれない程の人を殺した。ユーリ一人なら、きつと戦場から走って逃げる事が出来ただろう。でも、私はそれが出来なかった。運悪く足を負傷していた事も在る。いや、たとえ万全な状態だろうと、私の身体では戦場を走りきれない。だから、その殆どは、

動けない私を守るために。

泣き続けるユーリを、私は抱きとめる事しか出来なかった。その苦しみを私は知らない。言葉は軽くなる。

それから、ユーリは敵意や殺意に反応して拠点にしていた穴倉から出ていつては、傷を負って戻ってくるようになった。出て行くまでは、優しく、時々皮肉屋なユーリだったけれど、穴倉から出る頃には、きつとその表情は消えてしまっていたのだらうと思う。

穴倉から出て行く時、ユーリは決して振り返る事が無かった。

程なくして、私は初めてユーリの『あの表情』を見た。数日間穴倉に帰って来ないユーリを探しに、無謀ながら穴倉から出た事が在った。水と食料が無くなって、いつもそれを調達して来てくれるユーリが、数日間帰ってこない。備蓄は無くなり、飢えていた事もある。判断力が鈍くなっていた。

そして、穴倉の外で、直ぐ近くで、自分の顔を両手で覆っているユーリを見つけた。

死体、血、死体、血、瓦礫、死体、血、死体、肉、死体、肉、ユーリ、死体、肉、血。

ユーリは膝をついて、茫然としていた。ユーリの膝元に血溜まりが在った。雨が降った日に出来るような水溜まりと同じ。でも、その色は赤黒くて

ユーリは時々両手を解いてその血溜まりで自分の顔を見ていた。血溜まりに反射する自分の顔を。その度に「戻らない、戻らない」と呟いては、また自分の顔を両手で隠していた。

その光景が余りにも恐ろしくて、反面、愛おしくて

私は彼に声を掛けた。

肩が脈打つて、ユーリは恐る恐る両手の隙間から眼だけをこちらに向けていた。瞳孔が縦に割れた金色の眼だけが、指の隙間からこちらを見ていた。返り血で美しかった銀の髪を真っ赤に濡らし、きめ細やかだった肌を血で荒らして、カラムタ 軀と心に無数の傷を作り

「見ないで、見ないで」と茫然と言葉を紡ぐユーリを見て、私は確信していた。

ユーリが自分から『何か』を棄て去って、そうやって 自らを壊してしまった事を。

耐えられるように、考えなくて良いように、私以外を全て『敵』だと決めつけて、ただ『敵』を殺す為に。彼の顔には表情が無かった。空虚。虚無。あるいは、零。時々、口角が吊り上がって歪むけど、それは表情ではないように思えた。ただの肉体反応。口角が吊り上がったって、それは笑みではなく、ただ、笑みの形になるだけ。何の思いも、想いも、そこには含まれていない、ただの変化。ユーリ自身も、まるでその肉体反応に抗う様に、口角が吊り上がる度にそれを直ぐに戻していた。

「もう大丈夫だよ、私は大丈夫」と言い聞かせた。顔を覆い続けるユーリを引っ張って、穴倉に戻る。幾許かして、ユーリは『戻って行った』。

それから何度か、ユーリが『戻らなくなる』事が在ったけれど、その度に「大丈夫だから」と言い聞かせると、その度にユーリは『戻る』事が出来た。

そして、今、ユーリはきつと同じ状態になろうとしている。走り去る時の顔を見て、そう思った。

ユーリが『戻る』ように、私が言い聞かせなければならぬ。たぶん、これは私じゃなきゃ出来ない事。ユーリが更に『奥』に踏

み込んでしまうと、兄様やイゾルデやアガサは、『彼らが彼らである』と判断されなくなるかもしれない。

だから、誰より早くユーリの傍に行つて、戻さないと

リリアー又は走る。自分の傷など厭わずに、ただ、ユーリの為に。

イシユメルはこれから行き着くであろう場所の惨状を予想していた。自分が知らない場所。きっと、たぶん、『傷』になる光景を目の当たりにするのだらう。それでも、足は止めない。リリアーを追う。出来れば、彼女には見せたくない。

たとえ、彼女がその光景を知っているのだとしても、その光景を見ても耐えられるのだとしても、慣れているとしても、それでも見せなくて良いなら見せたくはない。兄として、彼女を守りたいと思う。軀も、心も。自分では役不足かもしれないと思う事もある。兄という割に、大事な時に彼女の傍に居る事が出来なかった。

虫が良いと思われても良い、許して貰えなくても良い。そう思つて、直ぐに自分の怠惰な発想を叱咤した。

そうやって自分から都合の良い殻に籠ろうとするのは卑怯だ。

彼女は自分を恨んではいないだらう。いつそのこと、恨んで貰つた方が楽なのかもしれない。それでも、自分からその都合の良い殻に籠る事は許されない。

だから、僕は妹を守る。たとえ役不足でも、今、彼女は近くに居て、手を伸ばせば届くものだから。

そして、最愛の友と慕う彼も

そして二人は少しの時間差で、その場に到着した。  
先に到着していたのはリリアー又だった。

ああ、とイシュメルは力なく声を上げる。

茫然と立ち竦むユーリと、彼を後ろから抱き締めるリリアー又と、  
四つの死体と、黒焦げた肉の破片。

「ユーリ、私は大丈夫だから、大丈夫だから」

言い聞かせるように、ユーリの服についた返り血に自分の顔と服  
を濡らしながら、自分の存在を示すように、ユーリを抱くリリアー  
又。

イシュメルは覚束無い足取りで表情の無いユーリの前まで歩き、  
血に濡れる頬に手を添えて

「君は其処に居るのか」

紡いだ。あの時の答えを知った。自分が何処にいるか解らないと、  
儂げな表情で言っていた彼を、叱咤するように、あるいは、慈しむ  
ように。頬を撫で、それでも表情を変えないユーリを見て、イシュ  
メルは涙した。

「戻っておいで…君の居場所は『其処』じゃない……『此処』だよ」

イシュメルは涙を流しながら、微笑を浮かべる。

悲しまないで、哀しまないで、僕も彼女も此処に居るから  
と。

君はもう十分哀しんだらう。だから、その分もっと笑わなきや  
駄目だ。僕も笑うから、君も笑ってくれ

## 12話 「行先」

結果から言えば、ユーリは『戻ってきた』。縦に割れていた瞳孔が元の円形に戻る。

ユーリは生気が灯り始めた瞳を一度揺らめかせて、イシュメルとリリアーヌを見た。

「ああ……。俺はまた」

自分を責めるように紡いだ言葉。

「良いんだ。戻ってきてくれたなら、今はそれで良い。大丈夫、君は生きてるから、これからなんとかすれば良い」

容易く彼の狂気を取り除く事が出来るとは思っていない。それでもイシュメルは言う。いつか必ず、変える事が出来る。

ユーリの銀髪にこびり付いた血を片手で拭き取りながら、もう一方の手で自分の目元を拭う。

「さあ、イゾルデとアガサが待ってる。戻ろう」

死と血の匂いが蔓延した場所から早く離れよう。

そう思ってイシュメルはユーリの腕を引っ張った。

リリアーヌも同じ事を考えていたようで、もう一方の手を引っ張る。

そうしてその場を後にした。



その場に残っていた魔力の残光から、イシユメルはユーリが両腕の刻印式魔術を発動した事を知っていた。来た道に戻りながら、ユーリに訊ねる。

「《神威》を使ったんだね。何発現世させた？」

「三発…だな」

出来れば、その時の光景をユーリに思い出させたくは無かったが、それでも、これから別の戦いがいくつもあると知っているからこそ、現状のユーリの力を正確に認識しておく必要がイシユメルにはあった。

「三発か…。刻印を刻んだ当初、君が神威を使えるのはせいぜい四発が限界だった。あまり『疲れている』ようには見えないけれど

魔力は使えば使う程精神的に疲弊する。同時に、精神の疲弊は肉体の疲弊を誘発させる。

だが、ユーリの顔に疲れの色は見えなかった。

「今の君の魔力限界を知っておきたい。君が《超過駆動》を起こしでもすれば大変なことになるからね」

超過駆動。《魔力枯渇》の状態から無理に魔術を発動する事を言う。

「超過駆動…ね」

「超過駆動を起こせば魔力の代わりに生命燃料が全部吸い取られて死ぬからね」

イシユメルはユーリの魔力限界を知っておきたかった。仮にユーリが魔力限界を越えて魔術を行使すれば、魔力の代わりに生命が術式に吸い取られ、彼は死ぬ。それだけはさせてはならない。ユーリの無茶を止めなければ。

幼少時の魔力限界は知っていた。神威四発分。一発を現世させるだけでも、優秀なエルフの魔術師十数人分の魔力が吹き飛ぶ代物だが、竜族の右眼に宿る魔力が四発の現世を可能にしていた。一発の消費が激しい為、三発も打つ頃には相当な疲労が襲いかかってくる筈だが、今のユーリはその様相を呈していない。

そこから推測すると

「ただ単に、君が『右眼』から魔力を引き出し切れて居なかったのか…」

「魔力が後天的に増える事は無い。ましてや、俺自身の物ですら無い右眼に宿る魔力が増える事なんかまずないだろう。右眼が身体に『馴染んで来た』事で、本来の魔力を引き出せるように成ってきているのかもしれない」

イシユメルは、その言葉を受けて、先程ユーリの『左眼の瞳孔』までもが縦に割れていたのを思い出した。そして『馴染んで来た』という言葉。推測する。恐らく

ユーリの軀は竜族の眼から十分に能力を引き出せるよう、器である軀本体を変異させている可能性がある。

竜の片眼を所持している人型種が古来居た訳でもなく、前例がある訳もなく、推測する事しか出来ない。

ユーリの身体が変異し始めているというのは、彼自身が最も知っているのだろうが、きっと彼はそれを有耶無耶にするだろう。

その『変化』を彼自ら享受しているかのようで

たとえ自分がどうこう言った所で、彼は「これで良い」と言うだろうと、イシユメルは何となく感じていた。

その変化が彼にとって忌避するべきものならば、出会った時に相談されているだろうから。ユーリの右眼の事をこの面子の中で最もよく知るのは自分で、ユーリがその右眼を享受した瞬間からレザール戦争で離ればなれになるまで最も長い間、ユーリの眼を観察していたのも自分で。

話を持ち掛けられるのは、イシユメルしか居なかった。だが、イシユメルは知らない。聞かされていない。

魔力限界を確かめたいが、ユーリの右眼が内包する魔力が莫大過ぎて底が見えない。

「何か気がついた事があれば、ちゃんと行ってよ？」

微笑を浮かべて言葉を紡ぐ事しか

「ああ、解ってるよ。そうする」

ユーリは微笑を浮かべて、そう返した。

ユーリ達がアガサとイゾルデが待つ踏み鳴らされた商業路に戻った時、其処は『惨状』と成っていた。

轟音。

商業路の手前で三人は轟音と揺れを感じた。

ユーリが真っ先に走りだし、イシユメルも走りだし、リアーナが後ろからついてく。

そして

「アレは……」

ユーリが繁みを抜けた所で足を止めていた。追いついたイシユメルが彼の視線を追う様に、眼前の光景を目の当たりする。

『化物』が暴れていた。

巨軀。人間の数倍の巨軀を持った獣だった。頭から生える二本の擦れ角。丸太の様な太さの腕。足。血の様に真っ赤な眼。吊りあがった口角から見え隠れする鋭牙。体色は真っ黒で、肌質は人間の物に近いがまるで強度が違うように見える。

その『化物』と対峙しているのは何人かの『賊』だった。手に持つ短剣で化物を斬りつけるが、まるで傷がつかない。対して、化物が片腕を横になぎ払えば賊の身体が千切れて吹き飛ぶ。例えるなら、矮小な虫と巨大な獣。

そして、獣を『使役』する『イゾルデ』。アガサは青鹿毛の馬に跨りながら、他の馬達が逃げないように進路を遮りつつ、何かを喋っていた。

「『グシオン』」

黒色の化物を見て、イシユメルが呟いていた。その名前を聞いて、ユーリが合点したように頷く。

「なんでグシオンがこんな所に……」

「イゾルデだ……。イゾルデが『呼んだんだ』」

黒色の化物　グシオンが再び腕を振り、地面を揺らしながら賊を千切って行く。賊達は絶対に勝てない。誰もがそう判断した。

最後の賊がグシオンの巨大な手に掴まれ、大木に投げつけられて潰れる。

獲物を全て食い散らかしたグシオンは、物足りないといった体で空に咆哮した。

「五月蠅いぞ、もう良いだろう？ 用があればまた呼ぶから、その時まで大人しくしている」

イズルデが紡ぐ。

グシオンは咆哮を止め、イズルデの方に向き直る。そして彼女に向かって『頭を垂れ』、イズルデの動作を待った。

イズルデはグシオンの頭に手を乗せ、褒めるように撫でる。すると、グシオンの頭に触れる手から瞬時に魔法陣が広がり、グシオンがイズルデの掌に吸い込まれるように消えて行った。

幾秒置いて、ユーリ達がイズルデに歩み寄る。イズルデは今までユーリ達が戻って来ていた事に気付いていなかったらしく、大きく眼を丸めていた。

「帰って来ていたのか？」

「少し前にな」

「それにしても 酷い恰好だな……」

返り血で汚れに汚れたユーリの姿を見て、苦笑するイズルデ。

「さっきのは」

「ああ、アイツは私の『子分』だ」

「グシオンだぞ？ グシオンだよな？」

未だに信じられないといった体でユーリが言った。

「いかにも。昔、まだ子供だったグシオンを拾ってな。戯れに育てたら懐かれた。以降、召喚契約を結んでから呼べば来るようになった。今は大陸北方の秘境で仲間達と暮らしていると聞いていたな。いつまでも近くに置いておくのも難しいから群れに返したんだが…。私の魔力を感じ取ると呼ばなくても寄ってくるから困っておるんだ。召喚魔術で呼ぶ際も身体がでかいから多大な魔力を喰うしな…」

別名《二本角の悪魔》。

生態系の上位に位置する獣である。普段は温厚な性格で、肉食だが、一度の食事の量は少ない。だが、敵対する者には全く容赦しない事である。人里離れた秘境に群れで居住区を持つ。こちらから手を出さなければたとえ真正面から対峙しても襲ってくる事はない。恐ろしい外見と、激昂した時の凄まじい戦闘能力から悪魔と恐れられるが、実の所、何もしなければ無害なのである。非常に知能が高い獣で、一部の個体は人語を解する者もいると言う。

「もしかして……あんなのと何体も契約してる訳じゃない…よな？」

恐る恐るユーリが訊ねる。

「ん？ まだいるぞ？ グシオンより『酷い』のも何体か。ひねくれ者が多くて困っているんだが…。その点、グシオンは素直で楽なんだ」

「無茶苦茶だ…」

さも当り前のように返すイズルデを見て、ユーリとイシュメルはつい頭を抱えてしまう。

「その話は追々として、酷い臭いだぞ？ 服は此処で棄てていけ。」

あと水で髪も洗い流しておけ。人が集まってこない内に進んだ方が得策だと思いがな」

「それもそうだな。アガサが巧い事馬達を留めて置いてくれたし、早めに此処を離れよう」

皆は馬に乗り、即座にその場を離れる。

積もる話は馬に乗りながらも可能だろう。

《悪魔を誘う魔女》。忌み嫌われたイゾルデの通り名だった。

馬を横一列に疾駆させながら、皆は情報を統合するように話をした。

「私が得意とするのは召喚術式だ。特に《生体召喚》だな。生体を召喚させるには転移系統の魔術式と、実際に呼び出す生体との契約術式が必要だが、各地を追われ点々としていた私は様々な『生き物』と出逢い、お互いに同意の上で何体かの生体と契約を結んだ」

「簡単に言うけど、生体召喚ってほぼ『忘却されし魔術』に分類される物だからね？ 生体との契約術式を完了させるのに数年、その後はその生体の為の独自の召喚術式を開発するのにさらに数年。術式は複雑だし、それに比例してかなりの魔力も必要だし…」

「平均寿命種にとっては忘却されし魔術群に分類されるかもしれないが、長命種にとってはそうでもないし解るだろう？ イシユメル。年数など私達にとっては重要ではない。魔力の方もな。まあ、

グシオンは特別だ。契約術式生成の段階で、アイツは私に何も求めなかった。それゆえ、召喚術式もかなり簡素な物になったし、供給魔力も他の術式に比べれば少ない方だ。他の奴の召喚術式は割と意味の解らない対価を求められたり、私に分が悪い契約になっていたりするからあんまり使いたくないんだがな…」

「なんでそんなのと契約したんだよ…」

ユーリがつつこむ。

「いざという時は實際役に立つんだ。呼んだ後が面倒だが命には代えられない、という所だな。ちなみに魔術装具作成は私の趣味というくらいに認識しておいてくれ。荒事には大抵召喚魔術を使うしな」「グシオンがまだ軽い方と言っただから、他の生き物はさぞおっかないんだろうなあ…」

「人前にほいほいと出すと非常に『不味い』のもいるからな」

「出来れば人前でそんなのを呼ばないように善処してくれよ」

「解っておる」

適当に返事を返すイゾルデ。

そこで、ユーリが後方を走るイシュメルとアガサに視線を移した。アガサにとっては刺激の強い映像だったかもしれない。イシュメルがなにやらアガサに話しかけているが、彼女の表情は暗いままだった。

「慣れるとは言えないな…」

「慣れてしまっている私たちの方が異端なのだからな」

ユーリ、リリアーナ、イゾルデの三人はお互いの力や姿を見ても大した感慨は得なかった。そういうものである、と簡単に納得できてしまう。

イシュメルにとっても刺激は強かった筈だが、当のイシュメルはそれを覚悟していた為か、あまり動揺していなかった。その様子がイシュメルの覚悟の強さを端的に表している様で、ユーリは少しだけ眉を顰める。



「結局：俺はイシユメルまで巻き込んだ……か。解ってはいたが、少し堪えるな」

「お前が気に病む必要は無いと思うぞ。イシユメル自身が望んだ結果だ」

とはいっても、血みどろの世界にイシユメルを引っ張り込んだのは自分しかいない。ユーリは罪悪感を感じずにはいられなかった。

「兄様頑固だし、今から何か言っても兄様は自分の意見を曲げないと思うよ？」

「それもそうか……。アルトナ族は頑固者が多くて困る」

「ユーリが言えた事じゃないけどね」

リリアー又はそう言って微笑を浮かべた。

「アガサ、大丈夫？」

「あたしの顔を見て大丈夫だと思うならお前の目は節穴だな」

「まだ皮肉が言えるなら大丈夫かな」

「ある程度の耐性はある。仮にも奴隷として幾許かの年月を過ごしたからな。だが……あんなのは見た事がない」

人の死と、死の残照が色濃く映る場所。戦場と呼ぶにふさわしい。アガサが見た光景はあまりに容易く人の死に様を映していた。

「ユーリの方に比べると、少しはマシだと思うよ。正直僕もあんな状態のユーリに声を掛けるのは若干気が引けた」

「そんなに恐ろしかったのか？」

「万人に通ずるような倫理観や秩序が全て崩壊した場所だったよ……」

そしてそれを体現しているのがユーリだった。『違うんだ』。『違う世界』なんだよ。ユーリが生きてきた世界は僕たちの知らない場所なんだ。……いずれ僕もそこへ踏み込むのかもしれないけど」「ユーリに付いて行く為には、か」

アガサはイシュメルの頼りない微笑を見て、察する。

「お前は優しいからな。優しすぎるくらいに。ユーリの後を追うのはイシュメルには辛い道じゃないのか？」

イシュメルは微笑を浮かべたまま一度頷いた。

「僕には辛いかもね。でも、ついていくと決めたから」

「……そうか」

アガサはイシュメルの表情から視線を外し、自分に問いかける。

「私はお前に付いていけるのかな……」

「アガサ。君はこちら側へ付いてこなくてもいいんだよ。君は僕達とは別の場所にいなきゃならない。僕達が戻れなくなった時に、君は僕達を救い上げて欲しい」

「随分身勝手な願いだな。まあい、解った」

アガサは強い意志を目に宿らせ、再びイシュメルの目を見据えた。覚悟の色。

「一度乗り掛かった舟だ。お前達が何をするか、どこまで行くのか、私は別の場所から観察しよう」

「辛い時は逃げてもいいよ？」

「おいおい、あれだけ言っておいてそれはないんじゃないか？」

「どっちも僕の本心だからね。どっちつかずなのさ」

またイシユメルは頼りない微笑を浮かべた。

賊の襲来から大事はなく、馬で走って半日ほどが経った。皆の耳にかすかな水の音が入った。リリアーヌが真っ先に声を上げる。

「ミロワール運河だよね！」

「どつやらそのようだな」

ユーリの返答でリリアーヌが歓喜する。

「早くっ、早く行こ！」

「落ち着けよ、リリイ。運河は逃げたりしないから」

アガサとイシユメルが顔を合わせて笑みを浮かべる。

ユーリがその様子に気づいて言葉を並べたが、彼女の顔には喜色が所々に散りばめられていて、

「仕方ない、急いでいくか」

ユーリが嘆息しながらもリリアーヌの要求に応えた。

四頭の馬はこれまでにないほど速く、その足を動かす。

弾ける水の音が徐々に大きくなり、ついにはその相貌を表した。

澄んだ水が、行列をなして目の前を闊歩していた。ジュラル森林を抜けたところは丘になっていて、そこから見下ろすミロワール

運河は光を反射していてやけに美しかった。

リリアー又は心底歓喜しているようで、言葉を紡ぐ事はなく、ただただその運河を見下ろしていた。

「知識と実物ではこんなにも違うものなのかね。国境線に定められるだけはある」

「全くだね、これは良いものを見たよ。エクシリア大陸最長の運河か…」

アガサが感嘆の声を上げ、イシュメルが賛同の意を示す。

ユーリも穏やかな視線をミロワール運河に投げかけた。

運河の幅は国境線と謳われるだけあって非常に広い。

ユーリ達はずかの間の驚嘆を心にしまい込み、丘を下ってミロワール運河の橋渡し役を捜すことにした。

丘を下って少し馬を走らせると、ミロワール運河に隣接して広がる港町があった。ミロワール運河を利用する商人や旅人の為の街である。

運河の岸边には大小様々な船が浮かんでおり、膨大な人数の行商達が所せましと船に乗り込んだり、船から降りたりしている。

「…日没が近いな。出来ればここで足止めを食わずに船に乗りたいものだ」

日没後の航海は視界の悪さを伴う為、あまり行われない。特にミロワール運河のように長大な運河の場合、水面の流れが読みづらくなるからだ。

ユーリはそれを危惧していた。

ヴェール皇国までの道のりで時間を使うのは得策ではない。

出来る限りの速さが求められる旅路。

「とにかく港の船乗りたちに航海時間を聞いてみよう。最悪無理を言っただけでもらうしかないかもね」

「そうだな。よし、行こう」

ユーリは馬の腹を蹴った。

日照が赤みを帯びてきて、より一層日没を知らせていた。

多くの船が隣接している港へ急ぐ。

運河際には貴族の屋敷と見紛うような立派な建物が立ち並んでおり、その周辺では遅い体つきの船乗りたちが船から荷を降ろしていた。

ユーリが馬から降り、船乗りの一人を呼びとめる。

「ちょっといいか」

「ん？」

強面の船乗りはユーリの声に気付いて振り向く。

「今からミロワール運河を渡りたいんだが船は出ているか？」

「残念だったな。この船が最後だ。乗客は満員、これ以上は人も馬も乗せられねえな」

船乗りはユーリの後方で控えるイシユメル達と、彼らが乗る馬を見て芝居がかった嘆息を吐き出す。

すると、ユーリが船乗りの眼の前まで歩み、彼の手を取って何かを握らせた。

「そこをなんとかするのが名立たるミロワール運河の船乗り達の腕の見せ所だろうか？」

口角を少しだけ吊り上げ、悪戯気な笑みを浮かべるユーリ。  
船乗りは自分の手に握らされた物をまじまじと見つめ、同じような笑みをユーリに返した。

「確かに。尤もだな。良いだろう、すぐに出立するから早く乗り込め。馬は船の中に備えられた厩に置いてくれ」

船乗りの手の中で銀色の光りを放つ『銀貨』が一枚。船乗りはその存在を確かめるように何度か手を握り、その後荷物を担いで船の中に消えて行った。

「だつてさ」

「随分慣れた風なやり口だね？」

「自分の意向を押しつけるにはそれなりの図々しさと代償が必要なんだよ。行こう。船が出立する」

イシユメルの言葉を適当に受け流し、ユーリは皆を促した。

満員と言っただけあって、船の中は様々な人間でごった返していた。客室の多い巨大な船だが、その客室の大体は埋まっている。ぎりぎりで乗船したユーリ達に正式な客室があてがわれる筈もなく、船に乗り込んだはいいがどこで船が向こう岸に到着するのを待とうか悩んでいた。

そこへ先程の船乗りがやってきて、ユーリに言葉を紡ぐ。

「同室を許してくれる客がいたから案内しよう」

「助かる。甲板で過ごすには風が冷たすぎると思ってたんだ」

「贅沢は言うなよ。こっちだって定員以上の客が乗船してることが船長にバレれば首が飛ぶんだからよ」

「察するよ。船長に俺達の存在がバレないことを祈っていてくれ」

ユーリは軽口を叩きながら皆を引き連れて船乗りの後を追って行く。

「ここだ」

船乗りが指さした方向には客室の扉があった。

同室を許してくれたという他の客に対して少しだけ緊張しつつ、その扉の取っ手を回す。

「失礼する。同室を許してくださった事を感謝します」

扉を開けて早々、ユーリが会釈をしながら言葉を紡いだ。

顔を上げ、客室の中にいる人物に目を向ける。

「気にしないでくれ。一人で使うには広すぎる部屋を取ってしまっただから丁度良かったよ」

ひらひらと手を振りながら答えたのは若い女だった。

無造作にはねている黒い短髪。目尻が少し上を向いている大きな目と、長いまつ毛。薄い唇の両端も少し上を向いていて、冷たい美貌という印象をユーリは抱いた。

「その上、こんな美人と同室出来るとは光栄です」

「御世辞でも嬉しいよ。君はよく口が回るね」

ユーリは自分が抱いた印象をそのまま口に出した。  
彼女は美麗な顔に嬉しそうな表情を貼り付け、ユーリに視線を向ける。

「そういう君も男とは思えないような美人だね。役者か何かかな？」  
「ただの旅人ですよ　　いてっ」

ユーリが女に見惚れていると、リリアーナがユーリの手の甲をつねり、イゾルデが足を踏んだ。

「はは、連れの人達も皆綺麗だ。私なんかとは比べ物にならないじゃないか」

女はその様子に気づいて再び嬉しそうに言葉を紡いでいた。  
そこで案内を終えた船乗りが口を挟む。

「俺は仕事に戻る。くれぐれも下船までは大人しくしてくれよ？」  
「俺の首が掛かっているからな」

「解ってる。無理を言っただけだ。恩に着る」

「それなりの物は貰ってるからこれぐらいはするさ。じゃあな」

そう言っただけで船乗りは廊下をそそくさと走って行った。

その背中にリリアーナが手を振る。

間もなくして、ユーリ達は船乗りに言われた様に女が寛いでいる部屋の中にぞろぞろと入って行った。

ユーリ達が部屋に入り、並べられた椅子に座り始めると、女が不



意に声を上げた。

「私は《レイ・アルカーナ》。しがないヴィオラ奏者でね。ヴェール皇宮からの依頼を受けて演奏しに行く所なんだ。差支えなければ君達の名前を教えてくれるかい？」

その言葉を受けてユーリが真つ先に答える。

「《ユーリ・ニア》。こっちは妹の《リリアーナ・ニア》」

ぎこちなさを微塵も感じさせない嘘。ユーリは顔に微笑を貼り付けながら、容易く偽名を口から発していた。名を名乗る位ならそこまで差支えはないが、ミドルネームと姓まで本来の物を使ってしまつと後々面倒な事になる可能性もある。名だけなら同名はいるだろう。

また、全く関係のない偽名を使つてしまえば、リリアーナや他の面々が反応できない場合もある。そのぎこちなさをレイが不審に思う可能性も捨てきれなかった。

次いで、ユーリがイシユメルを差して言葉を紡ぐ。

「そして兄の《イシユメル・ニア》とその婚約者の《アガサ・クリステイ》。最後に従姉いとこの《イゾルデ・カルンスト》」

イゾルデの黒髪はユーリやイシユメルと比べ色素が濃い。ユーリの銀髪とリリアーナとイシユメルの金髪はある程度似通っているため兄弟としてもそこまで疑われる事はないだろうが、イゾルデの黒髪は全く同じ血が通っている姉とは思えないかもしれない。そうユーリは判断し、咄嗟に従姉という設定にしていた。

「婚約者……だと」

「やったー、僕がユーリの兄になったぞー。ユーリの事だから自分が一番上になるうとしてると思っただけだなあ。一時期その事で言い争ったし」

アガサとイシユメルがレイに聞こえないような小さな声で各々の心境を吐露する。

「成る程、兄弟と従姉、そしてその婚約者か。旅行か何かかな？」  
「ええ、ヴェール皇国は美しい国だと聞いているので兄達の婚約祝いに、と」

「兄妹や親族が多くいるのはとても羨ましいな」

ユーリの微笑は崩れない。

(俺もそう思うよ)

ただ内心で苦い口調で呟く。

もとより兄弟はともかく、親族親戚全てを皆殺しにされ、たった一人でエスクード王族の血を宿すユーリにとってはレイの言葉は皮肉にしか聞こえなかった。

「ヴェール皇宮という事はレイさんは皇都デルサスに？」

「ああ、そうだね。私みたいな未熟な奏者が何故呼ばれたのかわかって思ったけど、ヴェール皇族の一人が大層私の演奏を気に入っているらしくてね。僭越ながら御呼ばれする形になったんだ」

レイは椅子の横に立て掛けていたヴァイオリンのケースを持ち上げながら言う。苦笑とも取れる表情でケースを撫で、再び椅子の横に立て掛け直した。

「何はともあれ、対岸に船が着くまでの短い間だけでもよろしく頼むよ、ユーリさん」

「ユーリで良いですよ。こちらこそよろしくお願いします」

ユーリは口調も表情も偽りながら、船が対岸に着くのを待っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0303y/>

---

ノスタルジア・エンドロール 亡国再興記 【改訂版】

2011年11月21日23時43分発行